MESA BOOGIE®

MARK·FIVE™

取扱説明書

Hello from the Tone Farm

この度はMARK Vをお買い求めいただき誠にありがとうございます、そしてメサ・ファミリーへようこそ!お選びいただいたこのアンプは、ハイ・ゲインのチャンネルを切り替える機能を持つ、伝統的な部分と先進性を兼ね備えた、ビンテージ真空管アンプです。リア・パネルの右側を見ると、開発した回路や機能（偽物に注意）に関する９つもの特許の記述があり、プレーをする事で、他のアンプでは得られない誇りを感じる事が出来ます。

４０年に渡って、私達はミュージシャンに対して様々な事を約束し実行してきました。今、あなたがこのアンプを手にしているという事が、それに対する答えだと我々は認識しています。そして、この新しいアンプにギターを繋いで音を鳴らしたら、数分のうちにあなたが笑顔になっていることを我々は確信しています。しかし、あなたがこのアンプの真価を知るのは、もっと時間が経ってからの事でしょう。それはもしかすると、このアンプを手に入れるのに支払った額を忘れてしまうほど先の事かもしれません。MARK Vは、それほど奥深い価値を持ったアンプなのです。

私達は、ご自身のサウンドを実現する為にメサを選んで下さった事に感謝すると同時に、日々の努力が報われる手助けが出来る事を願っています。このマニュアルは、それを実現するのに役立つ事でしょう。あなたは今、限りない表現力を持つ楽器を手にしているのです。さあ、遥かなる音楽の旅に出かけましょう。メサのスタッフ全員があなたを応援します!

MARK·FIVE™

目次

使用上のご注意
概要：フロントパネル ____ 1-4
概要：バックパネル ____ 5-6
始めましょう ____ 7-10

チャンネル
チャンネル1 ____ 11
チャンネル2 ____ 12
チャンネル3 ____ 13
製作者からの手紙 ____ 14-16

モード
チャンネル1：概要 ____ 17
チャンネル1：NORMAL / BOLD ____ 17
チャンネル1：CLEAN ____ 18
チャンネル1：FAT ____ 18-19
チャンネル1：TWEED ____ 19-20

チャンネル2：概要 ____ 20
チャンネル2：MARK I NORMAL / THICK ____ 20
チャンネル2：EDGE ____ 21
チャンネル2：CRUNCH ____ 21
チャンネル2：MARK I ____ 22

チャンネル3：概要 ____ 23
チャンネル3：NORMAL / BRIGHT ____ 23
チャンネル3：MARK IIC+ ____ 24
チャンネル3：MARK IIC+ ヒント ____ 24-25
チャンネル3：MARK IV ____ 26-27
チャンネル3：EXTREME ____ 28

フロントパネル：EQ, パワー・セレクト
イコライザー・セクション ____ 29-30
パワー・セレクト：90W SIMUL CLASS ____ 30
パワー・セレクト：45W EXTENDED CLASS A ____ 31
パワー・セレクト：10W CLASS A ____ 31-32

フロントパネル：コントロール
GAIN（ゲイン） ____ 33
MASTER（マスター） ____ 34
PRESENCE（プレゼンス） ____ 34-35
TREBLE（トレブル） ____ 35-36
MID（ミッド） ____ 36
BASS（バス） ____ 37

フロントパネル：機能
OUTPUT（アウトプット） & SOLO（ソロ） ____ 38
SOLO: PULL MUTE（プル・ミュート） ____ 38
LEDインジケーター ____ 39
STANDBY（スタンバイ） ____ 39
FULL POWER / VARIAC POWER ____ 39

バックパネル：機能
FUSE（フューズ） ____ 40
EXT SWITCHING（外部スイッチング） ____ 40
EFX LOOP（エフェクト・ループ） ____ 40-41
REVERB（リバーブ） ____ 41
整流器切り替え ____ 42
チャンネル3：TRIODE / PENTODE ____ 42
SPEAKERS（スピーカー） ____ 43
TUNER OUT（チューナー・アウト） ____ 43
SLAVE（スレーブ） ____ 43
BIAS SELECT（バイアス選択） ____ 43

サンプル・セッティング ____ 44-45
ユーザ・セッティング・テンプレート ____ 46-47
スピーカー：インピーダンスと接続ガイド ____ 48-50
真空管機能表 ____ 51-52
パーツ・シート ____ 53-58

使用上のご注意

この説明書を読んで下さい。

この説明書をなくさない様に保管して下さい。

注意事項を必ず読んでからお使い下さい。

安全事項にも従って下さい。

水の近くで当製品を使用しないで下さい。

汚れた時は乾いた布で拭いて下さい。

換気口を塞がないで下さい。説明書に従ってインストールして下さい。

暖房機器や、他のアンプなど、熱を発する機器の近くに置かないで下さい。無理やり、形の違うコンセントに挿さないで下さい。有極プラグは片方のブレードが幅広くなっています。アース付プラグは２つのブレードの他にアース端子も付いています。アースは安全の為のものです。自宅のコンセントに差し込めなかった場合、電力会社に相談して下さい。

電源ケーブルを踏んだり、曲げたりしないで下さい。

落雷の恐れがある時や、長時間使用しない時は電源ケーブルを外して下さい。

修理が必要な時は専門家に依頼して下さい。ケーブルがダメージを受けたり、本体が傷ついたり、濡れたり、落として壊れたりした場合、修理に出して下さい。

換気の為に本体の後ろに必ず10センチ程度のスペースを空けて下さい。換気口の上に新聞、テーブルクロスやカーテン、といった物を置かないで下さい。

ロウソクや火が付くような物を本体の近くに置かないで下さい。

濡れている物も本体の近くに置かないようにして下さい。

注意：安全のため、本体を雨や湿気に晒さないで下さい。

なるべくコンセントの近くに設置して下さい。

注意：必ず適切な接続をしてからアンプを操作して下さい。そうしないとアンプが故障する可能性があります。

直射日光や高い湿度は避けるようにして下さい。

必ずアースを接続して下さい。

解体したり、ヒューズやチューブを交換したりする前に必ず電源ケーブルをコンセントから外して下さい。ヒューズを入れ替える時は、必ず同じタイプのヒューズを使って下さい。

動作中にチューブに直接触れないで下さい。

子供に触らせないで下さい。

故障を避けるため、ケーブルなどを接続する前に電源を切って下さい。

汚れを取るのに溶剤を使用しないで下さい。

必ず本体の裏に表示されている条件を満たすAC電源を使用して下さい。輸出モデルは各国の電圧に合わせてあります。お住まいの規定に従って電源に接続して下さい。

大きな音が出ますので、スピーカーに耳を近づけないで下さい。

Mesa/Boogieアンプはプスペック用の機材ですので、規定に従って扱って下さい。

上記の取り扱い注意事項と安全管理事項を必ず読んで下さい!

取扱説明書

概要:フロントパネル

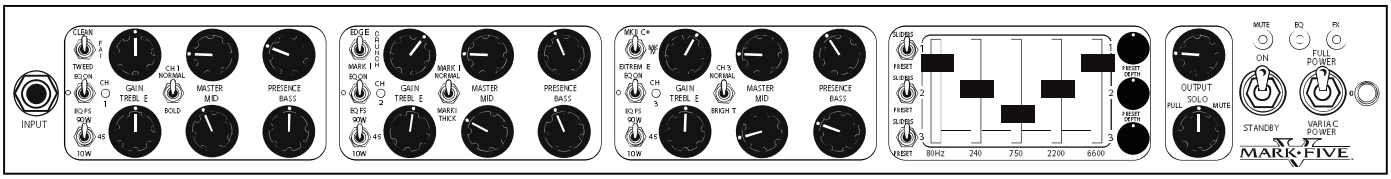
MARK Vは、アンプをたくさん持っているようなものです。このアンプには、１台のアンプとは思えないほど多くの回路と、サウンドが詰まっています。また、このアンプには、メサの歴史が息づいています。プリアンプをカスケード接続する、ハイ・ゲイン・アンプとして世界に紹介されたMARK Ⅰから、世界初のハイ・ゲイン・デュアル・モード・チャンネル切り替えアンプのMark Ⅱの開発、そしてその流れは、後にサイマル・クラス・パワーへと繋がっていきます。MARK Ⅲは、３チャンネルのフットスイッチ切り替え方式の先駆者となり、MARK Ⅳでは、これら全てを個別にコントロール出来る様になりました。MARK Vは、この４０年に渡るギター・アンプの歴史の集大成とも言えるものです。

プリアンプ:

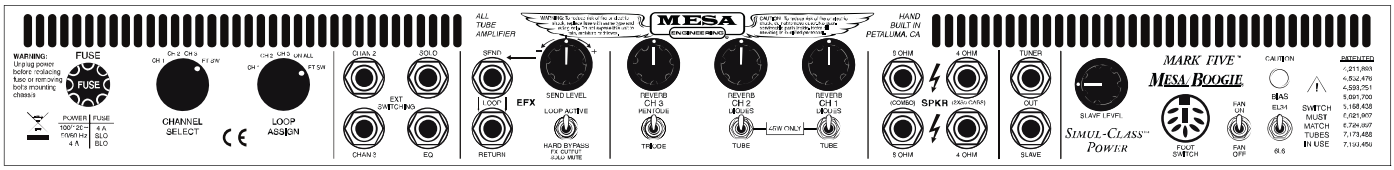
３つのチャンネルは、それぞれ個別に、さらに３つのフットスイッチで切り替え可能なサウンドを持っています。そのサウンドは、シンプルなつまみでコントロールする事が出来ます。このつまみで、サウンドの様々な要素をコントロールします。各プリアンプ・チャンネルは、３つの個別のモードからなっており、モードの切り替えは、各チャンネルの左上にある、シンプルで小さなトグル・スイッチで行います。このスイッチは、各チャンネルのボイシングに影響を与えます。このボイシングにより、ゲイン構造や音質が変化し、それが音楽的な違いに現れます。ゲインとEQを変えると、劇的にサウンドが変化する一方、コントローラーの設定を変えなくても、ボイシングを切り替えると、サウンドは変わります。この事から、特定のサウンド・スタイルには、回路構成と一連のトーン・コントロールの両方が必要である事が解ります。また、極端なモードの違いのおかげで、異なるゲインやトーン・コントロールにより、象徴的なサウンドになる事があります。言い方を変えると、モードを切り替えながら、トーン・コントロールを触ってみれば良いのです。このアンプの回路は許容量が多いので、極端な設定をしても大丈夫です。このマニュアルを読んで、実際に音を鳴らしてみる事を数多く経験するうちに、モードとトーン・コントロールを、自然に理解出来る様になりますので、心配はいりません。

チャンネル１は、３つのチャンネルの中で最も低いゲインとなっており、リズム・サウンドやクリーン・サウンドに向いています。他の２つのモードは、ソフト・クリップ、メディアム・クランチ、ハイ・ゲイン・リズム・サウンド等に向いています。トグル・スイッチを上のCLEAN（クリーン）にすると、タイトで細いサウンド、真ん中のFAT（ファット）にすると、低音域が強調されて、暖かみのある豊かなクリーン・サウンド、下の TWEED （ツイード）にすると、ハイ・ゲインで押しの強いサウンドになります。チャンネル１全体のボイシング・スイッチを BOLD（ボールド）にすると、中音域の高い方でパンチと切れが出始め、ヘッドルームが増して濃密なサウンドになります。

フロントパネル: *MARK V*™



バックパネル: *MARK V*™



概要:フロントパネル(続き)

チャンネル 2は、ロー・ゲインのチャンネル１と、ハイ・ゲインのチャンネル３の、中間のゲインになります。このチャンネルは、モード間の違いが最も大きく、ボイシング・モードを切り替えた時に、トーン・コントロール有効に働きます。トグル・スイッチを上のEDGE(エッジ)にすると、イギリスのサウンドに触発されたローからミッド・ゲインの攻撃的なサウンド、真ん中のCRUNCH(クランチ)にすると、中音域の低い方が強調されたクランチ・サウンドになり、ゲインを上げると、アタックがタイトになります。そして下のMARK Iにすると、１９７０年の小さなブギー・アンプの象徴的なハイ・ゲイン・サウンドになります。このクリーミー・ボイスは、分厚い低音で満たされており、単音のソロ・サウンドを太くします。このモードでGAIN(ゲイン)を高く設定した時は、BASS(バス)コントロールをかなり低め(オフから１０時)に設定すると、アタックのキャラクターがベストになり、音が鈍くなるのを避ける事が出来ます。NORMAL(ノーマル)/ THICK(シック)スイッチは、MARK Iモードにのみ有効であり、単音に輪郭を持たせる中音域を加えます。

チャンネル 3は、MARKシリーズの中でもベストのオーバードライブ・サウンドをもたらします。トグル・スイッチを上のMK II C+ にすると、純粋で輪郭のくっきりしたサウンドになります。これは、８０年代の代表的なギタリストである、ジョン・ペトルッチ、ジェームス・ヘトフィールド、カーク・ハメット、そして、ロサンゼルスのセッション・プレーヤーの代表格の、スティーブ・ルカサー、マイケル・ランドウ、ディーン・パークス等のサウンドに象徴される、伝統的なブギー・ボイスです。

グラフィックEQの伝統的な"V"カーブは、このサウンドには欠かせないものになっており、ハードなヒッティング・パンクや９０年代から２０００年代のハードコア・バンドを経て、現在に至るまで、多くのギタリストに好まれています。オリジナルのMARK II Cは、運良く見つけられたとしても、定価の数倍の価格で取引されています。燃えるようなサウンドを正確に再現したこのモードは、チャンネル３の土台になっています。トグル・スイッチを真ん中のMARK IVにすると、中音域が分厚いゲインと、ピークが抑えられた高次倍音が相まって、ふくよかなサウンドになります。トグル・スイッチを下のEXTREME(エクストリーム)にすると、全てが解き放たれた回路から出力されるサウンドは、フル・ゲインで攻撃的になり、他の楽器を全てかき消してしまわんばかりです。EXTREME(エクストリーム)が選択されていると、ボリュームが急に上がるので、注意して下さい。NORMAL(ノーマル) /BRIGHT(ブライト)スイッチは、チャンネル３の３つのモード全てに影響します。

EQUALIZER(イコライザー):

MARK Vは、アンプをたくさん持っているようなものです。このアンプには、１台のアンプとは思えないほど多くの回路と、サ５バンドのオンボード・クラフィックEQは、１９７０年にMARK Iが登場して以来、MARK シリーズ・ブギーのトレードマークになっています。周波数特性を決定するパワーを持ったこの機能は、MARK IIの、タイトで輪郭のしっかりしたゲイン・サウンドに、もはや欠かす事が出来ません。８０年代に、MARK IIやMARK IIIモデルで一世を風靡した、EQのクラシック"V"設定は、ヘヴィー・ロックの新たなるサウンドを確立し、ロックの歴史にオンボード・クラフィックEQの名を刻みました。

MARK Vのトーン・コントロールは、正確尚かつ広い帯域に影響を及ぼします。その一方で、信号経路の初期の段階でトーン・コントロールがなされる関係で、コントロールのバランスを崩す可能性があります。１つの例として、チャンネル２、３のバス・コントロールが挙げられます。MARK IやMARK II-Cモードでバスを高い設定にすると、プリアンプが飽和状態になってしまい、輪郭のぼやけたサウンドになってしまいます。

グラフィックEQは、信号経路の最終段にありますので、ここで形作られた周波数特性は、アンプの最終出力として、スピーカー・キャビネットに送られます。低音域の２つの周波数帯、80Hzと240Hzはパワーが強いので、特にチャンネル・パワー・スイッチが５０ワットと１０ワットの時は、ヘッドルームが影響を受けますので注意が必要です。

各チャンネルには、それぞれ５バンド・グラフィックEQのオン/オフを設定する、小さなトグル・スイッチを装備しています。MARK Vには、この５バンド・グラフィックEQのオン/オフの方法が２つあります!

それは、本体のスイッチとフットスイッチです。各チャンネルに３つあるトグル・スイッチの内、真ん中にあるのがEQのオン/オフ・スイッチです。このスイッチを上にするとEQがオンになり、真ん中にするとオフになり、下にするとフットスイッチでオン/オフを切り替えられる様になります。

また、グラフィックEQセクションの左にあるトグル・スイッチで、各チャンネルのグラフィックEQモードを選択します。このスイッチを上のSLIDERS(スライダー)にすると、グラフィックEQのスライダーの設定が有効になり、下のPRESET(プリセット)にすると、伝説の"V"カーブになります。

概要:フロントパネル(続き)

PRESET(プリセット)モードにすると、さらにPRESET DEPTH(プリセット・デプス)コントロールでプリセットの周波数設定のEQを効かせる度合いを調整することができます。例えばチャンネル３でSLIDERS(スライダー)を選択して、あなた独自の設定にした場合、チャンネル１、２でPRESET(プリセット)を選択すれば、２つの異なるサウンドにする事が出来ます。

この２つの機能を使いこなせば、グラフィックEQは各チャンネルに、かなりの柔軟性をもたらします。EQ機能とトーン・コントロールを組み合わせる事で、あなたの音作りのイメージはさらに広がる事でしょう。MARK V に備わっている、このような周波数特性をコントロールする機能は、あなたの長い音楽人生に、大きく貢献する事でしょう。このアンプは、あなたの音楽制作を進化させ、あなたのプレーヤーとしてのポテンシャルをフルに引き出してくれる事に、疑いの余地はありません。

POWER(パワー):MULTI-WATT(マルチ・ワット)

各チャンネルの左にある、３つのトグル・スイッチの内、一番下にあるのが、MULTI-WATT(マルチ・ワット)スイッチです。この機能は、各プリアンプ・チャンネルのワット数と、パワー構成タイプを決定します。どのアンプも、50%のプリアンプと50%のパワーアンプでサウンドが作られていますので、このスイッチは、チャンネルの個性を決める上で大きな役割を果たしています。３つのチャンネル全てに、90 W、45 W、10 Wの選択肢があります。使い方は簡単: チャンネル毎に、３つのワッテージから１つを選択するだけです。大きなヘッドルームを必要とする、輪郭のしっかりしたサウンドを求めているなら、９０ワットを選択すると良いでしょう。

MARKシリーズ・アンプの心臓部に、サイマル・クラス・パワーが搭載された１９８０年以来、爽やかなサウンド・キャラクターを提供し続けてきた伝統が今、このクラシックMARKに活きずいているのです。爽やかで透明感のある高音域が揺らめくクリーン・サウンド、ベッドに横たわる様に広がる低音域や、豊かな中音域で構成されるサウンドは、太いサイマル・リード・トーンを生み、単音のソロ・サウンドに最適です。

この特許技術を採用したパワー構成は、２組のペアーのパワー管に、異なるバイアスをかけることにより、様々なサウンドを作り出す事に成功しています。

アンプのオペレート・クラスについて話を始めると、それだけでこのマニュアルがいっぱいになってしまうので、ここでは詳しく触れません。オペレート・クラスについて詳しく知りたい方は、http://www.mesaboogie.com/US/Smith/ClassA.htm にアクセスして、"Class A: Exposed and Explained"をご覧下さい。

簡単に説明すると、サイマル・クラスとは、２組の異なるタイプのパワー管を、同時に動作させるという事です。１組のペアーをクラスAで動作させてトーンを決め、もう１組のペアーを伝統的なクラスABで動作させて、大きなパワーと、クリーンなヘッドルームを生み出します。１９８０年に登場して以来、サイマル・クラスは進化と発展を遂げ、追従性の粗っぽさは、ほとんどなくなりました。

Mark II-C+ では、常に三極管構成をクラスAで動作させていますが、MARK Vでは、リア・パネルのトグル・スイッチの設定により、チャンネル３でそれを実現しています。真空管のパワー感度を下げる事により、三極管構成のペアーは、クラスAの動作領域に入ってきます。その結果、ダイナミックなコンプレッションと、多くの倍音成分が生成される事になり、サスティーンの伸びたソロ・サウンドになります。しかしこの時、クリーンなヘッドルームは、少なくなってしまいます。

それでは、パワー・レベルの話に移りましょう:９０ワットにすると、４基の6L6 を２つの異なるバイアスで動作させる、フルのサイマル・クラス・モードになります。この時、パワーとヘッドルームが最大になります。１００ワットのアンプと比べたら若干少なくはなりますが、充分な爽やかさと暖かみのあるサウンドになります。また、耳障りの良いパンチのあるサウンドを生み出します。

４５ワットにすると、外側の6L6ペアーをオフにして、内側の２基のみを動作させます。クラスABで動作させてはいますが、バイアスが低いので、クラスA領域を拡張したレベルになります。チャンネル３では、三極管構成に切り替える事が可能で、そうすると、クリーン・ヘッドルームは大雑把にいうと半分になります。

このような正反対のスタイルの構成タイプを組み合わせる事により、１台のアンプでビンテージとモダンなアンプを両立する事が出来るのです。ヘッドルームとパワーが充分なだけでなく、自然で音楽的なしなやかさを持ったサウンドが耳や手に届き、良いプレーを触発してくれます!

概要:フロントパネル(続き)

PRESET(プリセット)モードにすると、さらにPRESET DEPTH(プリセット・デプス)コントロールでプリセットの周波数設定の１０ワットにすると、6L6全体を構成し直し、5U4をプッシュ・プル無しのシングル・エンデッドのクラスAで動作させた状態に近くなります。これは、超低ワッテージの回路であり、本物のビンテージ回路のエッセンスが、色濃く反映されています。この設定は、第２倍音(基音の１オクターブ上)が打ち消される(プッシュ・プル回路により)事が無いので、音に後光が射した様に引き立ちます。クリップも徐々に現れるので、クリーン・サウンドからいきなりオーバードライブ・サウンドになるような事はありません。

MARK Vの、この３つのパワーの選択肢は、音楽スタイルや会場に、即座に対応出来る柔軟性を与えてくれます。実際のところ、これは異なるタイプやパワーのアンプを３台所有しているのと同じです。さらに、個別のプリアンプ・チャンネルのパワーを組み合わせれば、EQやパワーの選択肢も広がり、広範に及ぶサウンド・コレクションが１台のシャーシに詰まっている事になります。そして太字で強調したい事; それは、我々と皆さんの目指すものが同じであるという事です。

OUTPUT(アウトプット)とSOLO(ソロ):

この２つのコントローラーは、リア・パネルのエフェクト・ループ・スイッチが上のLOOP ACTIVE(ループ・アクティブ)になっている場合に、MARK Vの出力レベル(ボリューム)をコントロールします。エフェクト・ループ・スイッチが下のHARD BYPASS (ハード・バイパス)になっていると、OUTPUT(アウトプット)とSOLO(ソロ)は無効になり、各チャンネルのMASTER(マスター)コントロールで、ボリュームをコントロールします。エフェクト・ループはアンプの全ステージに掛かり、そのステージの後ろにOUTPUT(アウトプット)とSOLO(ソロ)が来ます。HARD BYPASS(ハード・バイパス)機能は、レコーディングの時や、３つのチャンネルの切り替えで、ソロ演奏のバランスがとれる時に使用します。

OUTPUT(アウトプット)コントロールは、チャンネルMASTER(マスター)で設定した各チャンネル間のバランスに関係なく、MARK Vの出力レベルを上げたり下げたりします。

SOLO(ソロ)コントロールは、OUTPUT(アウトプット)に並列接続されており、フットスイッチ切り替えが可能な、アンプ全体のマスター・ボリュームです。ソロの演奏をする時にスイッチで切り替える事により、事前に設定しておいた量のブーストが行われます。使い方は、単純に出力レベルを事前に設定しておくだけです。MARK Vのフットスイッチで SOLO(ソロ)を選択し、SOLO(ソロ)コントロールで上げたいボリュームレベルを設定します。

ノート: SOLO(ソロ)コントロールは、OUTPUT(アウトプット)コントロールで設定したレベルよりも上げる事は出来ますが、下げる事は出来ません。

ノート: SOLO(ソロ)に切り替える前に、SOLO(ソロ)コントロールのレベルが高すぎる設定になっていない事を確認して下さい。

STANDBY(スタンバイ)は、パワー管に掛かっている高い電圧を落として、アイドリング状態にします。これは電源を入れる時の最初の手順です。パワー・スイッチをオンにする時は、必ずSTANDBY(スタンバイ)にして最低３０秒経ってから、STANDBY(スタンバイ)からオンにして下さい。この手順を踏む事で、パワー管の寿命を延ばす事が出来ます。STANDBY(スタンバイ)にする事で、スピーカーを変更する時に音をミュートする事が出来ますし、アンプをクール・ダウンしたり真空管の交換をする事も出来ます。

POWER(パワー・スイッチ)に組み込まれているVARIAC(バリAC)は、アンプに掛かる電圧を下げる機能です。この電圧が下がる事により、アンプ全体のサウンドが変化します。中音域が減衰して緩さが増すことで、ビンテージっぽさが強くなって、クリップし易くなります。FULL POWER(フル・パワー)にすると、ヘッドルームが最大になり、輪郭のあるパンチの効いた "通常" モードの動作をします。

概要:バックパネル

４つの選択をするCHANNEL SELECT（チャンネル切り替え）コントロールは、３つのチャンネルとフットスイッチ（接続されていれば）の中から１つを選択します。フットスイッチを使用しない場合は、単純に使用するチャンネルを選択します。フットスイッチを使用する場合は、このつまみを、一番右の（後ろから見て）FT SWと表示されている所まで回します。リア・パネルのFOOT SWITCH（フットスイッチ）と表示されているDIN端子にフットスイッチのケーブルを接続します。

５つの選択をするLOOP ASSIGN（ループ・アサイン）は、エフェクト・ループを、どれか１つのチャンネル、全てのチャンネル、のどれにアサインするか、あるいはMARK Vのフットスイッチでエフェクト・ループをオン/オフするのかを選択します。エフェクト・ループがLOOP ACTIVE（ループ・アクティブ）になっていないと、LOOP ASSIGN（ループ・アサイン）は機能しません。

ノート: リア・パネルほぼ中央にある、LOOP ACTIVE（ループ・アクティブ）/ HARD BYPASS（ハード・バイパス）スイッチでエフェクト・ループをオンにする前に、OUTPUT（アウトプット）レベルを確認して下さい。これを怠ると耳やスピーカーを傷める事があります。

４つの外部スイッチ用フォーン端子は、MARK Vのチャンネル、EQ、ソロをマスター・スイッチャーでリモート・コントロールします。この機能は、MARK V をライブ・ステージで使用する時に、とても重要な役割を果たします。その際に、必要な全てのアンプの設定やプロセッサーの設定を、マスター・スイッチャーにプログラムしておく事で、１つのキーですべてを切り替える事が出来ます。

ノート: ４つの外部スイッチ用フォーン端子には、一般的なグランド・タイプのラッチ・スイッチを接続する事が出来ます。この方式はほとんどのマスター・スイッチャーで採用されています。

エフェクト・ループは、HARD BYPASS（ハード・バイパス）機能を持っています。この機能は、音声信号が全ての真空管（２つのステージ）と、それに関連する回路を全く通らなくしますので、ギターの出力を直接出力したい場合に便利です。このスイッチを、上のLOOP ACTIVE（ループ・アクティブ）にすると、エフェクト・ループが有効になりますので、SEND LEVEL （センド・レベル）コントロールで、エフェクト・プロセッサーへのレベルが適正になる様に調整します。

ノート: HARD BYPASS（ハード・バイパス）は、OUTPUT （アウトプット）とSOLO（ソロ）コントロールをバイパスしますので、各チャンネルのMASTER（マスター）コントロールが全体のレベルコントロールにもなる事を覚えておいて下さい。

各チャンネルに個別のREVERB（リバーブ）コントロールを装備しましたので、チャンネル毎に異なるバランスで、豊かな全真空管リバーブをかける事が出来ます。MARK V のフットスイッチで、リバーブ・エフェクトのオン/オフを切り替える事が出来ます。

PENTODE（五極管）/ TRIODE（三極管）を小さなトグル・スイッチ（リバーブ・コントロールの下に位置する）で切り替えて、チャンネル３の内側のパワー管の構成を変更します。これはMARK IVに装備されている機能であり、アタックの感じが変化し、ハイ・ゲインにすると瑞々しいサウンドになります。PENTODE（五極管）は、太くて中域が著しいタイトなサウンドを生み出します。また、パーカッシブさが加わった優雅なサウンドは、ロー・ゲインの単音ソロ・サウンドに向いています。TRIODE（三極管）は、アタックが柔らかくなって中域が減衰したサウンドを生み出します。そのサウンドは瑞々しく、ハイ・ゲインにすると速いフレーズやレガート奏法に向いています。

切り替え式整流器は、MARK シリーズでデビューし、整流器トラッキングの形で使用するのは、MARK Vが初めてです。チャンネル１と２には、個別に小さなトグル・スイッチ（リバーブ・コントロールの下）が装備されており、上のDIODES （ダイオード）にすると、シリコン・ダイオードの特徴である、大きなヘッドルームのタイトで太いサウンドになり、下のTUBES（真空管）にすると、爽やかで緩い低出力のサウンドになります。この設定は、４５ワットの時のみ使用可能で、９０ワットにすると、シリコン・ダイオードが自動的に選択され、１０ワットにすると、真空管が選択され安全な範囲で動作します。

スピーカー出力には、８オームと４オームのジャックが、それぞれ２基ずつ装備されています。このジャックには、ほとんどのスピーカー・キャビネットを接続する事が出来ます。MARK Vは、インピーダンスのミスマッチには、あまりシビアではありませんので、アンプの損傷を気にする事無く、いろいろなキャビネットを試してみて下さい。インピーダンスが異なると、レスポンスが変わります。８オームは、パンチがあってタイトなサウンドを、大きなヘッドルームから生み出します。８オームか４オームで駆動すると、パワー管の寿命は長くなります。

概要:バックパネル(続き)

TUNER OUTPUT(チューナー・アウト)にチューナーを接続すると、スピーカーから音を出さずにチューニングをする事が出来ますので、ライブ・パフォーマンスの時に便利です。この端子にチューナーを接続して、MARK Vのフットスイッチの TUNE(チューン)ボタンをタップすると、スピーカー出力がミュートされます。

SLAVE OUTPUT(スレーブ・アウト)とSLAVE LEVEL(スレーブ・レベル)コントロールは、MARK Vのプリアンプとパワー・セクション全てを通ったサウンドが出力されます。このサウンドは、エフェクト・プロセッサーや、他のパワーアンプに送る事が出来ます。

ノート: SLAVE OUTPUT(スレーブ・アウト)に機器を接続する時は、耳やスピーカーを傷めない為に、SLAVE LEVEL(スレーブ・レベル)コントロールを絞りきった状態で行って下さい!何も接続していない時も、SLAVE LEVEL(スレーブ・レベル)コントロールを絞りきっておいた方が安全です。

FOOT SWITCH(フットスイッチ)のDINジャックはリア・パネルの右側にあり、7 ピンのDINケーブルでMARK Vのフットスイッチを接続します。

冷却ファンのオン/オフ・スイッチを使用すると、スタジオや真夜中に低いワッテージで練習する時には、オフにして静かにする事が出来ます。パワー管を良い音で長持ちさせる為に、出来る限りファンは回しっ放しにする事を推奨します。基本的にファンの音が気にならない限り、いつもオンにしておきましょう。

最後はBIAS(バイアス)選択スイッチです。このスイッチはパワー管に、EL34と6L6のどちらか使用している方を選択します。EL34パワー管は、明るくて広い帯域の倍音成分を豊富に含んだ、クリップ・サウンドを生み出します。このサウンドは、特にレコーディングに最適で、チャンネルの切り替え機能が必要ないほどの個性の強さを持っています。6L6パワー管は、バラエティーに富んだサウンドを生み出す事が出来ますが、その中でも特に、大きなヘッドルームが生み出す、クリーンで太くて豊かなサウンドは特筆ものです。BIAS(バイアス)スイッチは、必ず装着しているタイプに合わせて下さい!

ノート: パワー管を交換した時は常に、正しい真空管がこのスイッチで選択されている事を確認して下さい! この設定を誤ると、アンプを損傷する事がありますので注意して下さい!

ここまでは、MARK Vの概要とMARKシリーズの歴史についてみてきました。さあ、ここからはいよいよ機能やコントローラーを詳しく、実際に音を出しながら確認していく事にします。MARK V に関する理解を深めて、あなただけのサウンドを作る事に役立てて下さい!

始めましょう:

1. アンプを箱から取り出したら、全ての真空管（プリアンプ管、大きなパワー管、整流管）のプラスティックを取り外します。このとき、全ての真空管がソケットにしっかり入っているかを確認して下さい。メーカーから出荷されて運搬途中で緩んでしまう可能性があるからです。

2. 電源コードをコンセントに接続します。

3. フットスイッチを箱から取り出して、7 ピンDINのフットスイッチ・ケーブルを、リア・パネル右側にあるFOOT SWITCH（フットスイッチ）のDINジャックに接続します。リア・パネルの左端にあるCHANNEL SELECT（チャンネル切り替え）をFTSWにします。ノート: コネクターが合っていればスムーズに入りますので、ケーブルを接続する時は無理矢理ねじ込まないで下さい。

4. MARK Vのリア・パネルのスピーカー出力端子に、インピーダンスの合ったスピーカー・エンクロージャーを接続して下さい。MARK Vには、インピーダンスが８オームのスピーカー・エンクロージャーを接続すると、フルパワーを引き出す事が出来ますし、バランスのとれた音質になります（コンボ・バージョンは、８オームのスピーカー・エンクロージャーが接続された状態で出荷されています）。

5. STANDBY（スタンバイ）スイッチをSTANDBY（スタンバイ）側にして、POWER（パワー）スイッチをFULL POWER（フルパワー）側にします。この状態を最低３０秒保つ事で、真空管のフィラメントが暖まり準備が整います。電源を入れる時にこの手順を守る事で、真空管を良い音で長く保つ事が出来ます。

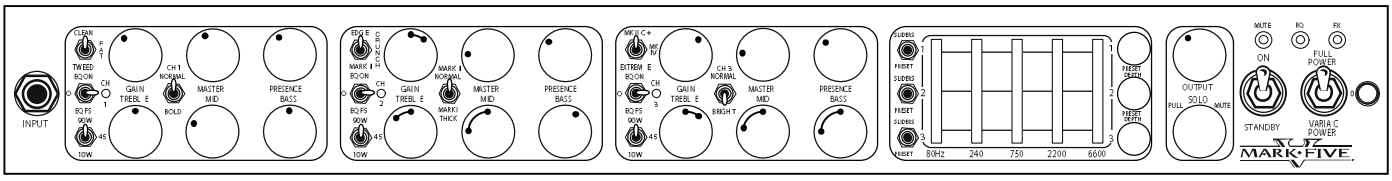
6. エフェクト・プロセッサーを接続する場合は、エフェクト・ループに正しく接続して下さい。ただし、最初はエフェクトプロセッサーを接続せずに、MARK V本来のサウンドを確認する事をお勧めします。エフェクト・ループを使用する場合は、まずフロント・パネル右端のOUTPUT（アウトプット）レベルを、９時よりも低く設定します。これで耳やスピーカーを傷める事を避けられます。STANDBY（スタンバイ）スイッチをON（オン）側にする前は、必ず低くしておく事を覚えておいて下さい。

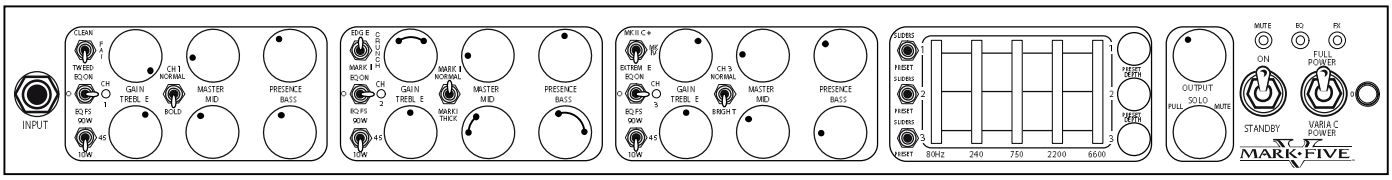
7. 下のサンプル設定を参考にしてコントローラーを設定し、実際に音を出してみましょう。サンプルを一目見るだけでも、多くの可能性が感じられる事と思いますが、これはあくまでもたたき台です。これを微調整するだけで、あなたのオリジナルになるのです。サンプルからかけ離れても気にする事はありません。とにかくいろいろと試してみる、これにつきるのです。

8. STANDBY（スタンバイ）スイッチをON（オン）側にして、演奏を開始しましょう!

サンプル設定:

下のサンプルは、３つのチャンネルを切り替える事で、異なるサウンドになるような設定です。このアンプでは、数えきれないほどのサウンドを作る事が出来ますが、このマニュアルを読み終える頃には、自分の求めるサウンドを素早く作れるようになっている事でしょう。





始めましょう:

役立つヒント:

1. フットスイッチでチャンネルを切り替えたい場合は、リア・パネルのCHANNEL SELECT（チャンネル切り替え）をFTSWにします。

2. OUTPUT（アウトプット）とSOLO（ソロ）は、エフェクト・ループを使用していて、信号がある時のみ有効です。エフェクト・ループを使用しない場合は、各チャンネルのMASTER（マスター）コントロールで、ボリュームをコントロールします。エフェクト・ループを有効にして、OUTPUT（アウトプット）とSOLO（ソロ）を使用するには、リア・パネルのエフェクト・ループ・スイッチを上のLOOP ACTIVE（ループ・アクティブ）にしてEFX SEND LEVEL（エフェクト・センド・レベル）コントロールを１２時にします。ノート: フロント・パネルのOUTPUT（アウトプット）を９時以下にして下さい。

3. SOLO（ソロ）機能は、フットスイッチのソロ・ボタンか、リア・パネルのEXTERNAL SWITCHING（外部スイッチ）ジャックで有効にします。フットスイッチが接続されていないと、ライブ・パフォーマンスで使用する事は出来ません。SOLO（ソロ）機能を使用する為には、エフェクト・ループが有効になっていなければならない事を覚えておいて下さい。

4. SOLO（ソロ）は、フットスイッチで切り替えた時に、OUTPUT（アウトプット）で設定したレベルをブーストする機能です。これは、OUTPUT（アウトプット）で設定したレベルよりも下げる事は出来ません。

5. GAIN（ゲイン）とTREBLE（トレブル）は、どのチャンネルにおいても、音を形作る為の、最も強力なコントローラーです。このコントローラーは、全てのモードにおいて、アタックのキャラクターやサウンド全体の個性を決定します。全てのチャンネルの偉大なサウンドの多くは、この２つのコントローラーを中位の設定にすると得られます。GAIN（ゲイン）を高めに設定している時は、TREBLE（トレブル）を２時よりも高く設定しないで下さい。これをしてしまうと真空管がフィードバックを起こして、ハウリングが発生します。

6. GAIN（ゲイン）を高めに設定していて、高音域が欲しい場合はEQ を使用して下さい。EQは信号経路の中でも最後にありますので、プリアンプ管にストレスをかける事無く、高音域を上げる事が出来ます。MARK Vは、あらゆる面において高いパフォーマンスを誇るアンプです。ドライブするだけなら、必要ないのではないかと思えてしまうほど、高いレベルにチューニングされた車のようなものです。全てのコントローラーを中位に設定するだけで、驚くべきパフォーマンスを発揮します。時が経つと、ただ車を走らせているだけでは満足出来なくなって、性能の良いタイヤを履かせたくなるのと同じ様に、プリアンプにも特別な設定をして、他とは違う音を出したくなるものです。

7. チャンネル３のEXTREME（エクストリーム）モードにすると、他の２つのモードの時よりもボリュームが大きくなった様に感じるでしょう。これは、パワー・セクションでネガティブ・フィードバックが起きているからです。

8. PRESENCE（プレゼンス）は、チャンネル２と３、そしてチャンネル１の TWEED（ツイード）モードでハイ・ゲインにしている時に、音を形作るのにとても強力な役割を果たします。低めに設定すると、太くコンプレッションが掛かったサウンドになり、音の輪郭がしっかりします。高めの設定にすると、あらゆる帯域の倍音成分が溢れる様になります。プリアンプの余力を使って、リード・サウンドを微調整してみて下さい。

始めましょう:

9. チャンネル２と３では、特にGAIN（ゲイン）の設定が高い時は、BASS（バス）の設定を高くし過ぎない様に注意して下さい。BASS（バス）が多過ぎると、アタックがぼやけて、締まりのないサウンドになってしまいます。チャンネル２のMARK 1モードでは、GAIN（ゲイン）を高め（１時半より上）に設定したら、BASS（バス）コントロールを極端に低く（８時半）あるいはオフにしても良いかも知れません。チャンネル３ではBASS（バス）コントロールを少し高くしても良いでしょう。しかし基本的なルールは守って下さい; GAIN（ゲイン）を上げたらBASS（バス）を下げる。

10. １つだけ例外があります。それはチャンネル２のEDGE（エッジ）モードです。このモードでは、他のどのモードよりもBASS（バス）を高めに設定する事が出来ます。低音域を高めに設定出来る様にプリアンプが設計されていますので、サウンドが太くなり過ぎない程度に、BASS（バス）コントローラーを回してみて下さい。

11. チャンネル２のMARK 1 NORMAL（ノーマル）/ THICK（シック）スイッチは、チャンネル左上のモードスイッチがMARK 1 の時のみ有効です。THICK（シック）は、中低音域のゲインを増しサウンドを太くします。そのサウンドは、単音ソロ・サウンドや、グライド・クランチ・コード・サウンドに向いています。

12. NORMAL（ノーマル）/ BRIGHT（ブライト）スイッチは、チャンネル３の全てのモードに有効です。NORMAL（ノーマル）は、丸く豊かで暖かみのある、純粋なソロ・サウンドになります。BRIGHT（ブライト）は、あらゆる帯域の倍音成分を含んだ、クラシック・ブギーの、空に舞い上がっていきそうなサウンドです。

13. TRIODE（三極管）/ PENTODE（五極管）スイッチは、リア・パネルのリバーブ・コントロールの下に位置しており、チャンネル３のパワー管の構成にのみ影響します。TRIODE（三極管）にすると、アタックが柔らかく、瑞々しいサウンドになります。PENTODE（五極管）にすると、アタックがタイトになって、中域にパンチが加わり、ヘッドルームが大きくなります。

14. 切り替え式整流器は、リバーブ・コントロールの下にあり、チャンネル１と２の４５ワットの時（フロント・パネルの各チャンネル左下のパワー選択スイッチ）のみ使用可能です。４４ワット・モードでは、真空管かシリコン・ダイオードを選択します。９０ワットにすると、シリコン・ダイオードが自動的に選択され:１０ワットにすると、真空管が選択され安全な範囲で動作します。

15. チャンネル２をMARK 1モードで使用する時は、EQ（スライダーでもプリセットでも）の設定に注意して下さい。特に80Hzと240Hzを高く設定すると、低音域で溢れかえってしまいます。このモードでゲインを高くすると、なおさら低音域が強調されてしまい、出力の小さなアンプですと、スピーカーを傷める事にも繋がりますので注意が必要です。

16. MARK V のパワー・セクションで、３つのモードを切り替えて使用すると、スピーカー・インピーダンスは、サウンドに大きな影響を与えます。８オームのスピーカーを８オームのスピーカー出力端子に接続すると、３つのチャンネル全てに於いて、最もバランスのとれたサウンドになり、パフォーマンスも良くなります。しかし、サイマル・クラスの出力セクションは不思議な事に、インピーダンスの合っていないスピーカーを接続すると、素晴らしい音になる事があるのです。１つの例として、８オームのスピーカーを、４オームのスピーカー出力端子に接続して、４５ワットモードを使用すると、新たな発見があります。このような接続をしても、アンプに損傷を与える事はありませんので安心して下さい。この接続は技術的には、"ミスマッチ"なのですが、サウンド的には良い場合があるのです。ただ１つだけデメリットがあるとすれば、それは、あまりにも頻繁に特に低い方へのミスマッチ（８オームの出力に４オームのスピーカー）を続けると、パワー管の寿命が少し短くなるという事です。

始めましょう:

17. BIAS（バイアス）スイッチ（リア・パネルの右端）は、必ず装着しているタイプに合わせて下さい!アンプを運搬したら、振動でスイッチの設定が変わってしまう事があるので、必ずスイッチの位置を確認して下さい。
ノート: BIAS（バイアス）スイッチの設定が間違っていると、アンプを損傷し修理が必要になります。

18. 最低1台のスピーカー・キャビネット（コンボあるいは追加のキャビネット）が接続されているMARK Vを、あなたが立っている床の上に直接置くことにより、カップリング効果で気持ち良く演奏出来るだけでなく、アンプの音が良くなります。このカップリング効果は、特に低い周波数帯のサウンドを太くし、弦を弾いている感覚を強調します。アンプを床の上に直接置くことが重要です。床が木（ステージの様に）であればなお最高です! ギターはとても不思議な楽器です。日が変わったり場所が変われば、ギターも変化します: カップリング効果は、基本的にアンプを床に直接置く事により得られるのですが、ステージ上にマイクがたくさん置かれている場合は、アンプを床から浮かせた方が良い場合があります。

19. チャンネル1のCLEAN（クリーン）モードで、音量を小さくしていて、クリップ・サウンドが欲しくなったら、TWEED（ツイード）モードを試して下さい。このモードと、45ワットや19ワットの組み合わせは、軽い歪みを生み出し、ビンテージ・ブレークアップ・サウンドになります。

20. STANDBY（スタンバイ）スイッチは、電源を入れる時、休憩するとき、ケーブルを繋ぎかえる時、数分間演奏をしない時等、こまめに使用して下さい。これを心がける事で真空管を良い音で長く使う事が出来ます。

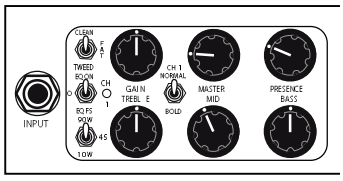
チャンネル:

MARK Vは、３つのチャンネルが全て多様性が高いので、リズム、クランチ、リードといった分野分けをするのがとても難しいアンプです。ほとんどのプレーヤーが、最初はクリーン・サウンドはチャンネル１、オーバードライブのリズム・サウンドやコード・サウンドはチャンネル２、単音ソロ・サウンドはチャンネル３といった使い分けをしています。この使い方が悪い訳ではないのですが、MARK V には、他のアプローチもあります。３つのチャンネルには、さらにそれぞれに３つのタイプがある事も事実です。言い方を変えるなら、チャンネル３でクランチ・リズム・サウンド、チャンネル２でクリーン・サウンド、チャンネル１をブーストしてソロ・サウンドにといった事も可能な訳です。ですのでここでは、各チャンネルにスタイルを当てはめるのはやめて、チャンネル毎のゲイン構造について考えてみましょう。このような考え方をする事で、あなたの音作りに対するアプローチが変わり、よりイマジネーションを広げる事が出来る様になる事でしょう。MARK Vは、無限の表現力を持った楽器であり、ゲインとトーン・コントロールにより、あなた独自のサウンドを作る事を手助けするアンプなのです。

ここからは、各チャンネルのゲイン構造について詳しく説明していきます。これを理解したら、あとは、必要に応じてご自身で様々な事を試してみて下さい。

チャンネル 1:

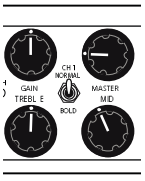
３つのチャンネルの中で最も低ゲインです。CLEAN（クリーン）とFAT（ファット）の２つは、クリーン・サウンド用の構造です。CLEAN（クリーン）と名付けられたモードは、爽やかで弾けるような低ゲインの美しさを持ち、FAT（ファット）は強い低音域と空気感をサウンドに加えます。この２つのモードは、最も大きなヘッドルームと、ダイナミック・レンジと、感度を誇ります。また、圧縮は最も少なく、音の立ち上がりは最も速くなっています。



メディアム・ゲインのTWEED（ツイード）モードは、押しの強いオーバードライブの掛かった “クリーン”サウンドです。TWEED（ツイード）は、中低音域のゲインが増え、クリップした時にサウンドを滑らかにして、音に太さを与えます。この増えたゲインが、音の立ち上がりを遅くしサスティーンを与えるので、音が太くなった様に感じるのです。TWEED（ツイード）モードでバランスのとれたダイナミックな演奏をすると、コード・サウンドでも緊迫感のある単音ソロ・サウンドでも良い結果が得られます。

チャンネル1: NORMAL（ノーマル）/BOLD（ボールド）

このスイッチは、チャンネル１全体に対して機能します。２つの選択肢があり、１つは中域から中高域、もう１つは高音域の低い方のボイシングを行います。NORMAL（ノーマル）は、バランスのとれた滑らかなレスポンスを示します。このモードは、ゲインを強めにしてドライブをかけると、爽やかなクリーン・サウンドとクリーミーなソフト・クリップ・サウンドを生み出します。このモードは、特定の周波数帯域が突出する事が無いので、リズム・ワークに最適です。また、グラフックEQや、PRESET（プリセット）に対するレスポンスも自然です。

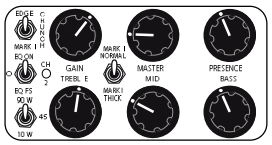


BOLD（ボールド）は、中音域から高音域にかけて、メリハリのあるパンチの効いたサウンドになるので、他の楽器と混ざった時に埋もれてしまう事がありません。そのサウンドはパワーが増して、ヘッドルームの大きなサウンドが、スピーカーから飛び出してくるような印象を受けます。さらにTWEED（ツイード）モードでオーバードライブ・サウンドにすると、突き刺すような攻撃的なアタックになります。BOLD（ボールド）モードでは、TREBLE（トレブル）、MID（ミッド）、PRESENCE（プレゼンス）を微調整する事で、サウンドやフィーリングを最適にする事が出来ます。

チャンネル：（続き）

チャンネル 2:

この"クロスオーバー"チャンネルは、ハイ・ゲイン・モード(EDGE)で最も低いゲインと、広い周波数帯でハイ・ゲインのモード(MARK I)で構成されています。チャンネル2は、このチャンネルだけで、普通のアンプ１台分を遥かに超えるサウンド・コレクションになります。



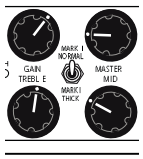
EDGE（エッジ）は、チャンネル２の中で最も低いゲインであり、EQの効きがとても良いモードです。分厚い低音域をEQで少し減衰させる事により、ダイナミック・レスポンスやアタックのスピードを速くする事が出来ます。ゲインを中位にすると、クラシック・ロックのブロークンアップ・コード・サウンドになります。ゲインを高く設定すると、明瞭度の高い単音ソロ・サウンドになります。

CRUNCH（クランチ）は、メディアム・ゲイン・モードであり、低音域から中音域のゲインと、バスにより低周波数帯域の音が加えられて、サウンドが丸くなります。このモードは、タイトさとアタックの速さを残しつつ、滑らかなサウンドを生み出します。EDGE（エッジ）よりも低音域に広がりがあります。ダイナミック・レスポンスは、まだ速さが残っていますが、ゲインを上げると、自然な真空管のコンプレッションが始まります。CRUNCH（クランチ）は、リズム・コード・サウンドにも単音ソロ・サウンドにも最適な、歪み過ぎていないオーバードライブ・サウンドです。

MARK Iは、チャンネル２の中で最も高いゲインであり、チャンネル３の全てのモードのゲインと同じです。これが、チャンネル２を単純に"リズム"チャンネルと呼べない理由でもあります。リトル・ブギー1x12コンボが１９７０年にブレークし、MARK Iは、歌うような、そして吠えるようなサウンドで、一躍メサを有名にしました。全周波数帯域でゲインが増し、厚く豊かな倍音の壁が、最大のサスティーンと歪みの、オーバードライブ・サウンドを生み出します。MARK I のサウンドは、豊かな低音域と、太い単音ソロ・サウンドで知られています。特にソロ・サウンドは、メロディーを引き立たせてくれます。このゲインの壁は、形を変える事が出来ますので、単音ソロ・サウンドとしてだけでなく、純粋な低いゲインのコード・サウンドや、ブルース・サウンドにする事も出来ます。ゲインを高めに設定すると、驚くような単音ソロ・サウンドになりますし、BASS（バス）とMID（ミッド）を低めにして、EQを強めにかける事で、砕けんばかりのヘヴィー・コード・サウンドになります。

MARK I : NORMAL（ノーマル）/THICK（シック）

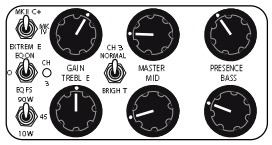
このスイッチは、トレブルの周波数帯域のボイシングを切り替えます。このスイッチを上のNORMAL（ノーマル）にすると、周波数が高く弾けるようなサウンドになり、下のTHICK（シック）にすると、周波数設定が低くなり中音域の高い方が太いサウンドになります。このスイッチは、MARK Iモードの時のみ有効であり、EDGE（エッジ）とCRUNCH（クランチ）の時は無効です。NORMAL（ノーマル）は、ロー・ゲインのコード・サウンドと、爽やかな高次倍音のブルース・サウンドに向いています。THICK（シック）は、豊かなゲインで太さを増した単音ソロサウンドや、ハイ・ゲインのリズム・サウンドに最適です。NORMAL（ノーマル）は、"ブラック・フェース"を彷彿させ、THICK（シック）は、イギリスのアンプを思い起こさせます。



チャンネル：（続き）

チャンネル 3:

このチャンネルは、MARK V 全体で最もゲインが高く、伝説の名器MARK II-C+とMARK IVに敬意を捧げています。チャンネルの方向性はハイ・ゲイン・サウンドであり、多彩な表現力とダイナミックなメディアム・ゲインからロー・ゲインのサウンドは、GAIN（ゲイン）コントロールを低く（１２時半未満）設定する事で得られます。繰り返しになりますが、MARK Vは全てのチャンネルの多様性が高いので、分野分けをするのがとても難しくなっています。



MARK II C+ は、まさにそのものです。このモードは、伝説の回路のLEAD（リード）モードが、細部に至るまで忠実に再現されています。猛烈なゲインと爆発的なアタックが、倍音の変化を触発して生まれたソウルフルなサウンドは、２０年に渡ってロックの最前線に君臨してきました。タイトで中音域にパンチのあるサウンドは、グラフィックEQとMARK II C+のハイ・ゲイン・サウンドの象徴である、クラシック"V"設定により、色付けする事が出来ます。

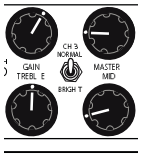
MK IV モードは、MK IVのリード・チャンネルを忠実に再現しています。MK IVのリード・チャンネルのサウンドと、MK II C+モードの明るいサウンドを組み合わせる事で、このモードの構成を、暖かみのあるサウンドにする事が出来ます。MK IVモードは、中音域のゲインが豊富なので、高次倍音が少なめの印象があります。チャンネル２のMARK Iモードと比べると、サウンドに厚みが感じられる一方で、中音域にタイトさは残しています。このサウンド・キャラクターは、クラフィックEQで加工するのに最適です。MARK I モードのように、プリアンプの最初の段階で形作られた低音域とは異なり、クラフィックEQで加工する事が容易です。

EXTREME（エクストリーム）は、まさに文字通り極端なサウンドです! このモードは、MARK IVを基本に構築していますが、このチャンネルのMK IV モードとは正反対のボイシングをしています。押しが強く、攻撃的でタイトなサウンド・キャラクターを持っており、MARK Vの９つのモードの中で、最も高いゲイン構造をしています。チャンネル３でEXTREME（エクストリーム）を選択すると、他の２つのモードの時よりも音量が大きく感じますが、これは音質に影響を与える事無く抑える事が出来ます。
このモードにすると、音がつぶれてダイナミクスがなくなります。EXTREME（エクストリーム）は、最大のゲインでヘヴィー・スタイルの音楽を演奏するのに最適です。

ノート: EXTREME（エクストリーム）でパワー・セクションの感度を上げると、パワーアンプを強くドライブしますので、バックグラウンド・ノイズが大きく聞こえます。これは普通の現象ですので、警告はありません。

チャンネル3 : BRIGHT（ブライト）/NORMAL（ノーマル）

このスイッチは、チャンネル３の、３つのモード全てのサウンドの高次倍音の量を決定します。モードによっては、スイッチを切り替えた時に、音が前に出てきますが、それは、そのモードのサウンドに含まれる高音域の量によります。信号経路のどこで倍音成分をコントロールするかによって、明るさを増したり減らしたりする事が出来ます。例えば; MK IVモードよりもMK II C+モードで、このスイッチを切り替えた時の方が、サウンドの変化は大きくなります。それは、MK IV モードの方が高音域が減衰しているので、このスイッチをBRIGHT（ブライト）にしても聴覚上の効果が少ないからです。



このスイッチを下の**BRIGHT**（ブライト）にすると、元音の周りが高次倍音で満たされます。GAIN（ゲイン）を上げると、高次倍音の増加が著しくなり、MK II C+モードとEXTREME（エクストリーム）モードでは、特にBRIGHT（ブライト）回路の働きが強くなります。この２つのモードのハイ・ゲインのコード・サウンドには、BRIGHT（ブライト）モードで加えられる倍音が最適と言えるでしょう。このモードでは、プリアンプの最初の段階で高音域を付加しますので、そのあとPRESENCE（プレゼンス）やグラフィックEQでサウンドをさらに形作る事が出来ます。

このスイッチを、上の**NORMAL**（ノーマル）にすると、高次倍音を減衰させるので、暗めで暖かみのある単音ソロ・サウンドになります。NORMAL（ノーマル）は、ロー・ゲイン・サウンドに厚みを与え、低出力のピックアップで、ハイ・ゲインの設定をした時にありがちな、サウンドの不必要なざらつきを取り除いてくれます。

チャンネル：（続き）

製作者からの手紙: A.K.A トーン・ボーイことダグラス・ウエスト

僕の個人的な思いを語ってほしいとランディーに頼まれたのでここに記します。"私達"ではなく"私"と書くのがちょっと変な感じがしますが、あくまでも私の個人的な経験をお話しします。

１９８２年から１９９１年まで私はここメサで、R&D、カスタマー・サービス、取り扱い説明書の執筆をこなしながら、完成したアンプの検査をしていました。私は、ギターをプレーしながら、MARK II Bを改造したり、MARK II C+を設計したりと、ランディーと一緒に仕事をこなしていたのです。その頃、アタックと倍音に特徴のあるサウンドを探し求める過酷な業務をこなしていた私に、愛情の籠ったニックネーム、"トーン・ボーイ"が授けられたと記憶しています。当時は、ランディーを相当イライラさせていたとことでしょう。大げさな話や大ぼらを吹いていましたから。彼はいつでも私の話を聞いてくれたものです。ここで私はランディーに深い感謝と最高の敬意の気持ちを伝えたいと思います。ランディーはギターは弾きませんが、私と同じく、よりキレイな音が作れるという確信がありました。そして、彼はその音を作ることに成功したのです。私と、その音を愛する他のギターリストたちからも、本当にありがとう!

とにかく、MARK Vをお買い上げ頂いたお客様には、このアンプのチャンネル３について特別にお教えしたいことがあります。特に、MARK II C+やMARK IVをご利用になられたお客様は、MARK VからもII C+やIVと同じような音を出したり、古いアンプと聞き比べてみたりするでしょうから、その際に知っておいた方がいいと思われる、ちょっとした裏情報をお教えしたいと思います。

昔、量産されたII C+を毎日毎日テストしていた頃、グラフィックEQの付いていないアンプはグラフィックEQの付いたアンプよりも、音の立ち上がりが速くて正確な音がすると思っていました。音のパンチが強く、とにかくEQ付きアンプよりはタイトなサウンドでした。量産されたアンプの７０パーセント位にEQが付いていましたが、私は毎日いくつものアンプをずっと聞き比べていたので、違いがよくわかりました。EQ付きアンプの方は、もちろん音の形作りに向いていて、EQのおかげでII C+で独特な音がたくさん作れましたが、生の音の話になると、やはりEQの付いていないアンプの方が、音の立ち上がりが速くて強い音が出せました。

結局、私はII C+ サイマル・クラス・リバーブ（グラフィックEQ無し）アンプの中で良い音のするもの８台を手に入れました。この８台のアンプたちは、私がテストした何千台ものアンプの中から選択したものでした。この８台のうち、特にお気に入りのアンプがありました。このアンプを"Cアンプの王様"と名付けて、開発チーフであったマイケル・ベンディネッリさんに、他の７台のアンプを、これと同じ設定にしていただきました。ポット値、抵抗、カップリング・コンデンサー、トランジスタ等を全部調整したところ、結局どのアンプも同じ音になりました。その中でも、やはり王様は、MARK IVを含めて、多くのMARKシリーズアンプの見本として使っていました。

あの頃からは、もう２０年ほど経っているので、流石にその古いアンプの何台かは他の機材と入れ替えたり、友達に売ったりしました。しかし、王様は今でも大切に保管しています。それは、王様は今でも、ものすごくキレイな音が出る神のようなアンプだからです。

そういった経緯から、MARK Vのチャンネル3の音をデザインした時、当然Cアンプの王様にお尋ねしてみました。そして、王様は答えて下さいました。

EQ有りのII C+、EQ無しのII C+、そして王様の音を全部聴き比べてみたところ、やはり私の気のせいではなく、実際にEQ有りと無しでトーンの違いがありました。結局犯人は、EQ回路の最終段にあるカップリング・コンデンサーでした。このカップリング・コンデンサーはEQモデルだとかなり大きくて、超低域を通して、若干音の立ち上がりの遅い太い音を作っていました。しかし、私の好きなEQ無しのアンプでは、カップリング・コンデンサーがより小さくて、超低域をあまり通さず、音の立ち上がりの速いタイトで緊迫感のある音でした。この簡単なパーツのちょっとした違いだけで、音がかなり変化していたのです。

チャンネル：（続き）

しかし、音の立ち上がりの遅い、太い音のEQ付きアンプの方が多く作られたわけですから、そのアンプの音に慣れている方も多いはずです。MARK Vの音を強制的に音の立ち上がりが速くてタイトになる様にカップリング・コンデンサーを設定したら、皆様のお馴染みの音と違う音になってしまうのではないかと思いました。MARK Vの音をグラフィックEQ付きのII C+や、同じカップリング・コンデンサーの付いたMARK IVと比べた時に、立ち上がりが速くてよりタイトな音だけど、低域が足りないとか太さが足りないとか思ってしまうお客様がたくさん出てくるのではないかと心配しました。そういった事を鑑みて、私たちは両方の音が出せるように作りました。

MARK Vは、音の立ち上がりが速い音でも太い音でも、どちらでも出せます。

チャンネル3のII C+モードは、小さい方のカップリング・コンデンサーを使用しています。これでタイトなアタックと素早いレスポンスが得られる様になります。更に、プリアンプで超低域が若干抑えられるため、EQで低域をかなり上げても音がこもるようなことはありません。II-CやMARK IVのサウンド・キャラクターに慣れているお客様でも、このモードではEQを使ったタイトなハイ・ゲイン・サウンドが出せるので是非お試し下さい!

MK IVモードとEXTREME（エクストリーム）モードでは、大きなカップリング・コンデンサーが使用されていますので、アタックが若干遅くなり、超低域が多めの大きくてゆったりとした音が出ます。80Hzと240Hzのスライダーを上げて低域を強調すると、すぐに低域が大きくなって、音量が大きくなったと感じるので、気をつけて調整して下さい。

要点をまとめると、タイトで緊迫感のある、速いアタックで最大の明瞭度を持ったサウンドを求めているなら、MK II C+モードを使って下さい。それほどレスポンスの速さを求めず、暖かみがあって大きな太いサウンドを出したかったら、MK IVモードとEXTREME（エクストリーム）モードを使って下さい。

ところで: これで作戦成功! MARK Vは、Cアンプの王様並にMARK II-Cトーンが出せます。しかも、MARK Vの信じられないような汎用性とバラエティーに富んだサウンド・コレクションを考えれば、どんなII-Cアンプだってマーク Vには勝てません。

ノート: II-C+とMARK IVのオーナーの方へ

II-C+をLEAD（リード）モードにして、MARK VをII-C+モードに設定して隣り合わせにすると、公平な比較が出来ます:

II-C+を次の様に設定します:

- 左端のVOLUME（ボリューム）コントロールを引っ張ってブライトをオンにして、だいたい７位（MARK Vはこの位のステージがスイート・スポットになります）まで回します。
- LEAD DRIVE（リード・ドライブ）コントロールを引っ張って、求めるサウンドになる様に設定します。
- 全てのトーン・コントロールを、なるべく近いサウンドになる様に聞き比べながら調整します（メサでは各つまみが同じになる様にオーム・メーターで計測しています）。
- PRESENCE（プレゼンス）を求める設定にします。（０か１０にすると最も公平に比較が出来ます）
- グラフィックEQオフ（バイパス）

MARK Vを次の様に設定します:

- GAIN（ゲイン）コントロールを音を聞きながら、II-Cの LEAD DRIVE（リード・ドライブ）のつまみの位置と同じになる様に設定します。
- トーン・コントロールを、音を聞きながら、II-Cの LEAD DRIVE（リード・ドライブ）のつまみの位置と同じになる様に設定します。（トーン・コントロールのつまみの順番が、II-Cは TREBLE、BASS、MID、MARK V はTREBLE、MID、BASS になっている事を忘れないで下さい）
- チャンネル 3のBRIGHT（ブライト）スイッチをBRIGHT にします。
- リア・パネルのチャンネル3のTRIODE（三極管）/PENTODE（五極管）スイッチをTRIODE にします。
- リア・パネルのEFX LOOP（ループ）スイッチをACTIVE（アクティブ）にします。

チャンネル：（続き）

注意: EXTREME（エクストリーム）モードは、どちらのアンプでも大きな音が出ます。この設定をする時は、ボリュームを絞りきった状態から始めて下さい。

MARK IVを次の様に設定します:

- チャンネル 3 (リード)
- 左端のLEAD GAIN（リード・ゲイン）を引っ張って７位まで回します。
- LEAD DRIVE（リード・ドライブ）コントロールを引っ張って、求めるサウンドになる様に設定します。
- チャンネル 3 (リード) のトーン・コントロールを、求めるサウンドになる様に設定します。
- 全てのコントロールを引っ張ります。(EXTREMEの比較をしない場合は、LEAD PRESENCEを引っ張る必要はありません)
- PRESENCE（プレゼンス）を求める設定にします。（０か１０にすると最も公平に比較が出来ます）
- リア・パネルのTRIODE（三極管）/PENTODE（五極管）スイッチをPENTODEにします。

MARK Vを次の様に設定します:

- チャンネル3 をMK IVかEXTREMEモードに設定します。(MARK IVの設定と同じにします)
- MARK IVのLEAD DRIVE（リード・ドライブ）の設定と"時計の針"の関係が合う様にGAIN（ゲイン）を設定します。
- チャンネル 3のトーン・コントロールが、Mark IVの設定と"時計の針"の関係が合う様にします。
- チャンネル 3のBRIGHT（ブライト）/NORMAL（ノーマル）スイッチをBRIGHTに設定します。
- チャンネル 3のPRESENCE（プレゼンス）をMARK IVの設定に合わせます。
- リア・パネルのTRIODE（三極管）/PENTODE（五極管）スイッチをPENTODEにします。
- リア・パネルのEFX LOOP（エフェクト・ループ）スイッチをACTIVE（アクティブ）にします。

MARK VのMK II C+モードにおけるレスポンスは、MARKシリーズの中でも、古い物では得られません。それは、それらのアンプのEQ回路の最終段にあるカップリング・コンデンサーが大きすぎて、レスポンスの遅い低音域が加わってしまう為です。

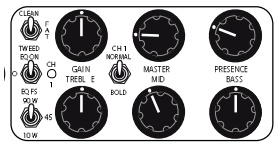
ノート: 回路の構成と設定によって、比較した差を出来る限り近づける事ができます。こういったタイプのテストを行う時には、パワー管、プリアンプ管、トランス、そしてコンデンサーや抵抗といった部品でさえ、時間経過とともに性能が変化する事を考慮に入れなければなりません。

フロントパネル: モード

モード

それではモードを個別に見て、それぞれのモードについて理解を深め、自分のニーズに最も合ったチャンネルに焦点を当ててみましょう。

チャンネル 1:



これは、MARK Vの３つのチャンネルの中で最も低いゲインとなっており、クリーン・コード・サウンドからソロ・サウンド、少しオーバードライブの掛かったコード・サウンドまで、幅広いジャンルを網羅しています。チャンネルにはさらにモードがあり、細くてタイトなサウンドのCLEAN（クリーン）、太いサウンドのFAT（ファット）、そして最後は少し高めのゲイン・サウンドであるTWEED（ツイード）の３つのモードで構成されています。

CLEAN（クリーン）は、MARK IV の系譜を引き継ぐMARK シリーズのクリーン・サウンドの中で最も素晴らしいサウンドであり、ギターを必要とするアンサンブルに完璧なリズム・サウンドを提供します。音の立ち上がり速度に関しても究極の精度を持っており、バランスのとれた低音域のタイトさと、弾けるような鋭さを持った高音域を誇ります。またこのモードは、４５ワットと１０ワット・モードで動作させると、バランスのとれたクリップ・サウンドを提供します。

それに対して鋭い対比を見せる**FAT**（ファット）は、超低音域が広がりを見せる息づくような低音域を、全帯域には空気感を、そして高音域には、浮き立つような躍動感を与えてくれます。このサウンドはブラック・フェースに敬意を捧げており、オリジナルMARK IのINPUT 2や、人気モデルのMARK VのCLEAN（クリーン）モードの回路構成を、かなり踏襲しています。FAT（ファット）は、コード・サウンド、単音のクリーンなソロ・サウンド、そして45ワットと10ワット・モードのクリップ・サウンド（バス・コントロールを低めに設定した）で本領を発揮します。

TWEED（ツイード）は、中低音域をブーストし高音域が少し減衰するので、サウンドにパンチが出て、他の楽器とミックスした時に埋もれる事のない、丸いボーカル・クオリティーのサウンドになります。TWEED（ツイード）は、ロー・ゲインのクランチ・リズム・サウンドに最適です。また、PRESENCE（プレゼンス）で高音域をカットする事で、高次倍音が少なくなるので、ざらつき感のないサウンドになります。

チャンネル 1 ボイス・スイッチ – チャンネル全体:

NORMAL（ノーマル）/BOLD（ボールド）:

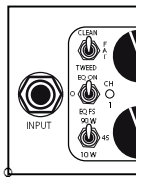
このスイッチは、チャンネル１全体に対して機能します。２つの選択肢があり、１つは中域から中高域、もう１つは高音域の低い方のボイシングを行います。**NORMAL**（ノーマル）は、バランスのとれた滑らかなレスポンスを示します。このモードは、GAIN（ゲイン）を強めにしてドライブをかけると、爽やかなクリーン・サウンドとクリーミーなソフト・クリップサウンドを生み出します。このモードは、特定の周波数帯域が突出する事が無いので、リズム・ワークに最適です。また、グラフックEQや、PRESET（プリセット）に対するレスポンスも自然です。

BOLD（ボールド）は、中音域から中高音域、そして高音域の低い方にかけて、メリハリのあるパンチの効いたサウンドになるので、他の楽器と混ざった時に埋もれてしまう事がありません。そのサウンドはパワーが増して、ヘッドルームの大きなサウンドが、スピーカーから飛び出してくるような印象を受けます。さらにTWEED（ツイード）モードでオーバードライブ・サウンドにすると、突き刺すような攻撃的なアタックになります。BOLD（ボールド）モードでは、TREBLE（トレブル）、MID（ミッド）、PRESENCE（プレゼンス）を微調整する事で、サウンドやフィーリングを最適にする事が出来ます。

フロントパネル: モード（続き）

CLEAN（モード選択スイッチを上）:

CLEAN（クリーン）は、伝統的なMARK シリーズの回路の系譜を引き継いでおり、タイトさが強調され明瞭なクリーン・リズムサウンドと、精度の高い単音ソロ・サウンドを生み出します。このモードは、このアンプの中で最もクリーンなヘッドルームを持っていますが、極端な設定（４時から５時半）にすると、クリップさせる事が出来ます。そのサウンドはタイトさと固さを保っており、FAT（ファット）のクリップ・サウンドとは異なります。この固さの良い点は、FAT（ファット）のクリップ・サウンドよりもBASS（バス）コントロールを高めに設定出来る所です。- CLEAN（クリーン）の全体的な特徴として、攻撃的なリズム・サウンドに挑戦したい時に、すぐに出来る超低音域があります



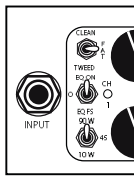
CLEAN（クリーン）は、パワー・セレクト・スイッチが４５ワットになっていて、PRESENCE（プレゼンス）が少し高め（１時から２時半）に設定されていると、少しクリップしたコード・サウンドになります。パンクや速いテンポのロック・リズム・スタイルに向いた、攻撃的なクリーン・サウンドはすぐに作れますので、是非試して下さい。

CLEAN（クリーン）は、そのクリスタルのような高音域や、弾けるような倍音成分を含むサウンドにより、コードやアルペジオ奏法で輝きを放ちます。厚い層になった低音域は、息づかいと暖かみを加えてくれますが、低音の周波数が低すぎる事は無いので、大きくなりすぎる事も緩慢になる事も無く、リズミックな音符の長さを正確に刻む事が出来ます。CLEAN（クリーン）は、ファンクのリズムや、燃えるようなカントリーのピッキングにも、驚くべき性能を発揮します。

CLEAN（クリーン）モードは、FAT（ファット）モードと比較すると、中音域の周波数設定が若干高めになっているので、パーカッシブなアタックには、タイトさと最大のインパクトが残っており、他の楽器とミックスしても、埋もれる事がありません。高めの周波数に設定された中音域は、CLEAN（クリーン）モードを、サウンドのキャラクターでは、押しを強くしたり引いたり出来ますし、音の立ち上がりでは、速くしたり遅くしたりする事が出来ます。CLEAN（クリーン）モードでBASS（バス）とMID（ミッド）コントロールを実際に触って、サウンドのアタックや厚さ太さ等を調整して、あなたのスタイルやテンポに合わせてみて下さい。

FAT（モード選択スイッチを真ん中）:

FAT（ファット）は、MARK IのINPUT 2（人気モデルのMARK Vのクリーン・モードも同様）の回路構成を踏襲しており、CLEAN（クリーン）モードのタイトで明るいサウンドとは対照的です。



この回路は、レオ・フェンダーによって切り開かれた、初期のブラック・フェースに、オマージュを捧げています。また、クラシック・ロックやブルース・サウンドに、多大な影響を与えてきました。

爽やかにきらめく高音は空高く舞い上がり、天使の耳に届きそうな勢いです。他の周波数帯を見てみると、誇るべき中音域はパンチがあってタイトであり、低い設定でも充分な太さをサウンドに与えてくれます。低音域は豊富で、しっかりとした土台の上に空気感をもたらします。これらの高いクオリティーが、魂を揺さぶり、より良いプレーを育むのです。

FAT（ファット）は、CLEAN（クリーン）モードと対照的にコード・サウンドやリズム・サウンドに向いています。FAT（ファット）は、豪華なサウンドで他の楽器とミックスされ、空間を豊かな倍音成分で満たします。そのサウンドはエフェクト処理される事無く、曲の土台、そして背骨になります。

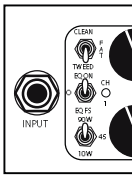
FAT（ファット）のゲイン構造は、クリップ・サウンドに照準を合わせて調整されていますが、GAIN（ゲイン）コントロールでさらにゲインを上げる事も出来ます。FAT（ファット）でクリップさせると、カソードの値が大きくなり、プリアンプが滑らかで豊かなブレーク・アップを起こします。このブレーク・アップは、少し歪んだコード・サウンドやブルージーな単音ソロ・サウンドに好んで使われます。さらにゲインを上げると、コード・サウンドのエッジが立って単音ソロ・サウンドは太さを増し、多くのプレーヤーが好む中庸のサウンドになります。FAT（ファット）は、スタジオで、クリーン・サウンドと、ダイナミックなニュアンスを残している、少し歪んだサウンドの両方が必要な時に便利です。これは、パワー・セレクト・スイッチが４５ワットか９０ワットに設定されている時に実現出来ます。ダイナミクスの違いを出せるのは、パワー・セクションがこの２つのモードになっている時です。

フロントパネル: モード（続き）

覚えておいて頂きたい１つの重要な事は、低音域の周波数設定が低いと、プリアンプとスピーカーの両方で、オーバーロードが起きてしまう可能性があるという事です。これは、BASS（バス）とMID（ミッド）の両方を高めの値（１１時半を超える）に設定すると、簡単に起こります。パワー・セクションが免れなかったとしても、低音域はパワーを多く必要とします。また、早い段階でのクリップは、サウンドをぼやけさせますので歓迎されません。このマニュアルの役立つヒントの項でも触れましたが、次の簡潔なルールを守って下さい; GAIN（ゲイン）コントロールを上げたら、BASS（バス）、場合によってはMID（ミッド）も下げる。これを守る事で、アンプやスピーカーのオーバーロードを避ける事が出来ます。

ノート: FAT（ファット）モードでは、低音域が生成されるので、GAIN（ゲイン）コントロールとBASS（バス）の両方が高い設定になっていると、低音が重くなりサウンドがぼやけたり、スピーカーやヘッドルームが限界を超えてしまう場合があります。これはよくある事で、決して珍しい事ではありません。FAT（ファット）モードでGAIN（ゲイン）が高めの場合は、BASS（バス）と場合によってはMID（ミッド）も低く（１０時から７時半あるいはオフ）設定します。

TWEED（モード選択スイッチを下）:



TWEED（ツイード）は、ゲイン・スケールが大きくなっており、ダイナミックなレスポンスの完璧なクリーン・サウンドを生み出します。高音域は全く減衰がなく、中位のゲインは暖かみと、ほど良いサスティーンと歪みを生成します。決してハイ・ゲインでもリード・チャンネルでもありませんが、チャンネル１の中では最もゲインが大きいモードです。TWEED（ツイード）は、CLEAN（クリーン）の氷のようなアタックから、FAT（ファット）の暖かみのあるサウンド、そしてチャンネル２の３つのモードがカバーするハイ・ゲインに至る、広い範囲を網羅しています。

このモードは、Mark IVのRhythm 2モードとDual Rectifier Road KingとRoadsterのTWEEDモードの、回路とサウンド・キャラクターを共有しています。この名前は、初期のレオ・フェンダーの、賞を取ったツイード回路のビンテージ・ボイスを思い起こさせます。あの頃のロック・ミュージシャンはみんな、アンプのつまみを全部フルにして、美しくクリップした多くのロック・サウンドを生み出していたのです。

GAIN（ゲイン）コントロールを低い領域から中位にすると、中音域の明瞭度とパンチが強調されたクリーン・サウンドになります。反対に中音域を少し抑えたい場合は、MID（ミッド）コントロールを低く（８時半から１０時半）設定すると、中音域のインパクトが和らぎます。この手法を用いると、クリーン・サウンドの領域を広げる事が出来ます。素晴らしいサウンドを生み出すもう一つの方法は、TWEED（ツイード）でスライダーやプリセットのEQを使用します。EQを使用して、中音域を和らげて低音域と高音域を持ち上げる事で、攻撃的なサウンドにする事が出来ます。その他にも様々なスタイルのサウンドを作れます!

TWEED（ツイード）は、中間的なサウンドを提供するのに優れています。クリップしたリズム・サウンドは、最近のポピュラー・ミュージックでは前面に出ていますし、ミックスの中でも重要な要素になっています。これらのスタイルには、GAIN（ゲイン）とTREBLE（トレブル）コントロールを高め（２時から５時）に設定する事で高音域を追加し、PRESENCE（プレゼンス）コントロールで緊迫感を加える事が出来ます。この設定にさらにBASS（バス）とMID（ミッド）を少し加えて、PRESENCE（プレゼンス）を少し下げる事で、サウンドに丸みが出て、ブルースやルーツに向いたサウンドになります。

TWEED（ツイード）では、ピッキングの強さに敏感なダイナミックなソロ・サウンドも用意されています。ゲインを必要とするボイス・サウンドは、GAIN（ゲイン）とTREBLE（トレブル）コントロールを高め（４時半から５時半）に設定して下さい。
TREBLE（トレブル）コントロールを高めに設定して、サウンドに丸さと滑らかさを残したい場合は、PRESENCE（プレゼンス）を少し低め（７時半から９時半）に設定して下さい。

GAIN（ゲイン）とBASS（バス）の関係のルールは、単音ソロ・サウンドでもコード・サウンドでも適用されます; GAIN（ゲイン）を上げたらBASS（バス）を下げる、です。

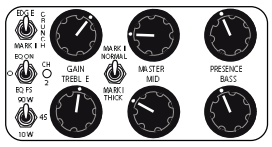
そして最後に、TWEED（ツイード）とマルチ・ワット・パワー・アサインの２つの低出力設定（４５ワットと１０ワット）の組み合わせも忘れないで下さい。この組み合わせにより、プリアンプとパワーアンプのクリップのバランスをとる事が出来ます。TWEED（ツイード）モードのサウンドの中音域に明瞭度とパンチを加え、アタックのキャラクターを作る一方で、パワーアンプでブレーク・アップ・サウンドを作ります。これらのサウンドは、コード・サウンドにも単音ソロ・サウンドにも最適で、とにかく入力された音全てに良い答えを出してくれます。もちろん懐かしのサウンドも!

フロントパネル: モード（続き）

おっと、もう一つ大事なものを忘れていました。スライダーとプリセット、両方のEQです。TWEED（ツイード）でGAIN（ゲイン）を回してクリップ・サウンドにしたら、遠慮なくEQを使って下さい。EQのサウンドを形作るパワーを使用すれば、タイトで攻撃的な驚くべきロック・リズム・サウンドを生み出す事が出来ます。それほど多くない（チャンネル２と３のハイ・ゲイン・モードと比べて）プリアンプのゲインと強力なEQを組み合わせれば、ダイナミックなサウンドの周波数特性を自由に形作る事が出来ます。

ノート: チャンネル１の全てのモードでは、ギターとMARK V の入力の間にペダル式のオーバードライブを挟む事が出来ます。特にCLEAN（クリーン）とFAT（ファット）では快適に動作しますが、TWEED（ツイード）では、ペダルからの信号レベルが高いと、真空管の最初の段階で大きな歪みが発生してしまう可能性があります。TWEED（ツイード）モードでペダル式のオーバードライブを使用する場合は、入力レベルの設定が高いと、プリアンプ管が飽和してしまい、ハウリングを起こす可能性がありますので、注意が必要です。ハウリングが起きたら、GAIN（ゲイン）とTREBLE（トレブル）あるいはPRESENCE（プレゼンス）を下げて、プリアンプ管への入力を抑えて下さい。同時にペダル式オーバードライブのマスター・ボリュームを下げる事も忘れないで下さい。これによりアンプが損傷することはありませんが、ハウリングは気持の良いものではありません。この手順を踏んでも問題が解決しないようでしたら、プリアンプ管（SPAX7）をペアーで両方とも同時に交換する事を推奨します。交換する場合は適正な手順で行って下さい。MARK Vは、多くの検査を通過したものだけを出荷していますが、ペダル式のオーバードライブは、真空管にとって追加の負荷になります。弊社にご連絡いただければ、プロダクト・スペシャリストが真空管に関するアドバイスを致します。

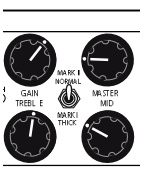
チャンネル 2:



チャンネル2は 、ロー・ゲインのチャンネル１と、歪んだサウンドのチャンネル３の"クロスオーバー・モード"というだけでなく、３つのチャンネルの中で最も多様性があります。EDGE（エッジ）モードで低めの設定をした、ほとんどクリーンに近いサウンドから、ゲインを上げていくと、ミッドからハイ・ゲインでCRUNCH（クランチ）の攻撃的なサウンドになり、ゲインが滝の様なMARK Iモードまで、バラエティーに富んでいます。GAIN（ゲイン）コントロールだけでこれだけのサウンドをコントロール出来るのは、驚異的な事といえるでしょう。例えば、EDGE（エッジ）モードで低めの設定をした、押しの強いクリーン・サウンド、CRUNCH（クランチ）でハイ・ゲインにしたロックの単音ソロ・サウンド、そしてMARK Iモードで低めの設定をした、ソウルフルなソフト・クリップ・リズム・サウンドとダイナミックで吠えるようなブルース・サウンドを１つのチャンネルでカバーしているのです。この探究心をくすぐるアンプMARK Vは、全てのチャンネル、全てのモードでプレーヤーの思いに応えてくれます。

チャンネル2 ボイス・スイッチ – モードの詳細:

MARK I : NORMAL（ノーマル）/ THICK（シック）



このスイッチは、トレブルの周波数帯域のボイシングを切り替えます。このスイッチを上のNORMAL（ノーマル）にすると、周波数が高く弾けるようなサウンドになり、下のTHICK（シック）にすると、周波数設定が低くなり中音域の高い方が太いサウンドになります。このスイッチは、MARK Iモードの時のみ有効であり、EDGE （エッジ）とCRUNCH（クランチ）の時は無効です。NORMAL（ノーマル）は、ロー・ゲインのコード・サウンドと、爽やかな高次倍音のブルース・サウンドに向いています。THICK（シック）は、豊かなゲインで太さを増した単音ソロサウンドや、ハイ・ゲインのリズム・サウンドに最適です。NORMAL（ノーマル）は、"ブラック・フェース"を彷彿させ、THICK（シック）は、イギリスのアンプを思い起こさせます。

フロントパネル: モード（続き）

EDGE（モード選択スイッチを上）:

EDGE（エッジ）は、チャンネル２の中で最も低いゲインです。クリーン・サウンドからスタートして、ゲインが１２時位になると少しずつクリップが始まり、２時半位までは攻撃性が増していき、それより上では弾けます。EDGE（エッジ）は、チャンネル２の中で最も緊迫感があり、ダイナミックなモードでもあります。これは、チャンネル２の他のモードよりも、低音域の周波数が高めに設定されている回路を使用しているため、低音域が特徴的でタイトなサウンドになっています。低音域が１オクターブ（いくつかは２オクターブ）高い周波数に設定され、中音域や高音域に近づいています。この思い切った設計の回路は、ダイナミックでレスポンスが速く明瞭なサウンドを生み出します。

EDGE（エッジ）モードの低音域は、厚く重ねてもタイトにする事が可能です。このモードでは、BASS（バス）コントロールを他のモードのときよりも高め（１２時から３時）にする事が出来ます（むしろ推奨します）。また、このモードのサウンドは中域と高域が突出しているので、CRUNCH（クランチ）やMARK Iモードの時よりも、TREBLE（トレブル）とPRESENCE（プレゼンス）は、抑えめにした方が良いでしょう。EDGE（エッジ）モードは、どのようなピックアップを使っても明るいサウンドになるので、BASS（バス）を高めの設定にしても、TREBLE（トレブル）は１１時半未満にした方が良いでしょう。そうする事で、暖かみと厚みを保つ事が出来ます。MID（ミッド）コントロールも高い周波数帯を扱いますが、厳密には異なる領域になります。MID（ミッド）を低め（９時から９時半）で、PRESENCE（プレゼンス）を高め（１１時半から２時）に設定したり、反対に、MID（ミッド）を高め（１２時から３時）でPRESENCE（プレゼンス）を低め（１０時から１２時半）に設定して、高音域のボイシンングの変化を確かめて下さい。

EDGE（エッジ）モードのクリップ・キャラクターは、明るくてざらついています。ですので、クリップでも、もう少し曇ったサウンドが欲しい場合は、CRUNCH（クランチ）やMARK Iモードで低めの設定にすると良いでしょう。

クリーン・サウンドの変化発展形を求めているなら、EDGE（エッジ）モードで、中高域が強調された攻撃的で緊迫感のあるクリーン・サウンドを作ってみると良いでしょう。それは、GAIN（ゲイン）を低め（１０時から１１時半）、TREBLE（トレブル）を低め（１２時半前）、MID（ミッド）を低め（８時から９時半）、BASS（バス）を高め（１時から３時）、そしてPRESENCE（プレゼンス）を聞きながらお好みに調整します。

CRUNCH（モード選択スイッチを真ん中）:

このモードは、"クロスオーバー・チャンネルのクロスオーバー・モード"を表しています。EDGE（エッジ）モードよりもバランスがとれていて周波数特性も広く、ゲイン・スケールも大きくなっています。EDGE（エッジ）モードと比べると、低音域の基準となる周波数は１オクターブ低くなっており、低次倍音が暖かみと空気感を加えています。しかし、これらの傾向は、MARK Iモードと比較すると、少なくなります。こういった事から、このモードは２つのモードの中間的な性格を持っているといえるでしょう。

CRUNCH（クランチ）は、緊迫感とダイミクスを残しながら、暖かみと豊かさ、そして心地よくクリップしたクランチ・リズム・サウンドまでを網羅しています。このモードは、このアンプ全体の中で最も多様性のあるモードであり、そのサウンドは、コード・リズムにも単音のリード・ワークにも使えます。

EDGE（エッジ）モードでTREBLE（トレブル）コントロールを高めに設定すると明るくなり過ぎてしまいますが、このモードではTREBLE（トレブル）コントロールを高めに設定しても明るくなりすぎる事がありません。すなわち、高音域のゲインを上げても大丈夫という事であり、万が一明るいと感じたら、PRESENCE（プレゼンス）を下げる事で解決出来ます。反対に、CRUNCH（クランチ）モードでは、BASS（バス）を下げる事でタイトさを増す事が出来ます。このモードは元々低音域が豊富なので、少し低音域を減らしても暖かみが残ります。

CRUNCH（クランチ）は、パワー・セレクト・スイッチと組み合わせる事で相乗効果が生まれます。いくつかの驚くべきサウンドは４５ワットと１０ワット・モードから生まれています。各モードのパワー・セクションでは異なるタイプのクリップが生まれ、さらにフロント・エンドのGAIN（ゲイン）コントロールでは、タイプの異なるクリップが生成されています。これらのクリップが絶妙に混ざり合う事によって、コード・サウンドや単音ソロ・サウンドを作り出しているのです。

CRUNCH（クランチ）を使用すると、EDGE（エッジ）よりも低いゲイン設定でほとんどクリーンなクリップし始めのサウンドを作る事が出来ます。それは、GAIN（ゲイン）を１０時から１１時、TREBLE（トレブル）を１１時半から１時、MID（ミッド）を８時半から１１時、そしてBASS（バス）を１１時から１時に設定します。さらにゲインを増やす事無く高音域を調整する場合は、PRESENCE（プレゼンス）を使用して下さい。

フロントパネル: モード（続き）

MARK I（モード選択スイッチを下）:

まさにこれです! 1970年にリトル・ブギー・コンボと共に登場したこのサウンドが、メサを一躍スターダムに押し上げたのです。この羊の皮を被った狼は、衝撃的なデビューを飾り、世界初のハイ・ゲイン・プリアンプを搭載したこのアンプは、新しい時代の幕を開けます。MARK II以前は、全てのアンプが同じようなゲインで同じような感度でした。MARK Iは、アンプの世界に革命を起こしたと言えるでしょう。このアンプより前はビンテージ時代、このアンプ以降は新たな時代に入り、そのサウンドは、音楽そのものに大きな影響を与える事になったのです。

ランドール・スミスは壁を打ち破り、初めてハイ・ゲインのカスケード・プリアンプの開発に成功しました。そしてエレキギター・プレーヤに、誇張無しに今までの１００倍ものゲインを誇るアンプを提供出来る様になったのです。その結果突然出現した新たなソロ・ヴォイスは、それまで聞いた事の無いサウンドであり、サックスのように変化する音であり、無限のサスティーンを持っている様に感じられるものでした。そしてこれが重要なポイントなのですが、そのサスティーンはボリュームのレベルには関係なかったのです! 今でこそプレーヤーは、純粋なクリーン・サウンドから爆発するようなオーバードライブ・サウンドまで、どんなボリュームでも望み通りのサウンドを得られますが、当時は画期的な事でした。言うまでもありませんが、そのニュースは世界中のギタリストにあっという間に広まり、カルロス・サンタナのアルバムABRAXAS で早速使われています。その後急速に多くのリトル・ブギーがカリフォルニアのリトル・マウンテン・シャックで製造され、ポピュラー・ミュージックのほとんどで、ブギー・サウンドが聴かれる様になりました。

それから４０年が経った今でもそのサウンドは健在であり、その回路の血統は受け継がれ、MARK V の新たなモードMARK I で脈々と息づいています。

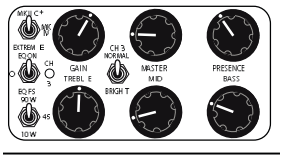
この回路は究極の多様性を持っており、リズム・サウンドでも単音ソロ・サウンドでも輝きを放ちますが、それぞれのサウンド毎に異なるアプローチが必要です。その際、どのようなサウンドを作る場合でも、トーン・コントロールに関して２つの事に注意して下さい。まず１つ目はTREBLE（トレブル）コントロールです。このコントロールはとても影響力が強く、高め（１２時１５分から３時）に設定すると、他のチャンネルの時よりも信号のゲインが上がってしまいます。MARK Iの回路に於けるこのコントロールは、２つ目の注意点であるBASS（バス）の設定と関連しています。このモードに於けるBASS（バス）の設定は、超低音域を調整します。これについては、役立つヒントのセクションでも触れていますが、GAIN（ゲイン）を上げたらBASS（バス）を下げるということです。このモードの素晴らしいサウンドの多くは、BASS（バス）の設定を低めにし、TREBLE（トレブル）を高めに設定しています。トーン・コントロールの感度はとても高いので、このアプローチの場合は、BASS（バス）だけでなく、MID（ミッド）も低めに設定すると良い結果が得られます。

このアプローチは、単音ソロ・サウンドに特に向いており、具体的には、TREBLE（トレブル）を２時半位、BASS（バス）とMID（ミッド）を９時半以下に設定します。メディアム・ゲイン・ソロ・サウンドの場合は、TREBLE（トレブル）を１２時半から１時半、BASS（バス）とMID（ミッド）を９時半から１０時半に設定して、暖かみと空気感を加えます。

グラフィックEQ（スライダーあるいはプリセット）を使用して、MARK I モードでハイ・ゲイン・ヘヴィー・サウンドを作りたい場合は、BASS（バス）コントロールを低く設定しておく事が重要です。BASS（バス）コントロールで低音域が上がった状態から、さらにEQで低音域を上げてしまうと、スピーカーがオーバーロードしてしまい損傷を受ける可能性があります。たとえ損傷を免れたとしても、低音が出る代わりに、ただ籠ったサウンドになってしまいます。

フロントパネル: モード（続き）

チャンネル 3:

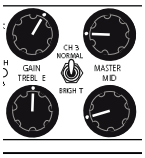


チャンネル 3は、MARKシリーズのチャンネル切り替え式アンプ全ラインナップに敬意を捧げており、このチャンネルは、頂点を極めた３つの回路で構成されています。それらの回路は、MARK II-C+とMARK IVの為に設計されたもので、このモードのスタート地点であり、基準点でもあります。この２つのアンプは、これまで多くのレコードのクレジットに掲載され、象徴的なハイ・ゲイン・サウンドをレコード盤に刻み込んできました。チャンネル 3は、MARK II-C+のリード・チャンネルとMARK IVのリード・チャンネルとリード・エクストリーム・チャンネルの３つで構成されています。これらのサウンドは、４０年に渡る、チューニング技術とハイ・ゲイン真空管アンプの技術の蓄積により、忠実に再現されており、究極のMARKサウンドとでも言うべきものを生み出しています。

このチャンネルは、MARK Vの３つのチャンネルの中で最も高いゲインであり、バラエティーに富んだリード・サウンドを生み出しますので、プレーヤーによって様々なアプローチに対応する事が出来ます。トレードマークとも言えるゲインを中位にしたサウンドは、明瞭度が高く、トラッキング・レスポンスがタイトで、瑞々しい倍音成分が重なり合っており、コード・リズム・サウンドや単音ソロ・サウンドに最適です。これらの回路は、ゲイン・スケールに於いても驚異的な精細度を持っているので、微妙なクリップ・サウンドや押しの強いクリーン・サウンド、そして爆発するようなリード・サウンドといった幅広いサウンドを網羅しています。また、広い帯域に渡って、緊迫感とタイトさを保っています。この高精細なゲインと鮮明度の高いクリアさは、チャンネル 3を多様性のある、使い勝手の良い強力なチャンネルにしています。

チャンネル3ボイス・スイッチ – チャンネルの詳細:

NORMAL（ノーマル）/BRIGHT（ブライト）



このスイッチは、チャンネル３の３つのモード全てのサウンドの高次倍音の量を決定します。モードによっては、スイッチを切り替えた時に音が前に出てきますが、それはそのモードのサウンドに含まれる高音域の量によります。信号経路のどこで倍音成分をコントロールするかによって、明るさを増したり減らしたりする事が出来ます。例えば; MK IVのファット・モードよりもMK II C+モードでこのスイッチを切り替えた時の方が、サウンドの変化は大きくなります。それは、MK IV モードの方が高音域が減衰しているので、このスイッチをBRIGHT（ブライト）にしても聴覚上の効果が少ないからです。

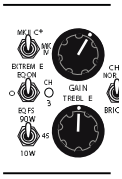
このスイッチを下のBRIGHT（ブライト）にすると、元音の周りが高次倍音で満たされます。GAIN（ゲイン）を上げると、高次倍音の増加が著しくなり、MK II C+モードとEXTREME（エクストリーム）モードでは特に、BRIGHT（ブライト）回路の働きが強くなります。この２つのモードのハイ・ゲインのコード・サウンドには、BRIGHT（ブライト）モードで加えられる倍音が最適と言えるでしょう。このモードでは、プリアンプの最初の段階で高音域を付加しますので、そのあとPRESENCE（プレゼンス）やグラフィックEQでサウンドをさらに形作る事が出来ます。

このスイッチを上のNORMAL（ノーマル）にすると、高次倍音を減衰させるので暗めで暖かみのある単音ソロ・サウンドになります。NORMAL（ノーマル）は、ロー・ゲイン・サウンドに厚みを与え、低出力のピックアップでハイ・ゲインの設定をした時にありがちな、サウンドの不必要なざらつきを取り除いてくれます。

フロントパネル: モード（続き）

MARK II-C+ （モード選択スイッチを上）:

ノート: オリジナルのMARK II-C+アンプではパワー・セクションが三極管で構成されています。オリジナルのMARK II-C+のサウンドを聴くには、リア・パネルのチャンネル３のパワー・スイッチ（CH.3 REVERBコントロールの下）をTRIODEにします。このセクションの最後にある重要なお知らせをご覧下さい。



これは、８０年代中頃に製造され、その当時のギタリストがこぞってレコーディングに使用した、２チャンネルのMARK シリーズ・アンプのサウンドを再現したものです。今日では、一部のビンテージ・マニアがMARK II-C+アンプを所有しており、中古市場では、当時の定価の３倍から４倍の価格で取引されています。それにも関わらず、多くのアーティストが、今でも値段にいとめをつけずに欲しがっている状況です。確かにMARK II-C+には、称賛に値する音質と信頼性があります（もちろんそれは我々にとっても喜ばしい事です）。同じ事がビンテージ・ギターにも言えます。保証という事を考えたらどうでしょう。今MARK II-C+ を手に入れたとしても、残っているのは回路図だけです。シルバニア415パワー管も今では手に入りません。研究開発を行っている最中であれば、真空管に本来備わっている中音域のパンチの効いたキャラクターに近づける事も可能でしょうが、今となっては、クリーン・サウンドやリード・サウンドに関しても、ある程度妥協せざるを得ません! ですから、MARK II-C+ を高額なお金をはたいて手に入れても、残念ではありますが、あまり価値のある事ではありません。その点MARK Vは、他にも８台のアンプを手に入れたのと同じ価値があるわけです。

MARK II-C+のトレードマークと言えるサウンドは、緊迫感があり信じられないほど明瞭でありながら、高次倍音が重なり合って多次元に広がっていきます。それは、攻撃的なハイ・ゲイン・コード・サウンドにも猛烈な単音ソロ・サウンドにも最適です。つまみの設定をそれぞれ、GAIN（ゲイン）を１時半から２時半、TREBLE（トレブル）を１２時から１時、BASS（バス）を１０時から１２時、PRESENCE（プレゼンス）を９時から１１時半にすると、明瞭度、ニュアンス、レスポンス、どれをとってもハイ・ゲイン・ジャンルに於いては群を抜いています。これらのクオリティーは、特にレスポンス、タイトさ、ピッキングに対する追従性といった事をアンプに求めるプレーヤーに歓迎されています。アタックの後、倍音成分が時間とともに美しく変化し、音のダイナミクスや周波数成分が変化していく様子は楽しいものです。このアンプで、今までに体験した事の無い新たな表現力をあなたは手にする事になります。

II-C+ は、ハイ・ゲイン・リズム・ワークの為に、ヘヴィー・ロック・クランチの新たなサウンドを解き放ちます。イギリスのアンプとは対照的に、複雑な倍音成分が重なり合い、C+は迫るようなゲインの壁で驚異的なサウンドを生み出します。この攻撃的なサウンドは、オンボードのグラフックEQでさらに印象的なものになります。"V"カーブに象徴される、低音域と高音域がブーストされて、中音域が窪んだ周波数特性のサウンドは、II-C+サウンドと同義語とされ、８０年代のポピュラー・ミュージックのレコーディングによく使われました。このサウンドは評判を呼び、"カリフォルニア・サウンド"の代名詞になっていったのです。

９０年代に入ると、Dual Rectifier（デュアル・レクティフィア）の、超低音域が強調され、弾けるようなアタックのサウンドが、ポップ・メタル・サウンドの一時代を築きます。しかし、この頃になっても、MARKシリーズのグラフィックEQのクランチ・サウンド（MARK IVで再び脚光を浴びた）の熱狂的なファンは根強く存在していました。そして２０００年以降の１０年は、速いテンポの攻撃的なパンクやインディー・ロックに最適な、ピッキングに対する追従性が高いクランチ・サウンドが好まれてきました。

C+モードには、GAIN （ゲイン）コントロールが高い設定の時に、BASS（バス）を低めに設定する事の他に、特にやってはいけない事はありません。TREBLE （トレブル）あるいはPRESENCE（プレゼンス）が高く設定されている時は、GAIN （ゲイン）をあまり上げないで下さい。両方を上げてしまうと、プリアンプが飽和してしまいハウリングを起こす可能性があります。

フロントパネル: モード（続き）

C+モードに役立つヒント:

スライダーあるいはプリセットのグラフィックEQを使用する - ハイ・ゲインの設定で超低音域が欲しい場合 - EQは回路の中で最終段にあるので、BASS（バス）コントロールと比べてプリアンプを飽和させる可能性が低くなります。

GAIN（ゲイン）、TREBLE（トレブル）、PRESENCE（プレゼンス）を限定された範囲内で設定すると、相互に良い作用をして、ピッキングに対する追従性が良く、明瞭で理想的なリード・サウンドになります。PRESENCE（プレゼンス）は、低めに設定すると声のようなキャラクターになり、高めに設定するとカッターナイフのような鋭いアタックになります。

リード・サウンドにするには - GAIN（ゲイン）、TREBLE（トレブル）、PRESENCE（プレゼンス）で、アタックを微調整したあとに、BASS（バス）の調整をすると良いでしょう。少しずつ上げていき、音の輪郭がぼやけない様にしましょう。MARK シリーズのBASS（バス）コントロールは、美しく豊かな低音域をもたらしますが、大きくし過ぎると、他のトーン・コントロールとのバランスとアタックを台無しにしてしまう可能性があります。

このモードのロー・ゲイン・サウンドを見過ごさないで下さい! 豊かな倍音成分と素早いアタックのロー・ゲイン・ブルース・サウンドは、C+モードの中でも優れています。-クリップし始めのクリーン・サウンドは、リズム・サウンドと単音ソロ・サウンド、どちらにも最適です。弦を弾くテクニックを持った方に最適な、オープンでダイナミックでレスポンスの良いサウンド。"ギターのボリューム奏法"や"懐かしのチャンネル・スイッチング奏法"といった伝統的な奏法を多用される方向きのサウンド。C+モードは、バッキングをクリーン・サウンドで、ソロ・パートをオーバードライブという切り替えをギターのボリュームで行う事が出来ます。GAIN（ゲイン）を低めに設定している場合は、BASS（バス）を高めにして、暖かみや三次元の広がりを出す事が出来ます。

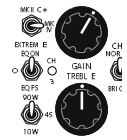
重要なお知らせ! リア・パネルのチャンネル 3 のリバーブ・コントロールの下に位置しているTRIODE（三極管）/ PENTODE（五極管）スイッチを切り替えてみて下さい。このスイッチはパワー管の構成を変更し、サウンドを根本的に変えてしまいます。多くのプレーヤーはどちらか一方しか使用していないようです。サウンドの好みの問題で、好きでない方にすると、うまくプレー出来ないという事も聞きます。これは、強力なパラメーターなので、音作りに迷った時には是非試して下さい。

TRIODE（三極管）にすると、中音域のアタックが柔らかくなって、高次倍音が強調され、絹のような滑らかさと瑞々しいサウンドになり、出力の音量が低くなります。PENTODE（五極管）にすると、中域にパンチが加わり、高次倍音が少なくなって音が太くなります。さらに特に低音域のアタックがタイトになって、出力パワーとヘッドルームが大きくなります。オリジナルのII-C+は全て三極管構成になっています。

このモードは中毒になります。MARK Vの９つのモードの中でも、一度味わってしまうと、なかなか抜け出す事が出来なくなるモードです。このモードでトーン・コントロールをいろいろな設定にして試してみると、新しい世界が広がるかもしれません。

フロントパネル: モード（続き）

MARK IV（モード選択スイッチを真ん中）:



このモードは、最近のMARKシリーズに活力を与え、その象徴的なサウンドを前面に押し出します。そして次の世代に向けて、多様性をさらに発展させていきます。MARK Vの前身であるMARK IVは、この１８年間絶えず世界中にその活動範囲を広げてきました。MARKシリーズのサウンドは、伝統を残しながらも時代遅れになる事無くスタイルを変化させ、技術を進化させて発展を続けてきました。

MARK II-C+モードと比較すると、MARK IVモードは低中音域が豊かで、中高域が広くて薄く、アタックのキャラクターが特徴的です。低音域の低端は下がっていきますが、低音域のゲインは高く、サウンドは厚く太さがありますので、クランチ・コード・サウンドや滑らかなボーカルのような単音ソロ・サウンドに向いています。これらの回路の違いはフィーリングの違いを生み、MARK IVモードは、サウンドがクリーミーになり、弦を弾いた時の印象が滑らかになります。これが多くのギタリストに、演奏し易い印象を与える要因なのでしょう。低音域が加わった事により、アタックが若干遅くなった事で、MARK IVモードは少しゆったりした雰囲気になり、ピッキングに対する追従性が"顕微鏡レベルでは"遅くなります。しかし、これも音楽のジャンルやアプローチによります。

ロー・ゲイン・サウンドは、MARK II-C+モードよりもMARK IVモードの方が、空気感も三次元的な広がりもあります。素晴らしく純粋なクリップ・サウンドは、GAIN（ゲイン）をとても低く（９時から１０時）、TREBLE（トレブル）を１２時半位に設定すると得られます。GAIN（ゲイン）がこの位抑えられていると、音が鈍くならない程度にBASS（バス）を高く（１１時から１時半）設定する事が出来、そうする事で空気感を増す事が出来ます。TRIODE（三極管）/ PENTODE（五極管）スイッチとパワー・モード・スイッチも是非試してみて下さい。PENTODE（五極管）と９０ワットの組み合わせは、太くてパンチのあるサウンドを生み出します。TRIODE（三極管）と４５ワットあるいは１０ワットの組み合わせは、アタックのキャラクターに特徴があり、多くの倍音成分が複雑に絡み合った独特なニュアンスのサウンドになります。

MARK IVモードのハイ・ゲイン・サウンドは太い! 低めに設定された低音域と低中音域のゲインの組み合わせは、アンプ全体で大きなクランチ・コード・サウンドを生み出します。そういったサウンドを出すときは、BASS（バス）コントロールの設定に注意して、低音域が膨らみ過ぎない様にして下さい。ハイ・ゲインの設定にして、さらに低音域を強調したい場合は、グラフィックEQのスライダーあるいはプリセットを使用すると良いでしょう。BASS（バス）コントロールで低音域を増すと、プリアンプの初期の段階で信号が増幅されてしまいます。それに対してグラフィックEQは、プリアンプの信号経路の最終段で、"プリアンプの総仕上げ"を行いますので、他のトーン・コントロールに与える影響が少なくなります。

チャンネル全てに影響するNORMAL（ノーマル）/ BRIGHT（ブライト）スイッチは、高次倍音が前に出てくる効果があります。特にMARK IVモードで使用すると、ハイ・ゲイン・コード・サウンドや単音ソロ・サウンドに最適です。このスイッチをBRIGHT（ブライト）にすると、高次倍音で満たされるので、PRESENCE（プレゼンス）コントロールで溢れんばかりの高音域を少し減衰させる事で、お望みのサウンドに辿り着けるはずです。中にはこの超高音域が耳障りに聞こえて好まない方もいらっしゃいます。そのようなプレーヤーは、このスイッチをNORMAL（ノーマル）にすると、その帯域はなくなります。私達はこの帯域を、倍音成分が美しく重なり合ったオープンな雰囲気を出す為の重要な要素として捉えており、素晴らしいサウンドにとって不可欠であると確信しています。

素晴らしいサウンドを実現する方法はたくさんあります。それを決定する要素として、BRIGHT（ブライト）スイッチ、トーン・コントロール、グラフィックEQ、TRIODE（三極管）/ PENTODE（五極管）スイッチ、スピーカー・キャビネット、そしてほとんどの人が見落としがちな、ギター本体とそのピックアップがあります。それだけでなく、プレーヤーのピッキングやフィンガリング・テクニック、使用している弦の太さ、これら全ての要素が複雑に絡み合い影響し合う事によって、１つのサウンドが生み出されているのです。MARK IV は音について考える良いきっかけを与えてくれました。

ピックアップは、サウンド・キャラクターを左右する大きな要素の１つです。多くのプレーヤーはサウンド作りに行き詰まると、アンプの設定をいろいろといじり過ぎてしまいすが、実は音を発する大元を見落としがちです。そうです、それがピックアップです。ピックアップから発せられた信号がアンプに送られ、それをアンプが増幅して音が出る事を忘れてはいけません。

フロントパネル: モード（続き）

ハイ・ゲイン・サウンドは、特にピックアップの出力とボイシングに敏感で、高音域の量により強調される度合いが著しく変わります。我々の経験では、低出力のビンテージ・スタイルのピックアップは、高次倍音が強調された、優雅に揺らめくベルのような倍音成分と、メディアム・ゲインの明瞭なサウンドを生み出します。ハイ・ゲインのパフォーマンスを望むのであれば、このタイプのピックアップだと設定に苦労します。ゲインを上げると高次倍音が耳障りになるので、その場合は、TREBLE（トレブル）とPRESENCE（プレゼンス）を低めの設定にする事で、低出力のピックアップでも、明瞭度の高い純粋なサウンドにする事が出来ます。

もう既に高出力のピックアップの必要性を理解していらっしゃるのであれば、少なくともブリッジ側のピックアップで、タイトで輪郭のしっかりした、まとまりのあるハイ・ゲイン・サウンドを出す事は出来ます。そうでないのであれば、実際に高出力のピックアップをいくつか試して、中音域から中高域のサウンドの違いを体験する事をお勧めします。このボイシングの違いが、低音域がタイトなクランチ・コード・サウンドや、声のような単音ソロ・サウンドを生み出すのです。

高出力のピックアップの中にはタップ機能を持っているものがあります。これによりピックアップを半分だけ動作させて低出力の明るいサウンドにしたり、全て動作させて高出力の中音域にパンチのあるサウンドにする事が出来ます。この機能は通常、小さなトグル・スイッチやつまみを引っ張るタイプでコントロールし、内部の結線で 5 通りの接続をする事が出来ます。このようにギター本体に付いている機能で、高次倍音やロー・ゲインからミッド・ゲインによる空気感等、多様なサウンドのコントロールすることもできます。MARK Vのチャンネルによっては、ハイ・ゲインのピックアップの出力を受け止め、タイトで猛烈なヘヴィー・サウンドを生み出す事が出来ます。

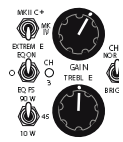
隠れた宝物: アンプは、ギター・プレーヤーが演奏したサウンドを、プレーヤーの好みに合わせてサウンド作りをし、それを大きな音で出力する道具です。アンプはまた、長い時間をかけて習得するべき、もう一つの隠れた特質を併せ持っています。それは、あなたにとって最も良い先生になる可能性を持っているという事です。何となく、いんちき臭い感じがしますか? 今まで数えてきたわけではありませんが、ユーザーの皆様からお手紙やお電話を頂き、その中で、MARKシリーズのアンプを手にしてから演奏のテクニックが上達したという声を良く聞く様になったのです。彼らが言うには、演奏のタッチやアタックが驚くほどはっきりとそのまま正確に伝わってきて、演奏のごまかしが効かないので、自然と演奏が丁寧になり、テクニックが向上するとのことです。また、アンプから返ってくるフィーリングが、プレーヤーの感情を高めてくれるとも言います! 筆者はこれらの感想や意見は真実であると確信しています。また、子供の頃からMARKシリーズに親しんできた私は、プレーヤーとしてもこのアンプと共に成長してきたという厳然とした事実があります。モチベーションが下がったり、煮詰まったり、ただやる気が起きなかったりしたら、私にお電話下さい。私は、MARK シリーズのアンプが無い所でギグをやるくらいだったら、家でアコースティック・ギターを弾いている方がまだましです、という事だけは言っておきます。このような話をする事で、世界中にいる私達の仲間の事を少しでも知って頂ければと思いました。あなたもこのアンプを手にしているのですから、可能性は無限です。一緒に成長発展していきましょう。

重要なお知らせ! 今再び、リア・パネルのチャンネル 3 のリバーブ・コントロールの下に位置しているTRIODE（三極管）/ PENTODE（五極管）スイッチを切り替えてみて下さい。このスイッチはパワー管の構成を変更し、サウンドを根本的に変えてしまいます。多くのプレーヤーはどちらか一方しか使用していないようです。サウンドの好みの問題で、好きでない方にすると、うまくプレー出来ないという事も聞きます。これは、強力なパラメーターなので、音作りに迷った時には是非試して下さい。

TRIODE（三極管）にすると、中音域のアタックが柔らかくなって、高次倍音が強調され、絹のような滑らかさと瑞々しいサウンドになり、出力の音量が低くなります。PENTODE（五極管）にすると、中域にパンチが加わり、高次倍音が少なくなって音が太くなります。さらに特に低音域のアタックがタイトになって、出力パワーとヘッドルームが大きくなります。

フロントパネル: モード（続き）

EXTREME（モード選択スイッチを下）:



チャンネル３の最後のモードは、名称がすべてを物語っています!さらなるゲインを、さらなるアタックを、さらなる中音域を、さらなるタイトさを、そして大量の低音域とさらなるボリュームを。EXTREME（エクストリーム）は、その血筋を遡ると、MARK IVのチャンネル３（リード・チャンネル）のPRESENCE（プレゼンス）コントロールに辿り着きます。つまみを引っ張る事で、パワー・セクションからネガティブ・フィードバックが取り去られ、サイマル・クラスの出力が解き放たれます。

この機能（モード）は、パワー・セクションのプレゼンス回路を、高い周波数帯だけでなく、全周波数帯に等しく動作させるものです。そして何かを"コントロール"するのではなく、パワーアンプに本来備わっているコンプレッションを作動します。パワーアンプで生成される、この"帯域幅の広いEQ"カーブは、解き放たれ、手に負えないほど究極の個性を持ち、プリアンプ回路では決して真似の出来ないものになっています。この根本的に攻撃性を持ったパワーとハイ・ゲインで重なり合った倍音成分が組み合わさせられた時、MARK IVは、驚くほど美しいサウンドを生み出すのです。

MARK VのEXTREME（エクストリーム）が生み出すハイ・ゲイン・サウンドは、この為にかけてきた年月と努力の結晶であり、称賛に値するものです。高音域は暖かみがあり、低音域はタイトさを保っています。MARK VのEXTREME（エクストリーム）は、前身のアンプよりも表現力が豊かでありながら、演奏し易いのもメリットです。MARK IV のオーナーの中には、このアンプの中音域の減衰した周波数特性を好む方もいらっしゃいますが、アタック、音の芯、音の太さ、そしてMARK VのEXTREME（エクストリーム）の多様性を考えたら、あえてMARK IVのロー・ゲイン・サウンドを選択するという必然性は無いと言えるでしょう。

ハードコア愛好者の多くは、EXTREME（エクストリーム）モードで、GAIN（ゲイン）コントロールを高めに設定する事を好みますが、それでもハイ・ゲイン・コード・サウンドは、アタックとタイトさを残しています。このモードは、タイトさを残す為にTREBLE（トレブル）を高くする必要は無く、１２時から１時位で充分です。ハイ・ゲイン・コード・サウンドには、BASS（バス）コントロールを低め（１０時から１１時）に設定した方が良いのですが、それでも低音域が必要と感じたら、グラフィックEQで低音域を持ち上げて下さい。この方法でしたら、プリアンプを飽和させる事無く低音を強調する事が出来ます。
上に記した様に、EXTREME（エクストリーム）モードで、GAIN（ゲイン）コントロールを低めに設定しても、緊迫感のあるロー・ゲイン・サウンドにする事が出来ます。このようなタイプのサウンドは、ゲインをあまり高くせずに、BASS（バス）コントロールを上げる（１１時半から１時半）ことで、サウンドに暖かみと三次元的な広がりを持たせる事が出来ます。

EXTREME（エクストリーム）モードでは、基本的に広い周波数帯域に渡って、PRESENCE（プレゼンス）回路も含んだネガティブ・フィードバックが減少するので、PRESENCE（プレゼンス）コントロールの効果が少し弱まります。これは、PRESENCE（プレゼンス）が、ごく狭い周波数帯域でしか動作しない事を意味しています。しかし多量の高音域をTREBLE（トレブル）コントロールとグラフィックEQのスライダーやプリセットでコントロールして、必要な明るさを加える事が出来ます。

リア・パネル（詳しくはMARK IVあるいは II-C+をご覧下さい）にあるTRIODE（三極管）/ PENTODE（五極管）スイッチを切り替えると、パワー・セクションの設定ががらりと変わり、音質とフィーリングが大きく変わりますので、音作りに迷った時には、是非試してみて下さい。

EXTREME（エクストリーム）モードでロー・ゲイン設定にして、ビンテージ・サウンドが欲しいときは、TRIODE（三極管）を選択すると良いでしょう。弾む様に爽やかな、倍音が豊富なボイスになり、懐かしさを覚えるサウンドになります。

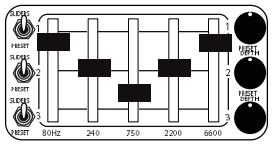
EXTREME（エクストリーム）モードでハイ・ゲイン設定にして、パンチがあってタイトで低音域の追従性が欲しいときは、PENTODE（五極管）を選択すると良いでしょう。この設定は、素早いアタックのレスポンスと、多量の低音域を扱う事の出来る、大きなパワーとヘッドルームをもたらします。これらの設定により、"ビンテージの味"を生かしながらアタックのレスポンスを遅くしたり、低音域をルーズにしたりしない様にする事が出来ます。

MARK Vの中で、EXTREME（エクストリーム）は最も根幹であり究極のサウンドです。その究極のサウンドのすべては、MARK IVモードで聴くことが出来ます。EXTREME（エクストリーム）はチャレンジングであり、攻撃的なサウンドです。そしてそのEXTREME（エクストリーム）サウンドは、演奏しているプレーヤー、そして聴衆を魅了する事でしょう。

フロントパネル: イコライザー

イコライザー・セクション:

全MARKシリーズのアンプの起源であるMARK Iに遡ると- そこには強力な音作りのツールが存在します- そのツールは、MARK シリーズのサウンドのトレードマークの 1 つとして、現在でも輝きを放ち続けています- そう、5 バンドのグラフィックEQです。クラシックなものとなったMARK シリーズのサウンドの多くは、グラフックEQの力による所が大きく、その特徴は中音域にあります。MARK シリーズのサウンドは、この中音域が"窪んだ"特性の恩恵を授かっています。この最もポピュラーなサウンドの周波数特性は、中音域が落ち込んだ"V"カーブを描き低音域と高音域が大きくブーストされ、中音域が減衰しています。グラフィックEQによりもたらされる、そのクラシックなサウンドは、音楽を華やかに彩ります。



MARK Vは、この中音域の窪んだ周波数特性のコンセプトを、各チャンネル毎のPRESET (プリセット) コントロールという形で取り入れています。PRESET (プリセット) コントロールは、各チャンネルあるいは全チャンネルにアサインする事が出来ます。EQセクションは、トレードマークのブギー 5 バンドという形で、トーン・コントロールの隣に見る事が出来ます。EQセクションの左端には小さなトグル・スイッチがあり、このスイッチで各チャンネルに、スライダーあるいはプリセットを適用する事を決定します。始めの内は、これをPRESET (プリセット) にして、EQセクション右端のPRESET DEPTH (プリセット・デプス) を回して中音域が窪んだ"V"カーブを調整すると良いでしょう。

この選択スイッチはEQセクションの可能性を広げます。このスイッチをSLIDERS (スライダー) にすると、EQセクションの 5 つのスライダーが有効になり、中音域をカットして低音域と高音域をブーストした、PRESET (プリセット) のカーブとは異なる独自の周波数特性にする事が出来ます。

各チャンネルの左端にあるトグル・スイッチの内、モード選択スイッチの下 (上から 2 番目) に、3 段切り替え式のEQ CONTROL (EQコントロール) スイッチがあります。ここでは、EQセクションを全てバイパスしたり、そのチャンネルでどのように使用するかを決定します。このスイッチを真ん中にすると、EQはオフになりバイパスされます。この設定にすると、SLIDERS (スライダー) やPRESET (プリセット) の設定は信号に反映されません。

"EQ ON" (トグル・スイッチを上) にすると、EQセクション左端のSLIDER/PRESETスイッチ (SLIDERS =トグル・スイッチを上 PRESET =トグル・スイッチを下) の設定に応じて、SLIDERS (スライダー) あるいはPRESET (プリセット) の設定で、EQが有効になります。この位置になっていると、フットスイッチの状態に関係なく、常時EQ が有効になります。

"EQ FS" (トグル・スイッチを下) にすると、MARK V FOOTSWITCH (フットスイッチ) のEQ ボタンでイコライザーのオン/オフをコントロールします。この位置になっていると、フットスイッチによりオンになった時のみEQ が有効になります。

EQ LED ライト (フロント・パネルの右端のPOWERスイッチとSTANDBYスイッチの上にある) は、イコライザーがオンになると点灯しますので、EQがオンになっているかバイパスされているかを、遠くからでも確認する事が出来ます。

EQは強力な音作りのツールであり、強力なツールは取り扱いに注意が必要です。EQは根本的に、ある特定の周波数帯をブーストします。特に超低音域と超高音域をブーストすると、真空管やスピーカー、そして耳に損傷を与える可能性がありますので、EQはテイストを加えたり、音楽的な調整に留める事を推奨します。EQで超低音域をあまり上げ過ぎると、パワーやヘッドルームをすぐに使いきってしまいます。

このEQの設定を、極端に減衰させたりブーストしたりしていると、オフにしてEQの掛かっていないサウンドを聴いた時に、平坦でつまらなく感じる様になってしまいます。これは良くある事であり、"EQ 依存症"です。何でもそうですが、心地良いものを与えられると体がそれに慣れてしまうのです。この場合は耳です。これを脱するには少し時間が必要です。数分の時間をおいて耳が"通常"に戻ってから、EQの掛かっていない音を聴く様にすると良いでしょう。音作りをする際には、まず、EQのバイパスされた状態で始めて、徐々にEQを加えていく様にする事を推奨します。オンボードEQのような強力なツールは、"EQのかけ過ぎ"になってしまいがちです。そうなると、バランスの悪いカーブになってしまい、修復する事が困難になってしまいますので注意が必要です。ミックスの中にギターがほど良くフィットする最も音楽的な手順は、モード設定やトーン・コントロールで素晴らしいサウンドを作り、それをEQで少しだけ調整するという事です。

フロントパネル: (続き)

ノート: モードによってEQの効き方は異なります。基本的に倍音成分が多いとEQによる音作りの影響力は大きくなります。一般的に、超低音域が少ないモードもEQが良く効く傾向にあり、クラシックなサウンドを作る時に便利です。チャンネル 1 のCLEAN (クリーン) モードやTWEED (ツイード) モード、チャンネル 2 のEDGE (エッジ) モードやCRUNCH (クランチ) モード、そしてチャンネル 3 の全てのモード (MK II C+モードが最適) 等が、EQによる補正が最も向いていると言えます。

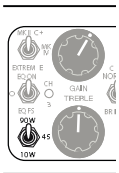
注意: チャンネル 1 のFAT (ファット) モード、チャンネル 2 のMARK Iモードは、元々超低音域を多く含んでいますので、加えるにしてもほんの少しにして、EQセクションで"低音意識"のアプローチを形作る程度に留める様にして下さい。80Hzと240 Hzのスライダーを極端にブーストしたり、RESET (プリセット) コントロールを高すぎる (1時半を超える) 設定にする事は避けて下さい。この領域にして超低音域を極端に多くすると、締まりのない低音になってしまい、ミックスを台無しにしてしまうだけでなく、スピーカーに損傷を与えてしまう可能性があります。これら 2 つのモードでは特にEQ の使い方に注意しましょう。

パワー・セレクト:

MARK Vは、パワー (ワッテージ) 動作に 3 つのモードを持っており、チャンネル毎に選択する事が出来ます。これは、ただ単純に真空管のいくつかをアイドリング状態の"スタンバイ"にして、ワット数を変更するだけではありません。ワット数を変更した上に、パワー・モード毎にワイヤリング・スタイルを構成し直し、動作クラスも変更します。

各チャンネルの左端にあるトグル・スイッチの一番下に、3 段切り替え式のパワー・セレクト・スイッチがあります。このスイッチは、各チャンネルのパワーをワット数に応じて切り替え、スタイルがプリアンプのサウンドに合う様にします。また、この切り替えはフットスイッチで行う事も出来ます。3 つの出力セクションはそれぞれ個別に特許を出願しており、その内 2 つは認可され 1 つはまだです。- MARK V に使用されている信じられないほど素晴らしい技術は、プリアンプとパワーアンプの絶妙なバランスを生み出しています。これほど拡張性の高いパワー切り替えや、出力ステージの多様性は、他のアンプではまず考えられません。出力真空管の構成に凝っていようがいまいが、あなたがこのMARK Vアンプの音、そしてサイマル・クラス・パワーのマルチ・ワットやデュオ・クラス を愛している事は揺るぎない事実なのです。

90ワット (サイマル・クラス : クラス AB + クラス A、プッシュ・プル):



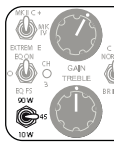
90 W ポジション (トグル・スイッチを上) は、メサが特許を所有するサイマル・クラスで動作しており、９０ワットのパワーを、大きなパワーとヘッドルームに費やし、クリーンで爽やかなサウンドを生み出しています。スイッチをこの位置にすると、4 本のパワー管が 2 本ずつ異なるクラスで同時に動作し、最も音楽的な"１００ワット"アンプ並みの出力をします。外側のペアー (左から 2 番目と一番右) はクラスABで動作しており、最大のパワーを発揮しています。この現代的なワイヤリングは、最も効率的に真空管を動作させるので、大きなパワーを生み発熱量が少なくなります。

内側の真空管ペアーは、"エクステンデッド・クラス A"で動作しており、バイアスは低いのですが、信号が有っても無くても (演奏していなくても) "常時オン"で常に動作しています。このワイヤリングとバイアス・スタイルは、出力が小さい割に発熱量が多く効率が悪いのですが、クリップのキャラクターが滑らかで、暖かみのあるサウンドになります。特にクラスABの出力セクションで発生するクリップの過度特性を滑らかにしてくれます。このようにサイマル・クラスは荒っぽいエッジを滑らかにし、高音域をボイシングし直します。- パワーとヘッドルームは大きいままで、爽やかで音楽的なクリップの過度特性を実現しているのです。90 W (サイマル・クラス) ポジションは、クリーン・コード・サウンド、低音域がタイトで爽やかなクランチ・リズム・サウンド、そしてボーカルのようなソロ・サウンドといった、大きなヘッドルームが必要なライブ・パフォーマンスに向いています。

フロントパネル: (続き)

45ワット(エクステンデッド・クラスA、プッシュ・プル):

この設定では内側の6L6ペアーのみを、バイアスを下げたエクステンデッド・クラスAで動作させています。このモードでは発熱量が若干多くなりますが、特にクリップし始めのサウンドのざらつきが無くなり滑らかになります。



パワーを半分にするこのポジションは、押しの強いリズム・サウンドや、滑らかなブレーク・アップを起こしているクリップし始めのサウンドになります。また、高音域は弾けており、ざらつきも有りません。そしてそのサウンドは、ブルースやルーツ、そしてクラシック・ロックの単音ソロ・サウンドに向いています。歪みはプリアンプで生成されたものではなく、本物のパワー・クリップ・サウンドです。ギグのボリュームに於いて、４５ワット・モードの設定がパワー・バンドを生かしきれるレベルになっており、懐かしの曲を演奏するのにぴったりな、心地良いオーバードライブ・サウンドを奏でます。

整流器について: チャンネル１と２の４５ワット・モードでは、音楽スタイルに合ったタイプのハイ・ボルテージの整流器を選択する事が出来ます。(Mark IIC+ とMark IVでは真空管整流器を使用しておらず、チャンネル３では五極管か三極管を選択して使用しているので、オリジナルのパフォーマンスを忠実に再現出来るのです。Mark IIC+は三極管構成になっており、Mark IVは、PENTODE(五極管) / TRIODE(三極管)スイッチで選択出来る様になっています) ９０ワット・モードでは、シリコン・ダイオードが自動的に選択され、１０ワット・モードでは、低いボルテージで伝統的なビンテージ・パフォーマンスを実現する、5U4パワー管に自動的にトラッキングされます。

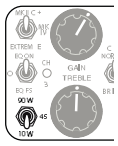
既に述べた様に、音楽スタイルに応じて、シリコン・ダイオードから真空管整流器まで、異なるキャラクターを選択する事が出来るのです。

DIODES(ダイオード)は、最大のヘッドルームとパンチ、特に低音域に於けるタイトなトラッキング、クリーン・サウンド、クランチ・サウンド、そしてリード・サウンドを提供し、最高レベルの精細度と明瞭度を与えてくれます。

真空管はヘッドルームが少なく、中高域が窪んだ周波数特性のゆったりしたサウンドになり、弦を弾いた時には、しなやかでつらつとした感覚があります。真空管整流器は、リズム・ワークに於ける歪み始めのサウンドや、ビンテージ・スタイルの単音ソロ・サウンドに向いています。真空管は、高音域を１オクターブ上げたボイスを生成し、それと同時にそのサウンドを少し抑えます。

10ワット(クラスA、シングル・エンデッド)

このポジションは、低いパワーでクラスAの動作をさせるだけでなく、ビンテージの魔力を持つシングル・エンデッド構成に、ワイヤリングを切り替えます!出力ステージのワイヤリングの世界では、シングル・エンデッドは神聖な回路とされています。最も爽やかで、様々な制限がある中では最も滑らかなパワー・スタイルであり、サウンドはまさに極上です。



シングル・エンデッド構成は、プッシュ・プル回路に於いては打ち消し合ってしまう第２倍音を強調します。第２倍音は元の音の１オクターブ上の音なので、とても協和します。そのサウンドはとても爽やかで、元音に豊かさを加えてくれます。しかしこの第２倍音は、現代的で強力なプッシュ・プル回路では打ち消し合って消えてしまいます。多くのアンプが開発された時、プッシュ・プルは偉大な進歩とされていました: より少ない歪みでより大きなパワーを生み出したからです。しかし初期のアンプは、映画館の新しい"トーキー"の為に設計されていたのであり、楽器用ではなかったのです。楽器にとって倍音はまさに魔法の表現力を持っており、サウンドの一部なのです。興味深い事に、最も高価な部類の"ハイ・エンド"ステレオ・アンプの中には、古い映画館用の300B三極管を、シングル・エンデッドのクラスAで動作させて使用している物も有るという話です。そしてそれは、とても"音楽的な"サウンドだそうです!

10ワットモードでは、5U4の隣の２基の6L6を、シングル・エンデッドのクラスAで動作させ、プッシュ・プルではなく並列のワイヤリングにしています。一方他の２つの機能では、シングル・エンデッド構成を"最近主流の"プッシュ・プルで適正に動作させています。この特許技術が障害を克服し、プッシュプル動作を抑え目にする事で、飽和を防ぎバランスのとれた状態にする事が出来たのです。

この設定を使用して家で練習する事で、弦のフィーリングが驚くほど良くなり、サウンド面では、クリーン・コード・サウンドとオーバードライブ・ソロ・サウンドが、豊かで豪華になりました。プリアンプのゲイン設定を低めにして、強めの演奏でクリップさせると、ダイナミックでとても表現力が豊かな、パワー管のオーバードライブ・サウンドになります。ブルースやクラシック・ロック・スタイルのレコーディングには、１０ワット・モードの緊迫感のあるクリップ・サウンドを使用してみて下さい。チャンネル１の全てのモードと、チャンネル２の全てのモードでGAIN（ゲイン）コントロールを１０時から１時に設定してみて下さい。

シングル・エンデッドは意外なことに、チャンネル２と３のハイ・ゲイン・サウンドにも有効です。とても低いボリューム・レベルでも途方も無い量の歪みを発生しますが、明瞭度と鮮明度は失っていません。超低音域のタイトさは少し和らいでアタックも若干遅くなります。- グラフィックEQで多量の低音域を減衰させれば、その分ボリュームを上げる事が出来る様になります。

チャンネル１のTWEED（ツイード）モードで、GAIN（ゲイン）を右に回しきり、TREBLE（トレブル）を２時、BASS（バス）を８時半から１０時、PRESENCE（プレゼンス）を１０時から１２時にして、１０ワット・モードと組み合わせると、強烈にクリップした懐かしのリズム・サウンドになります。これは、ダイナミックなパンチを残しつつ、かっこ良い緊迫感のあるロック・サウンドになります。事実、このサウンドは、フットスイッチも、ものすごいゲインも必要ない、シンプルにギターのボリュームつまみで、コード・サウンドから偉大なビンテージ・スタイルのリード・サウンドまでを、コントロールしてしまう方に最適です。１０ワットのTWEED（ツイード）はアンプそのものです!

ノート: １０ワット・モードはボリューム・レベルの限界が小さいので、MARK Ⅴのフットスイッチ・マトリックスに入れない方が良いでしょう。演奏には充分な音量とはいえ、１０ワットから他のワッテージ（９０ワットや４５ワット）に切り替えたり、他のワッテージから１０ワット・モードに戻るときは、内部の電圧の変化は相当大きなものになります。

パワー管の間で起こるこれらの電圧の変化や、電圧が瞬間的に変化する事により、電源で発生する（ポップ）ノイズは、回路全体で信号をミュートしたとしても、聞こえてしまう可能性があります。いくつかのチャンネルを切り替えて使用したくて、そのチャンネルの１つが９０ワットあるいは４５ワットで、もう一方のチャンネルが１０ワットのシングル・エンデッド・モードの場合は、"ポップ"を絶えず監視していなければなりません。これを怠ると、アンプを傷めかねませんので注意して下さい。

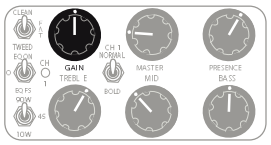
どのワッテージを選択しても、全てのチャンネルで望むサウンドが作れる様に、MARK Ⅴには、パフォーマンス、プリアンプのサウンドとパワーアンプを合わせる力、そして、１台のアンプで様々なサウンドを作れる多様性等が備わっています。このアンプを手に入れたという事は、アンプ版"ブティック"のオーナーになったようなもので、店の中を好きな様に飾り付ける要領で、MARK Ⅴをいろいろなワッテージとモードで、自由自在に操る事が出来るのです!

さあ、それでは各コントローラーを詳しく理解して、実際に触って音を出して、自由にサウンドを作れる様になりましょう。

フロントパネル: コントロール

GAIN（ゲイン）:

これはMARK Vの中で最も強力なコントローラーであり、その設定が各チャンネルの３つのモードのスタイルと個性を決定します。ゲインの設定値は、選択されるチャンネルやモードによって、異なる真空管ステージに適用され、それが入力ステージのヘッドルームになります。そしてそれによりサウンドがクリーンになるのか、オーバードライブになるのかが決まります。また、ゲインはトーン・コントロールの役割も少しではありますが果たします。真空管ステージのゲインが多いか少ないかによって、サウンドの"カラー"がある程度決まるのです。



全てのチャンネルに於いて、GAIN（ゲイン）コントロールは３つの領域に分けられます。９時から１１時半の低いゲイン領域は暖かみのあるサウンド、１２時から２時の領域は少し歪みのあるサウンド、２時半から５時半の領域はハイ・ゲイン・サウンド。各領域は様々な用途で使用され、コード・サウンドにも単音ソロ・サウンドにも使用されます。GAIN（ゲイン）コントロールは、その領域毎に異なる質感と音質の個性を持っています。

一般的に、低い領域（９時半から１１時半）は、全てのチャンネルとモードに於いて、明るくオープンな個性を生み出し、ダイナミックな演奏を許容します。この領域は、最大のヘッドルームを持ち、高音域の倍音成分が豊富で、アタックが軽くて早い、チャンネル１の、クリーン・サウンドや、弾けるようなコード・サウンドに最適です。チャンネル２のモードでは、ゲインをこの領域にすると、暖かみのあるサウンドになりますが、ギターが本来持っている個性がそのまま反映される傾向があります。チャンネル２のこの領域は、楽器本来のダイナミクスが多く生かされ、圧縮されて歪み過ぎる事の無い、クリップ・コード・サウンドを生み出します。チャンネル３でも、ゲインがこの領域だと、レスポンスが速いコード・サウンドや、ソロ・サウンドになります。それぞれのモードがゲインの設定によって、生き生きとしたビンテージ・サウンドになったり、猛烈なハイ・ゲイン・サウンドになったりする事に、びっくりされる事でしょう。

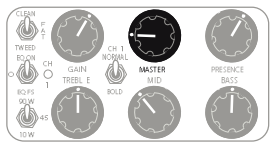
GAIN（ゲイン）コントロールの中位の領域（１２時から２時）は、サウンドのバランスが最もとれていて、暖かみがあり、アタックが速く、ダイナミックで、信号に対するトーン・コントロールの効きが強力になっています。チャンネル１のCLEAN（クリーン）モードとFAT（ファット）モードは、コードのレスポンが良く、サウンドは豊かで音の芯がしっかりしています。ピックアップの種類と出力にもよりますが、クリップ・ポイント近辺の変化に注意してみて下さい。チャンネル２のベスト・サウンドのいくつかは、このクリップ・ポイント近辺で、滑らかな真空管のオーバードライブが起きています。チャンネル３のモードは、とても柔軟性に富んでいて、中位のゲインに於けるサウンドの明瞭度は大変良好です。このチャンネル３のサウンドは、チャンネル１や２よりもゲインが高くなっており、この領域が最も良いダイナミック・レスポンスとアタックのキャラクターを得られます。GAIN（ゲイン）コントロールが２時に近づいてくると、歪みが多くなりコードもソロ・サウンドも圧縮が掛かり過ぎる事無く、保持出来ています。チャンネル２や３でGAIN（ゲイン）コントロールをこの領域にしても良い結果が得られない場合は、ピックアップを出力の大きなものに変更してみて下さい。

GAIN（ゲイン）コントロールを最も高い領域（２時半から５時半）にすると、完全に歪みます。ここまで上げると、低音域は厚くなり、高音域は丸みが少なくなって、サウンドが圧縮されます。ダイナミクスは減少し、サウンドはクリーミーになり、音と音がレガートで繋がる様に感じます。チャンネル１でGAIN（ゲイン）コントロールをこの領域にすると、入力ステージで歪み始めて"クリップしたクリーン・サウンド"になります。これらのサウンドは、４５ワット・モードと１０ワット・モード、さらにフロント・パネルのPOWER（パワースイッチ）にある、VARIACにすると、さらに強調されます。チャンネル２では、GAIN（ゲイン）コントロールをこの領域にすると、３つの全てのモードがリード・モードとして、真のポテンシャルを発揮します。ゲインをここまで上げると、MARK Iモードではゲインが突き刺さり、分厚くクリーミーなオーバードライブ・ソロ・サウンドが、途方も無い大音量で響き渡ります。チャンネル３では、GAIN（ゲイン）コントロールがこの領域になると、完全に限界点に達しています。これらのモードでGAIN（ゲイン）コントロールが中位の時の特徴は、歪んでいても音の明瞭度は保たれ、ゲインの量に応じてキャラクターが変化する、純粋なブギーらしいサウンドであり、MARK V（もちろんそれ以前のメサのアンプでも）でしか成し得ないものです。しかし、GAIN（ゲイン）コントロールがこのレベルになると、サウンドが歪み過ぎてしまっていて、トーン・コントロールの効果はごく限られたものになってしまいます。そして、サウンドのキャラクターは、各モードのボイシングによってほぼ決まってしまいます。

フロントパネル: コントロール（続き）

MASTER（マスター）:

このコントロールは、信号経路のプリアンプの最終段に位置しており、各チャンネルの最終的な出力レベルを決定します。



GAIN（ゲイン）コントロールと組み合わせて使用する事で、プリアンプの信号の強さの量をゲインでコントロールし、演奏の音量をMASTER（マスター）でコントロールする事が出来ます。チャンネル毎にそれぞれにふさわしいサウンド作りをしたら、MASTER（マスター）コントロールを使用して、チャンネル毎にボリューム・レベルを調整します。

純粋なサウンドを好まれる方は、リア・パネルのEFFECTS LOOP（エフェクト・ループ）をHARD BYPASS（ハード・バイパス）に設定して下さい。これによりMASTER（マスター）コントロールが最終的な（OUTPUTコントロールはEFFECTS LOOP回路の一部なので）ボリューム・コントローラーになります。アンプ全体の演奏レベルを上げたり下げたりするときは、この３つのMASTER（マスター）コントロールで調整して下さい。

EFFECTS LOOP（エフェクト・ループ）のトグル・スイッチを上のLOOP ACTIVE（ループ・アクティブ）にすると、MASTER（マスター）コントロールは、EFFECTS RETURN（エフェクト・リターン）の役割を果たします。エフェクト・プロセッサーの入力レベルをMARK VのEFX SEND LEVEL（エフェクト・センド・レベル）で調整して、EFFECTS LOOP（エフェクト・ループ）のトグル・スイッチをLOOP ACTIVE（ループ・アクティブ）とHARD BYPASS（ハード・バイパス）で切り替えながら、どちらでも同じ音量に聞こえる様にします。

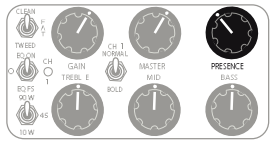
特殊な場合を除けば、全てのモードで最も良いパフォーマンスを生むのは、MASTER（マスター）コントロールを９時から１２時の間に設定している時で、ほとんどの場合、１０時半前後に設定するのが良いでしょう。LOOP（ループ）がBYPASSED（バイパス）されていると、大きな会場では高めの設定を必要とされます。

純粋なサウンドを好まれる方の中には、MASTER（マスター）コントロールを右回しきりにしておいて、求めるサウンドになるまでGAIN（ゲイン）を上げる方法をとる人がいます。確かにそのサウンドは最も純粋です。理論的には、これにより信号経路をコントロールするものが無くなると考えるのですが、その代わりに、ほとんど全ての"大きくはないビンテージ・アンプ"には、パワー・セクションへのプリアンプの出力を"調整"する為の回路が用意されているのです。

MASTER（マスター）コントロールは可変抵抗そのものであり、たんなる音量変更にとどまらず、多種多様な用途を提供してくれます。前述したような古い手法でMARK Vを用いても、特にアンプを破損するような事はありませんが、折角のポテンシャルに、自ら制限を加えているようなものです。これは、GAIN（ゲイン）とMASTER（マスター）の組み合わせによる無限の可能性を生かさない、もったいない行為と言えるでしょう。

PRESENCE（プレゼンス）:

このコントロールは、TREBLE（トレブル）よりも高い周波数帯域を調整します。信号経路で言うと、このコントロールはプリアンプではなく、もっと後段のパワー・セクションに位置しています。PRESENCE（プレゼンス）は、各モードに合わせたパワー・セクションの、ネガティブ・フィードバック回路のある特定の周波数帯域を調整します。MARK Vは、様々なモードで、それぞれのボイシングを実施するために、複雑なスイッチングを行う、膨大な回路で構成されており、PRESENCE（プレゼンス）は、音楽的に使用可能な周波数帯を調整しサウンド・スタイルを決定します。



PRESENCE（プレゼンス）は、パワーアンプをコントロールし、圧縮をかけてサウンドを暗くしたり、反対に開く事で、あらゆる周波数帯域の倍音成分を通して、明るいサウンドにする事が出来ます。PRESENCE（プレゼンス）は、信号をどれだけダイナミックにするか、アンサンブルの中でどれだけ引き立つ様にするかといった事をコントロールします。

これを低めの設定（７時半から１０時半）にすると、暖かみがあって丸いサウンドになり、圧縮された感じが増して、ダイナミックさが制限されます。PRESENCE（プレゼンス）を上げて１１時から２時半にすると、高音域が支配的になり始め、圧縮感が"無くなり、ダイナミックなピークが速さと精度を増します。一番高い領域（２時半から５時半）になると、超攻撃的な高次倍音がサウンドを支配し、大きな音量にすると危険を伴うほどです。この領域で高い音程の演奏をすると耳に負担がかかるので、スタジオでのレコーディング時に、この領域に設定するのなら、ヘヴィー・クランチ・リズム・パートで、主に低音の弦を弾く様にする事をお勧めします。この領域のサウンドは、PA（サウンド・リインフォースメント）で良く使用されるタイプのマイクの周波数特性では、拾いきれないかもしれません。

フロントパネル: コントロール（続き）

攻撃的な高音域が必要な場合や、サウンドを暗めにしたい、あるいはもっと圧縮感のあるサウンドにしたいといった、特別な目的がある場合を除いて、全てのモードで、バランスのとれたサウンドにする為には、PRESENCE（プレゼンス）の設定を、低い領域から中位の領域（９時から１２時半）で使用することをお勧めします。

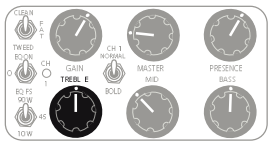
チャンネル１のクリーン・サウンドは、オーバードライブが基本の他のモードに比べて、PRESENCE（プレゼンス）を高め（１０時半から１２時半）に設定する事が出来ます。しかし歪み始めると、PRESENCE（プレゼンス）コントロールが高音域を強調して、エッジのざらついたサウンドになってしまう事があるので、注意が必要です。オーバードライブの掛かったコード・サウンドは、単音ソロ・サウンドと比べて、高めの設定（１０時半から１２時半）にする事が出来ます。単音ソロ・サウンドは、この設定を１１時未満にしないと、丸さや明瞭度を保つ事が出来ません。

ノート: チャンネル３のEXTREME（エクストリーム）モードは、パワー・セクションのネガティブ・フィードバックで、様々な要素を変更し、根本的にボイシングをやり直します。このモードは他のモードと比べて、本質的に高次倍音を多く含んでいます。この高次倍音の豊富さと攻撃的な性質が、他のモードと比べて、PRESENCE（プレゼンス）コントロールによる効果を、少ないものにしています。EXTREME（エクストリーム）モードのキャラクターが、PRESENCE（プレゼンス）でコントロールする要素と重なっているという事です。

ノート: PRESENCE（プレゼンス）コントロールを高め（２時半から５時半）に設定すると、プリアンプ管が飽和状態になり、ハウリングを起こしてしまう可能性があります。そしてさらに、リンギング・ノイズや、不安定な症状を見せる事もあります。MARK V は、製造時に安定した真空管を取り付けて、多くのテストに合格したもののみを出荷しています。しかしながら、真空管は電灯のバルブ同様完全ではありませんし、経年変化や劣化をします。ただ幸運な事に、ほとんどの真空管の問題は、ただ単純に真空管を交換する事で、解決してしまいます。PRESENCE（プレゼンス）コントロールを高めに設定する事を避けて、トラブルの無いパフォーマンスを心がけましょう。コンボ・バージョンでは、振動や共鳴も真空管にとってストレスになりますので、出来るだけ避けて下さい。

TREBLE（トレブル）:

VOLUME（ボリューム）がMARK Vの中で最も強力なコントローラーだとしたら、TREBLE（トレブル）は僅差で２番目といえるでしょう。TREBLE（トレブル）はアンプのキャラクターを形作ります。それは他のトーン・コントロールを大きく凌いでいますので、その設定は３つのモード全てに於いて、サウンドの豊かさとバランスを決定付けます。事実、TREBLE（トレブル）の回路のあとにMID（ミッド）とBASS（バス）を通りますので、バルブの役割も果たしています。



TREBLE（トレブル）が高い領域（２時から５時半）に設定されていると、とても明るいキャラクターのサウンドになり、他のトーン・コントロールはほとんど効果がなくなってしまいます。反対に、TREBLE（トレブル）の設定を低くすると、MID（ミッド）とBASS（バス）のコントロールが効くようになり、少し重く、暗い感じにすることも出来るようになります。ですから、TREBLE（トレブル）の設定は注意が必要ですし、トーン・コントロールの中で果たす役割が大きいという事を覚えておいて下さい。

TREBLE（トレブル）を中位の領域にすると、全てのチャンネルの全てのモードに於いて、豊かさと暖かみを残しながらも、最もバランスのとれた、充分明るさのあるサウンドになります。お望みのサウンドを得る為に、TREBLE（トレブル）を１２時に設定する所から始めて、徐々に調整していく事をお勧めします。PRESENCE（プレゼンス）は、他のトーン・コントロールの影響を受ける事無く、高い周波数帯域を調整します。信号経路で言うと、PRESENCE（プレゼンス）コントロールはプリアンプではなく、もっと後段のパワー・セクションに位置しているからです。

ノート: チャンネル１でGAIN（ゲイン）を右に回しきって、クリップしたブルース・サウンドで演奏している時には、TREBLE（トレブル）コントロールの設定に十分な注意を払って下さい。TREBLE（トレブル）を高め（１時半から２時半）に設定してしまうと、さらにゲインも増えてしまい、チャンネル１のモードでは、強めの演奏をすると歪んでしまいます。タイトさを保ちたい場合は、BASS（バス）の設定も低め（８時半から９時半）にして下さい。

ノート: チャンネル２のEDGE（エッジ）モードでは、TREBLE（トレブル）を通常（１０時半から１１時半）よりも少し低めに設定する必要があります。それにより、このモードが本来持っている高音域が分厚いキャラクターの、暖かみのあるバランスのとれたサウンドになります。

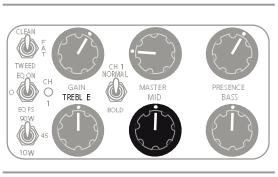
フロントパネル: コントロール（続き）

ノート: ハイ・ゲインのコード・サウンドや単音ソロ・サウンドを求めている場合は、チャンネル２のMARK I モードにして、TREBLE（トレブル）を高め（１時半から２時半）に設定すると良いでしょう。この手順を踏めば、ゲインを正しく増やす事が出来て、明瞭度が高くピッキングに対するタイトな追従性を保つ事が出来ます。

ノート: TREBLE（トレブル）コントロールを高め（２時半から５時半）に設定すると、プリアンプ管が飽和状態になり、ハウリングを起こしてしまう可能性があります。そしてさらに、リンギング・ノイズや、不安定な症状を見せる事もあります。MARK V は、製造時に安定した真空管を取り付けて、多くのテストに合格したもののみを出荷しています。しかしながら、真空管は電灯のバルブ同様完全ではありませんし、経年変化や劣化をします。ただ幸運な事に、ほとんどの真空管の問題は、ただ単純に真空管を交換する事で、解決してしまいます。TREBLE（トレブル）コントロールを高めに設定する事を避けて、トラブルの無いパフォーマンスを心がけましょう。コンボ・バージョンでは、振動や共鳴も真空管にとってストレスになりますので、出来るだけ避けて下さい。

MID（ミッド）:

MID（ミッド）コントロール）は、一般的なトーン・コントロールのような働きをします。VOLUME（ボリューム）やTREBLE（トレブル）ほど強力ではありませんが、３つのモード全てのサウンド・キャラクターを後押しする役割を担っています。周波数帯域は広い中音域をカバーしており、その音域を強調するかしないかを調整します。またこの周波数帯は、"トレブルの低い方" の周波数帯と重なり合っています。この周波数の上限はTREBLE（トレブル）やPRESENCE（プレゼンス）の上限よりも低くなっていますが、音にパンチを与える重要な役割を果たしています。



チャンネル１のCLEAN（クリーン）モードとFAT（ファット）モードのリズム・サウンドは、MID（ミッド）を低め（７時半から１０時）に設定して、中音域のアタックと低音域を減衰させると良いでしょう。この領域は弦のしなやかさが直接伝わるので、とても演奏し易くなっています。また、シングル・コイル・ピックアップのギターに向いており、ゴムを弾いた時のような低音域のキャラクターを持ったサウンドは、ブルース、R&B 、カントリー等のクリーン・スタイルに最適です。

中位の領域（１０時から１時）にすると、パンチとアタックが強くなり音に緊迫感が出てきます。マホガニー・ギターにはこの設定がとてもあっており、音の厚みが増します。この領域になると高音域が強調され始め、コード・サウンドにおいてはキラキラしたサウンドになり、音が前に出てくるようになって、とても存在感のあるキャラクターになります。

その上の領域（１時から５時半）にすると、MID（ミッド）コントロールが作り出す属音の周波数帯の存在感が増し、よりアグレッシブな押し出しの強いサウンドになります。この領域になると、MID（ミッド）コントロールが高くなるにつれて低音域も増し、サウンドに豊かさと暖かみが出てきます。MID（ミッド）コントロールをこの領域にしたままで、アタックと緊迫感を保つ為には、他のトーン・コントロール（最終出力が大きくなってしまうのでMASTERを除く）を高めに設定しなければなりません。しかしこれはある程度の所で譲り合わないとプリアンプのヘッドルームに達してクリップしてしまいます。ですから、そうならない程度に一連のトーン・コントロールを調整する様にして下さい。

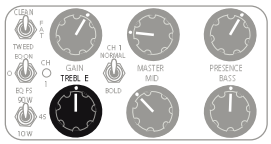
チャンネル２と３のモードにおけるMID（ミッド）の設定は、ゲインと似ています。低め（７時半から１０時半）の設定にすると、広がるようなサウンドになり、コード・サウンドは弾む様に、ソロ・サウンドはクリーミーで滑らかなサウンドになります。ゲインとTREBLE（トレブル）とPRESENCE（プレゼンス）によって作られた高次倍音が豊かなサウンドは、MID（ミッド）で３次元的に色づけされ艶が出ます。

MID（ミッド）はこの領域を過ぎると、サウンドは太く"ガッツのあるパンチ"になり、トレブルの低い周波数帯域のアタックが強くなり、押しの強い音になります。

ノート: チャンネル２と３の全てのモードで、MID（ミッド）を様々な設定にして、サウンドの変化に注意を払ってみて下さい。MID（ミッド）を変化させる事で、演奏している時の弦の感覚が、ダイナミックに音に現れます。チャンネル２のEDGE（エッジ）モードとCRUNCH（クランチ）モードは、MID（ミッド）で根本的なサウンド作りをすることができます。低めの設定にすると、クリーミーで中音域の窪んだ単音ソロ・サウンドになり、高めの設定にすると、パンチの効いた、クラシック・ロック・クランチ・リズム・サウンドになります。

フロントパネル: コントロール（続き）

BASS（バス）:



MID（ミッド）同様に、BASS（バス）コントロールも、代表的なトーン・コントロールの１つです。BASS（バス）コントロールは、低音域を豊かにしてサウンドを丸くします。モードを切り替えると、内部では回路が切り替わり、９個の回路（モード）それぞれに於いて、回路内での位置と周波数のボイシングがやり直されます。この違いはサウンド・キャラクターに大きく影響します。

チャンネル１のCLEAN（クリーン）モードとFAT（ファット）モードは、より多くの低音域を受け入れられるので、サウンドに奥行きや空間的な広がりを加える事が出来ます。ハイ・ゲインの回路に多くの低音域をバランスさせる為に、コントローラーは緩やかなカーブ特性になっています。チャンネル１のTWEED（ツイード）モードとチャンネル２と３のほとんど全てのモード（チャンネル２のMARK Iモードは低音域が豊富なので除く）では、低音域の周波数設定が高めになっています。これにより音の響きと通りが良くなり、ピッキングに対する追従性がタイトになり、活き活きはつらつとした感覚になります。低音域よりも周波数特性の良い高音域が使用されます。そして、速いフレーズをプレーしている時には、レスポンスが遅いと困るので、CLEAN（クリーン）モードやFAT（ファット）モードやMARK Iモードで、レスポンスの速いサウンドを使用します。

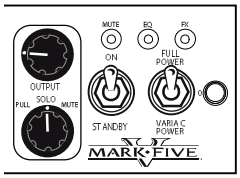
チャンネル２のEDGE（エッジ）モードとチャンネル３のEXTREME（エクストリーム）モードで、高めの周波数に設定されているBASS（バス）コントロールを、多めの設定にする事で、トレブルのアタックが鋭いサウンドになります。これら２つのモードでBASS（バス）コントロールを、１１時から１時半に設定すると、クランチ・リズム・サウンドになります。

チャンネル２のMARK Iモードは、バスの回路の中での周波数設定がとても低いので、BASS（バス）コントロールの感度が、とても高くなっています。バスの周波数設定が低い為、このモードのサウンド・キャラクターは太くなります。この分厚い低音域のおかげで、単音ソロ・サウンドは暖かみがあり、ハイ・ゲインのコード・サウンドは、大きくて分厚いクランチの壁のようです。高めのGAIN（ゲイン）設定で、単音ソロ・サウンドとコード・サウンドの両方を使用したいのなら、BASS（バス）コントロールを低いレベル（７時半から１０時）に設定する事を推奨します。GAIN（ゲイン）を下げれば、BASS（バス）コントロールを少しだけ高めの設定（１０時から１１時）にして、純粋なリズム・サウンドやブルース・ソロ・サウンドにする事が出来ます。

さあ、これでチャンネルとモードの解説は終了です。このあとは、MARK Vのその他のたくさんの機能について理解を深めて、あなた独自の音作りに役立てて下さい。

フロントパネル: 機能

OUTPUT (アウトプット) とSOLO (ソロ) :



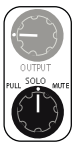
このセクションでは、リア・パネルのEFX LOOP (エフェクト・ループ) のスイッチが、上のLOOP ACTIVE (ループ・アクティブ) になっていて、有効なエフェクト・プロセッサーが接続されている場合の、MARK Vの最終的な出力レベル (演奏ボリューム) をコントロールします。最初の方で触れた様に、EFX LOOP (エフェクトループ) のスイッチが、下のHARD BYPASS (ハード・バイパス) になっていると、各チャンネルのMASTER (マスター) コントロールがそのチャンネルの最終的な出力ボリュームになります。これらのコントローラーは、信号経路の後ろの方のパワーアンプの最終ステージにあります。そしてエフェクト・リターン・レベルとしても動作します。これを特に意識する必要はありませんので、演奏しながら必要なレベルに調整して下さい。3つのチャンネル間の音量のバランスは、チャンネル毎のMASTER (マスター) コントロールを使用して、アンプ全体のボリュームを上げたり下げたりする時は、OUTPUT (アウトプット) コントロールを使用します。チャンネル間のレベルを考えて、OUTPUT (アウトプット) コントロールを設定しないと、急に大きな音が出る場合があります。これは、モード (サウンド) によって、他のモード (ハイ・ゲイン・サウンド) よりもダイナミック (例えばクリーンでゲインの低いサウンド) で、音量が大きく聞こえるサウンドがあるという事です。

MARK Vには、もう1つの特許技術である、ライブ・パフォーマンスにとても重宝する機能があります。それは、SOLO (ソロ) コントロールです。このコントロールは、OUTPUT (アウトプット) に直列接続されており、フットスイッチ切り替えが可能なアンプ全体のマスター・ボリュームです。ソロの演奏をする時にスイッチで切り替える事により、事前に設定しておいた量のブーストが行われます。ライブ・パフォーマンスの時は、ハウスエンジニアに、ソロの演奏の時には自分で音量を上げる事を事前に伝える様にして下さい。

MARK VのフットスイッチのSOLO (ソロ) ボタンでSOLO (ソロ) を選択しても、リア・パネルのFOOTSWITCH DINジャックにフットスイッチが接続されていなければ、有効ではありません (ボリュームも無効です)。SOLO (ソロ) は、フットスイッチによってのみ有効に出来ます。

ノート: SOLO (ソロ) コントロールは、OUTPUT (アウトプット) コントロールで設定したレベルよりも上げる事は出来ますが、下げる事は出来ません。

SOLO (ソロ) : PULL MUTE (プル・ミュート)



SOLO (ソロ) コントロールは、引っ張る事の出来るつまみを採用しており、そうするとスピーカーから音を出さずに、チューニングをする事が出来ます。チューナーを、リア・パネルの右側 (後ろから見て) のSLAVE OUTPUT (スレーブ・アウト) の下に ある、TUNER OUTPUT (チューナー・アウト) ジャックに接続します。そしてSOLO (ソロ) コントロールを引っ張ると、サイレント・チューナー・モードになります。チューニングが終了したら、SOLO (ソロ) コントロールを押し込むだけで、通常の演奏が出来ます。

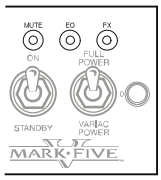
PULL MUTE (プル・ミュート) 機能は、エフェクト・ループがオンになっていて、適正な接続がされている状態であれば、いつでも使用する事が出来ます。長時間音を出さない場合は、STANDBY (スタンバイ) にする事を推奨します。それにより、パワー管を長く良い音で使用する事が出来ます。

ノート: SOLO (ソロ) コントロールは、EFX LOOP (エフェクト・ループ) 回路の一部ですので、TUNER OUTPUT (チューナー・アウト) とPULL MUTE (プル・ミュート) 機能は、EFX LOOP (エフェクト・ループ) が HARD BYPASS (ハード・バイパス) になっていると使用出来ません。

フロントパネル: 機能（続き）

LED インジケーター：

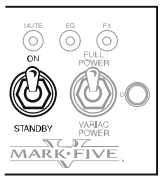
これら３つのLEDは、MUTE（ミュート）、EQ、EFX LOOP（エフェクト・ループ）の動作状況を表示します。その機能が動作しているとLEDが点灯します。この機能は大きな会場で、アンプから離れた所からでも、アンプの動作状況を把握出来るので大変便利です。



ノート: MUTE（ミュート）とEFX LOOP（エフェクト・ループ）は、EFX LOOP（エフェクト・ループ）がLOOP ACTIVE（ループ・アクティブ）になっている時のみ使用可能です。

STANDBY（スタンバイ）：

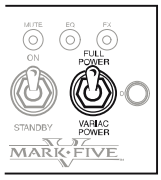
このトグル・スイッチは大変重要な役割を担っています。このスイッチがスタンバイの位置にある時は、真空管はまだ準備段階で、ウォームアップをしています。電源を入れる時は、このスイッチがスタンバイの位置にある事を確認して下さい。



電源を入れてから、最低３０秒の時間をおいてから、このスイッチをオンにする様にして下さい。そうする事で、真空管のトラブルを予防出来ますし、良い音で使用出来る期間が長くなります。

FULL POWER（フル）/ VARIAC POWER（バリAC）：

このスイッチには２つの役割があります; このスイッチは、壁のコンセントから得た交流電源電圧を、通常通りフルに使用するモードと、電圧を少し落として、緩くてしなやかなフィーリングを出すモードを切り替えます。



FULL POWER（フル）は、アンプにフルの１２０ボルトの電圧（状況によって若干の上下はありますが）を供給します。これは、全てのチャンネルに最大のボリューム、ヘッドルーム、そしてパンチがあって太いサウンドをもたらします。

VARIAC POWER（バリAC）は、入力される電圧をだいたい９５ボルトに下げて（これも状況によって若干の上下はありますが）供給します。このポジションにすると、中音域が窪んだ周波数特性になり、弦を弾いた時の感覚が緩くてしなやかになり、高次倍音が若干多いサウンドになります。これにより、サウンドに落ち着きが出て、この柔らかいパワー・フィーリングは、クリーン、ルーツ、ブルース、クラシック・ロック・リズム・サウンドに最適なパワー・クリップ・サウンドになります。このモードと１０ワット・パワーを組み合わせると、MARK Vは、たわんだ雰囲気のロー・パワー・パフォーマンスを発揮します。

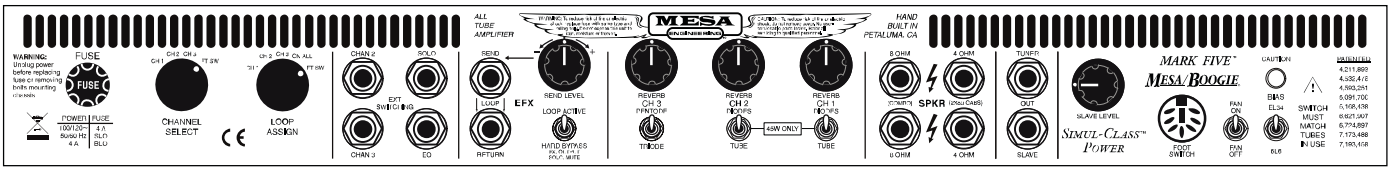
あらゆるスタイルに対応出来る万能タイプのFULL POWER（フル）モードは、最大のヘッドルームをもたらし、クリーン・サウンドや、明瞭でタイトな追従性を見せるオーバードライブ・サウンドを生み出します。

ノート: 地域（古いクラブ、屋外、工場街にある住宅等）や時間帯によって、コンセントに供給される電源電圧が低い場合があります。そういう状況が予め予想される場合は、FULL POWER（フル）モードを使用される事を推奨します。そのような状況でVARIAC POWER（バリAC）モードにすると、断続的に誤動作をする可能性があります。FULL POWER（フル）モードで使用した方が、その可能性を減らす事が出来ます。

さあ、これでフロント・パネルの機能については一通り理解出来た事でしょう。今度はリア・パネルの機能について理解を深めていきます。MARK V を末永くお使いいただく為に、是非ご一読下さい

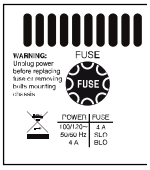
バックパネル: 機能

バックパネル: *MARK V* ™



FUSE (ヒューズ):

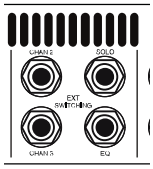
これはA.C. (交流) のメイン・ヒューズであり、外部の突発的な過電圧等からパワー管を保護する役割を果たします。ヒューズが破損したらSlo-Bloタイプの同じ規格のものと交換して下さい。日本国内の１００ボルト仕様には、４アンペアのSlo-Bloヒューズを使用して下さい。ヒューズの破損が原因と見られるパワー管の破損が起きた場合は、次の手順を踏んで下さい。STANDBY (スタンバイ) のセクションでも触れましたが、STANDBY (スタンバイ) からオンに切り替えた時のパワー管の状態を見て下さい。この時パワー管が正常でないと確認出来たら、即座にSTANDBY (スタンバイ) にして、パワー管を交換し、必要に応じてヒューズも交換して下さい。



パワー管に特に異常が見られなければ、STANDBY (スタンバイ) からオンに切り替えて下さい。この場合は、パワー管がたまたま損傷し、それが原因でヒューズが飛んだと考えられます。念のために隣の真空管、あるいは"ショットガン"トラブル・シューティングで全ての真空管を交換して、損傷していない真空管を、予備として保管するのも一つの方法です。予備の真空管は、同じく予備のヒューズと一緒に保管しておくと良いでしょう。

EXTERNAL SWITCHING (外部スイッチ):

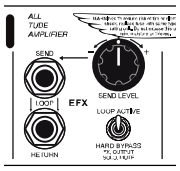
この４つのジャックは、マスター・エクスターナル・スイッチャーを接続して、チャンネル、ソロ、EQをコントロールします。これは、MARK VをMIDI機能を装備したスイッチャーでコントロールする事も可能にします。その場合、MARK Vに接続しているエフェクト・プロセッサー等と一緒にプログラムしておいて、切り替える事が出来ます。このジャックそのものは、単純なチップ・トゥー・グランドのラッチ・タイプのスイッチを接続する事で使用することが可能であり、ほとんどのマスター・スイッチャーはこのタイプのロジックを使用しています。



EXTERNAL SWITCHING (外部スイッチ) ジャックは、MARK Vのコントローラーに優先します。このジャックで、チャンネル切り替えや他の機能のトリガーを"オン"にしたら、このジャックで"オフ"にしなければなりません。

EFX LOOP (エフェクト・ループ):

直列 MARK Vでは、外部のエフェクト・プロセッサーを使用する事が出来ます。この回路は、プリアンプとパワー・セクションの間に直列に接続されます。このループは直列に接続されていますので、エフェクトの掛かっていないドライ信号と、エフェクトの掛かったウェット信号がミックスされます。この回路にはSEND LEVEL (センド・レベル) コントロールがあり、このコントローラーで、プリアンプの出力レベルを、外部エフェクト・プロセッサーの入力に合わせます。HARD BYPASS (ハード・バイパス) / LOOP ACTIVE (ループ・アクティブ) スイッチをHARD BYPASS (ハード・バイパス) にすると、信号経路からEFFECTS LOOP (エフェクト・ループ) 回路がバイパスされます。こうすると、外部エフェクト・プロセッサーは使用出来なくなり、アンプ内部のみの純粋な信号になります。SEND (センド) とRETURN (リターン) ジャックは、LOOP ACTIVE (ループ・アクティブ) とフロント・パネルのOUTPUT (アウトプット) とSOLO (ソロ) に関連しています。



ノート: フロント・パネルのOUTPUT (アウトプット) とSOLO (ソロ) コントロールは、EFFECTS LOOP (エフェクト・ループ) 回路の一部ですので、EFFECTS LOOP (エフェクト・ループ) がオンの時のみ有効であり、HARD BYPASS (ハード・バイパス) の時は無効です。

バックパネル: 機能（続き）

EFFECTS LOOP（エフェクト・ループ）に外部エフェクト・プロセッサーを接続するには:

1. MARK V のリア・パネルのSEND（センド）ジャックと、エフェクト・プロセッサーの入力を、高品質で出来るだけ短いケーブルで接続する。

2. MARK V のリア・パネルのRETURN（リターン）ジャックと、エフェクト・プロセッサーの出力を、高品質で出来るだけ短いケーブルで接続する。

3. MARK V のリア・パネルのSEND LEVEL （センド・レベル）コントロールを使用して、エフェクト・プロセッサーの入力レベルと合うように調整する。エフェクト・プロセッサーの出力レベルを、MARK V に接続する前と同じになる様に調整する。これは、SEND（センド）とRETURN（リターン）を同時に抜く事で確認する事が出来ます。

4. フロント・パネルのOUTPUT（アウトプット）コントロールでボリュームを上げたり下げたりして、エフェクト・リターンステージのボリュームをコントロールします。

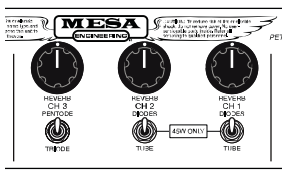
ノート: EFFECTS LOOP（エフェクト・ループ）を使用すると音質が変わるという事は良くあります。ほんの少しではありますが、高音域が減衰することがあります。EFFECTS LOOP（エフェクト・ループ）の接続方法は直列なので、接続するエフェクト・プロセッサーの品質の影響をもろに受けます。エフェクト・プロセッサーを購入する際は、入出力レベルや周波数特性等、機器の品質をしっかりと見極めてからにして下さい。プロ仕様と詠われているものの中にも、品質があまり良くないものも見受けられますので、注意が必要です。

ノート: EFFECTS LOOP（エフェクト・ループ）をオンにすると、多くの回路が加わる為、アンプ全体で見た時に、位相が反転してしまう事があります。これは特に警告が出るわけではないので、普通は気がつきません。位相と言われても普通の人はご存じないでしょう。しかしこれはサウンドに微妙な変化をもたらすのです。

位相の反転について考えざるを得ないケースとして、MARK V（エフェクト・ループがオンの状態）ともう 1 台他のアンプを使用してステレオにする場合があります。この場合は、2 台のアンプをステージ上で出来るだけ離して、最低でも 1 メートル以上の間隔を置いて設置して下さい。

REVERB（リバーブ）:

MARK Vには、素晴らしい音質のリバーブ回路が搭載されています。モードによって、リバーブのボイシングが行われる回路上での場所は異なります。各チャンネルのリバーブのミックス・バランスを調整するつまみは、リア・パネルのほぼ中央に位置しており、全真空管リバーブのウェットとドライのバランスを、妥協する事無く調整する事が出来ます。

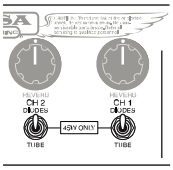


リバーブをバイパスしたい場合は、単純に調整つまみを左に回しきるだけです。そうする事でドライ信号になります。リバーブ・エフェクトのオン/オフは、MARK V のフットスイッチのREV ボタンで行う事も出来ます。

ノート: ウェット/ドライを右に回しきった状態にすると、チャンネル 1 と 3 よりもチャンネル 2 の方が、少しだけリバーブの効果が少ない様に感じます。これは、チャンネルの構成とモードの信号経路によるものです。チャンネル 2 のMARK I モードで、オーバードライブのリズム・ワークや、ハイ・ゲインのリード・ワークをしている時に起きるのですが、決して不便を感じるレベルではありません。唯一それを感じるのは、チャンネル 2 のMARK I モードで、ロー・ゲインのブルース・スタイルの演奏をしていて、リバーブ効果がもっと欲しくなった時位でしょう。

バックパネル: 機能（続き）

整流器切り替え: ４５ワット・パワー・モード



切り替え式整流器はメサの特許技術であり、整流器トラッキングの形では、MARK Vに始めて搭載されました。チャンネル１と２は、それぞれリバーブ・コントロールのチャンネル１と２の下にある、小さなトグル・スイッチで切り替えます。45ワット・パワー・モードでは、タイトで太い、大きなヘッドルームのシリコン・ダイオードのDIODES（ダイオード）モードと、爽やかで緩い低出力サウンドのTUBES（真空管整流器）モードを切り替えます。チャンネル３では、常時シリコン・ダイオードを整流器として使用します。

サイマル・クラスの９０ワット・パワー・モードは、大きな出力のパンチのあるシリコン・ダイオードを自動的に選択し、シングル・エンデッドのクラスAで動作させます。１０ワット・モードにすると、真空管整流器を選択し安全に動作します。整流器の回路は入力される交流を直流に変換して、真空管を駆動します。整流器のタイプによって、サウンドのインパクトやアンプの感覚が変わります。

DIODES（ダイオード）は、最大のヘッドルームとアタックとダイナミクスを生み、特に低音域の追従性がタイトになります。DIODES（ダイオード）は、チャンネル１のクリーン・コード・サウンド、チャンネル２と３の、タイトな追従性のクランチ・リズム・サウンドに最適です。リード・サウンドは激しさがありながら明瞭度を保っています。

TUBE（真空管）は、全てがゆったりとします。ヘッドルームは減少し、サウンドが滑らかになって、中音域が窪んだ周波数特性になり、弦を弾くと弾むような感覚があります。真空管整流は、ビンテージ・スタイルの単音ソロ・サウンドに最適な、歪み始めのディストーション・サウンドになります。TUBE（真空管）は、高音域が１オクターブ上がった様に、ボイシングをやり直します。

チャンネル 3: TRIODE（三極管）/PENTODE（五極管）

PENTODE（五極管）/ TRIODE（三極管）を小さなトグル・スイッチ（チャンネル３のリバーブ・コントロールの下に位置する）で切り替えて、チャンネル３の内側のパワー管の構成を変更します。これはMARK IVに装備されている機能であり、アタックの感じが変化し、チャンネル３でハイ・ゲインにすると瑞々しいサウンドになります。

このスイッチは、クラスAで動作させているパワー管（内側の２基の6L6）の構成を変更し、サウンドを根本的に変え、モード（チャンネル３のみ）での感覚が変化します。多くのプレーヤーはどちらか一方しか使用していないようです。サウンドの好みの問題で、好きでない方にすると、うまくプレー出来ないという事も聞きます。これは、強力なパラメーターなので、音作りに迷った時には是非試して下さい。

TRIODE（三極管）にすると、中音域のアタックが柔らかくなって、高次倍音が強調され、絹のような滑らかさと瑞々しいサウンドになり、出力の音量が低くなります。この設定にすると、高次倍音が多くなり高音域が爽やかになるので、ハイ・ゲインのソロ・サウンドや、リズムよりも音質を重視したハイ・ゲインのコード・サウンドの表現力が輝きを放ちます。そのサウンドは複雑ですが、ミックスの中で浮いてしまうような事はありません。TRIODE（三極管）は、最終的な出力ボリュームが小さいので、"たわんだビンテージ・サウンド"を探しているのでもない限り、とても低いゲインのコード・サウンドを選択する事は無いでしょう。MARK IV が２つの構成から選択出来るのに対して、オリジナルのMARK II-C+ はTRIODE（三極管）のみです。

PENTODE（五極管）にすると、中域にパンチが加わり、高次倍音が少なくなって音が太くなります。さらに特に低音域のアタックがタイトになって、出力パワーとヘッドルームが大きくなります。PENTODE（五極管）は、大きなピークを許容するダイナミクスと、演奏中に"速さ"を感じさせてくれます。この緊迫感のあるアタックは、PENTODE（五極管）が、リズミックなものからタイトな追従性を必要とするものまで、あらゆるスタイルに対応出来る事を示しています。これは、分厚くタイトな低音域を特徴とする、ハイ・ゲイン・クランチ・コード・サウンドや、ソロ・サウンドに最適な選択と言えるでしょう。

バックパネル: 機能（続き）

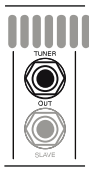
スピーカー:

スピーカー出力には、4オームと8オームのジャックが、それぞれ2基ずつ装備されています。MARK Vは、インピーダンスのミスマッチにはあまりシビアではありませんので、インピーダンスが低過ぎさえしなければ、アンプの損傷を気にする必要はありません。インピーダンスが低過ぎると、パワー管の寿命が短くなります。12インチの8オーム・スピーカーは、8オームの出力端子に接続して下さい。8オームのスピーカーを2台接続する場合は、2台とも4オームの出力端子に接続（この場合は合成抵抗が4オームになるので）して下さい。このマニュアルの最初の方にある、スピーカー・インピーダンスと接続手順のセクションをご覧下さい。

4か8か16オームの4x12キャビネット。キャビネットのインピーダンスが定かでない場合は、キャビネットのリア・カバーを外して、各スピーカーの定格表示を見て下さい。メサの 4x12 や 4x10 キャビネットは8オームで、シリアル-パラレル接続になっています。メサ以外の 4x12 キャビネットは、16オーム４台で、16オームのインピーダンスにしているものが多いようです。4台のスピーカーを並列に接続すると、合成抵抗は4オームになります。スピーカーの接続方法としてはあまり普通ではありませんが、もちろん可能です。

TUNER OUT（チューナー・アウト）:

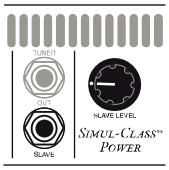
SLAVE（スレーブ）ジャックの上に位置しているこのジャックは、チューナー・アウトです。ここにチューナーを接続すると、スピーカーから音を出さずにチューニングをする事が出来ますので、ライブ・パフォーマンスの時に便利です。この端子にチューナーを接続して、フット・コントローラーの MUTE（ミュート）ボタンをタップすると、スピーカー出力がミュートされます。もう一度MUTE（ミュート）ボタンをタップすると、スピーカーから音が出力されます。



ノート: フット・コントローラーでMUTE（ミュート）機能を使用する為には、EFX LOOP（エフェクト・ループ）のスイッチが、LOOP ACTIVE（ループ・アクティブ）に設定されている必要があります。

SLAVE（スレーブ）:

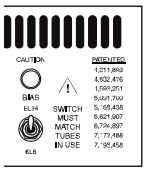
このフォーン端子とコントローラーは、スピーカー出力端子への信号を分岐しています。MARK V のヘッド・バージョン、あるいはコンボ・バージョンを、マスター・プリアンプとして使用して、必要であれば、パワーアンプを追加する事が出来ます。プレーヤーによっては、SLAVE（スレーブ）をエフェクト・プロセッサーへのセンドとして使用し、他のアンプをウェット用として使用している場合もあります。



ノート: SLAVE（スレーブ）から出力した信号を、エフェクト・ループのリターンに接続すると、フィードバックループが出来てしまいますので、やらないで下さい。マイクをPAシステムのスピーカーに向けたときの様に、高周波のハウリングを起こします。

BIAS SELECT（バイアス選択）:

この小さなトグル・スイッチは、パワー管を、明るくて広い帯域の倍音成分を豊富に含んだ、EL34タイプに交換する時に使用します。パワー管を変える事で、サウンドが全く変わりますので、目的のサウンドにあったパワー管を設置して、そのパワー管にあったバイアスを選択して下さい。隣のLEDが、バイアスの設定がEL34に合っているかを知らせます。



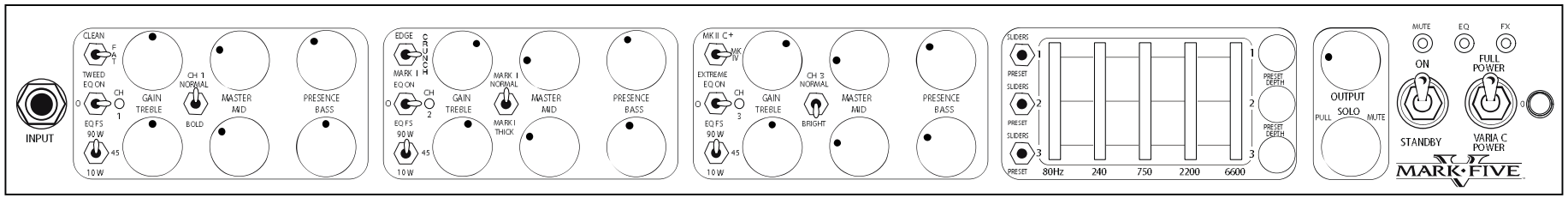
ノート: BIAS SWITCH（バイアス・スイッチ）の設定を使用している真空管のタイプに合わせる事は、とても重要です。この設定を誤ると、アンプを損傷する事がありますので注意して下さい。パワー管を交換した時は常に、正しい真空管がこのスイッチで選択されている事を確認して下さい!

選択したパワー管のタイプに関わらず、使用中に真空管が破損したときの為に、パワー管とヒューズの予備は最低 1 セットずつ携帯しておく事を推奨します。この小さな心がけが大切です。

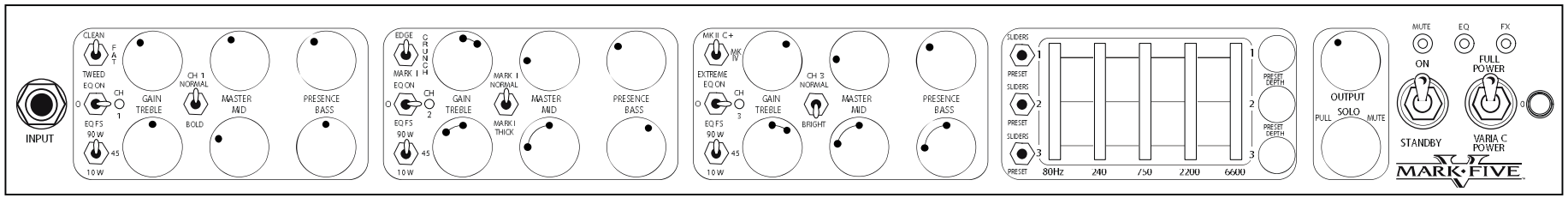
ノート: AC POWERスイッチをVARIAC POWERに設定すると、EL34（6L6も同様）の能力を最大限に引き出す事が出来ません。この設定のサウンドを好むのであれば、真空管の問題が起きる可能性は低くなり、パワー管を良い音で使用出来る期間が長くなります。

サンプル・セッティング

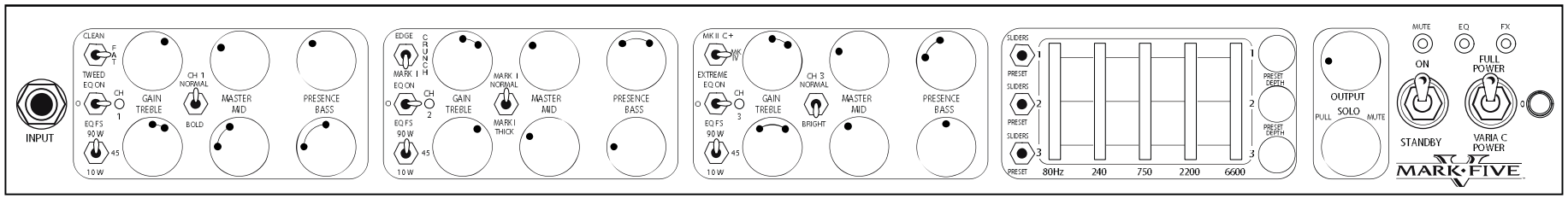
Workhorse



Tight, Urgent, Sing

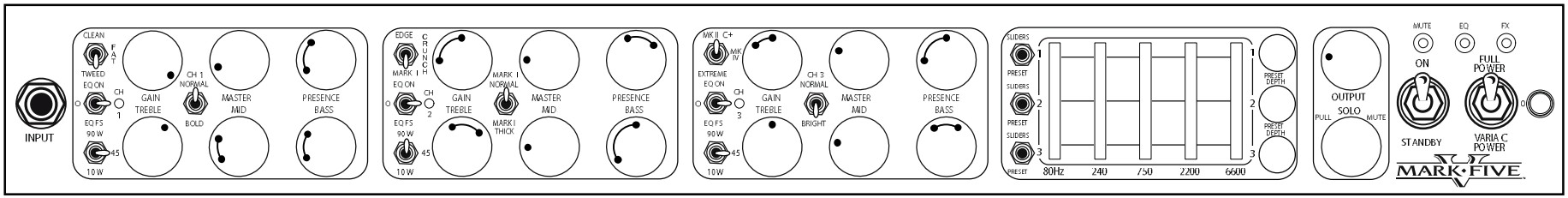


Fat Lady

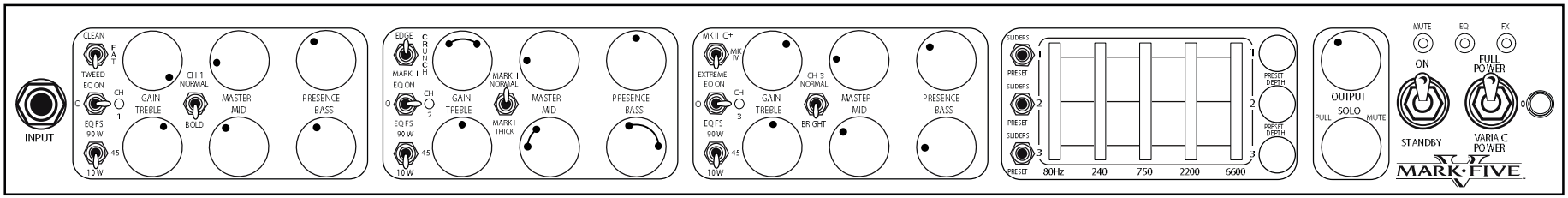


サンプル・セッティング

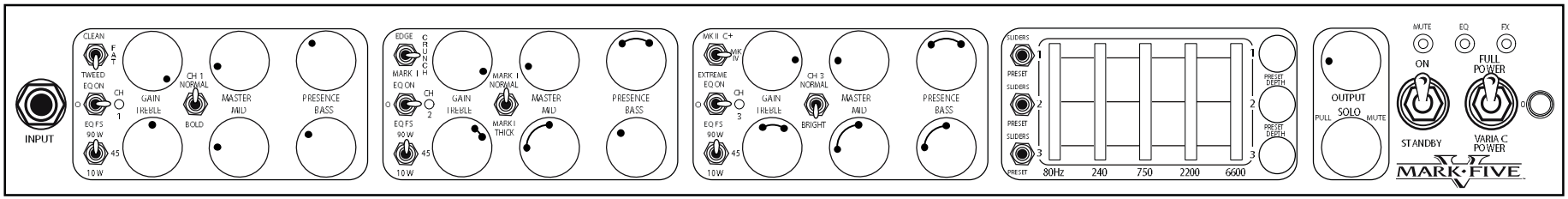
All Blues



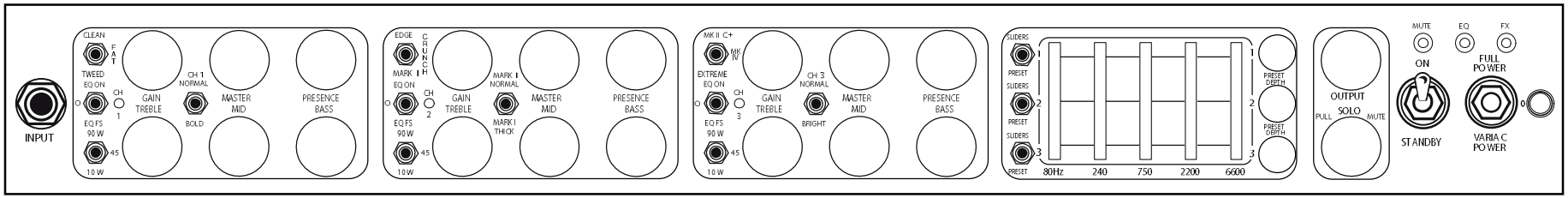
Attitude

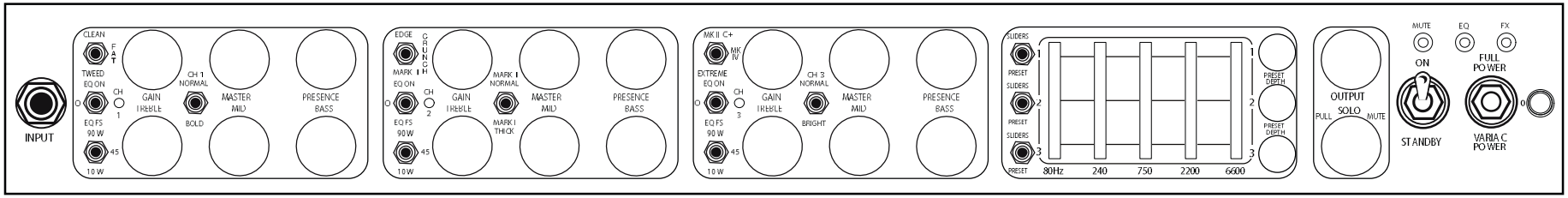


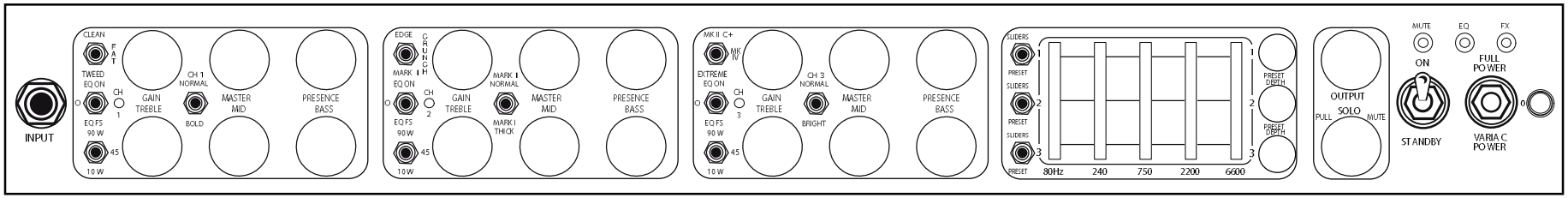
Gain & More Gain



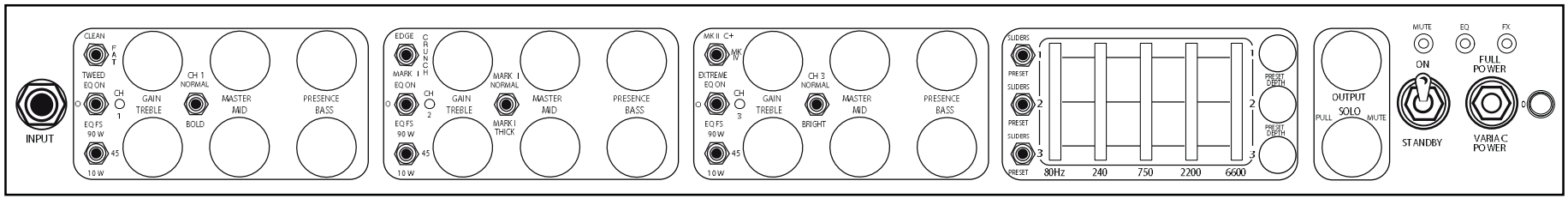
ユーザ・セッティング・テンプレート

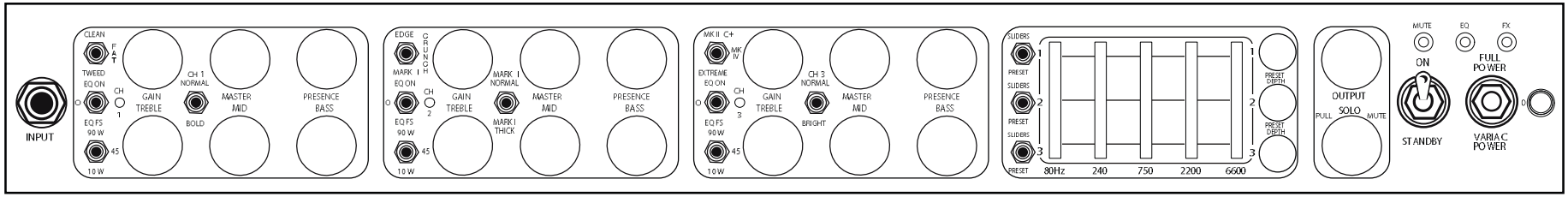


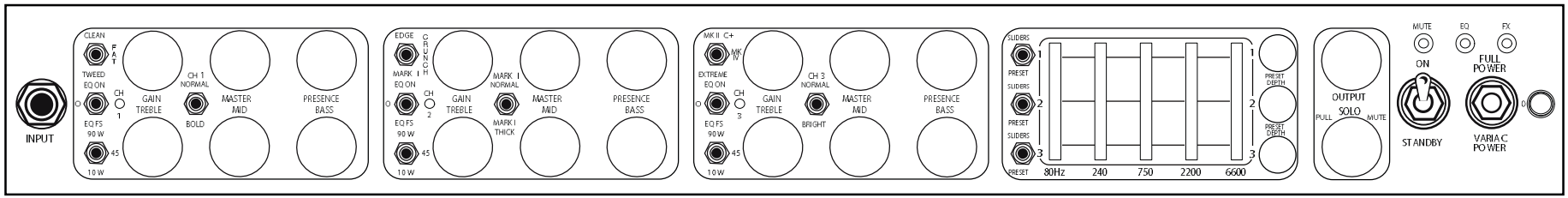




ユーザ・セッティング・テンプレート







スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド:

インピーダンス:

スピーカー接続において最も基本的で重要なのは、位相を正相にする事です。これにより素晴らしい音を出力する事が可能になります。これはそんなに難しい事ではありません。負荷についていくつかの事と、最適な負荷でスピーカーを接続する事を理解すれば良いのです。

MESA/Boogie アンプは、４オームと８オームを扱う事が出来ます。真空管アンプは、４オーム未満でドライブする事はしないで下さい。;これを行うと、出力トランスを損傷する可能性があります。２オームを扱う事の出来る数少ないアンプ（例えばMESA（メサ）のBass 400+）であれば大丈夫です。反対に高い抵抗値（例えば１６オーム等）の場合はアンプを傷める事はありません。

ミス・マッチング:

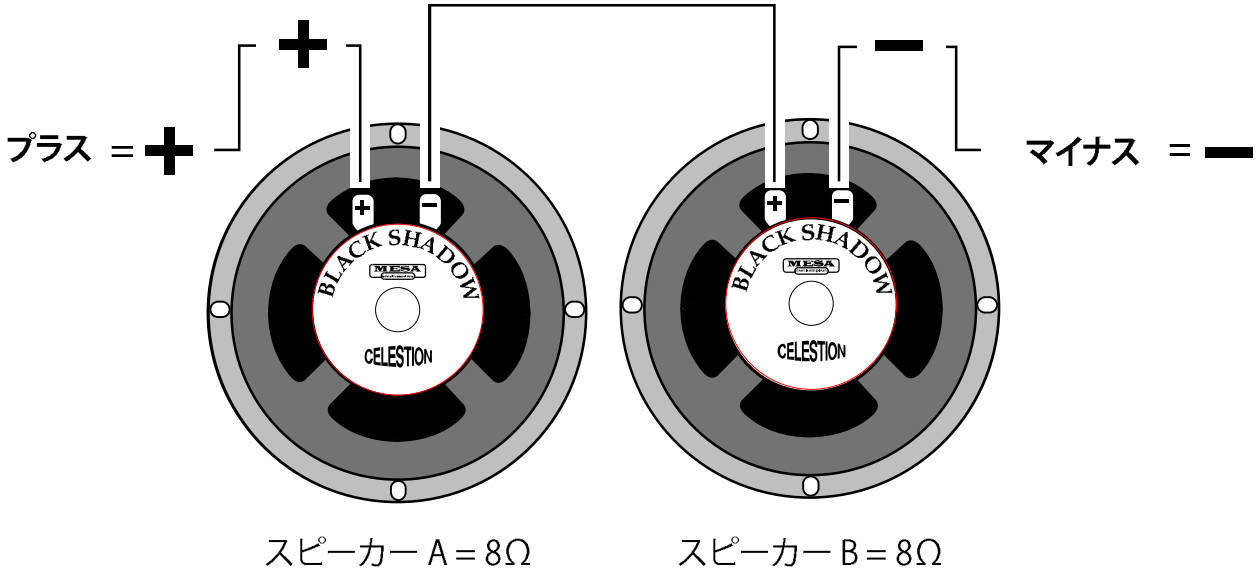
高い抵抗値（例えば８オーム出力を16オームのキャビネットに接続）でドライブすると、少しフィーリングが異なり、レスポンスが際立った感じになります。少しのミス・マッチであれば、トーンが若干暗く、出力とアタックが少し弱く、レスポンスが少し速くなる程度です。スピーカー・キャビネットが複数になると、ミスマッチは選択肢の１つになるほどです。

キャビネット・インピーダンスの算出方法:

お持ちのスピーカーが１台の場合は、そのスピーカーのインピーダンスとアンプのインピーダンスを合わせて下さい。複数のスピーカーをお持ちの場合は、アンプにかかる負荷を計算しなければなりません。複数のスピーカーの接続方法は次の３種類になります。:

シリーズ（直列）:

スピーカーを直列に接続した場合、それぞれのスピーカーのインピーダンスを単純に加算します。例えば、８オームのスピーカーを２台直列に接続した場合は、16オームになります。



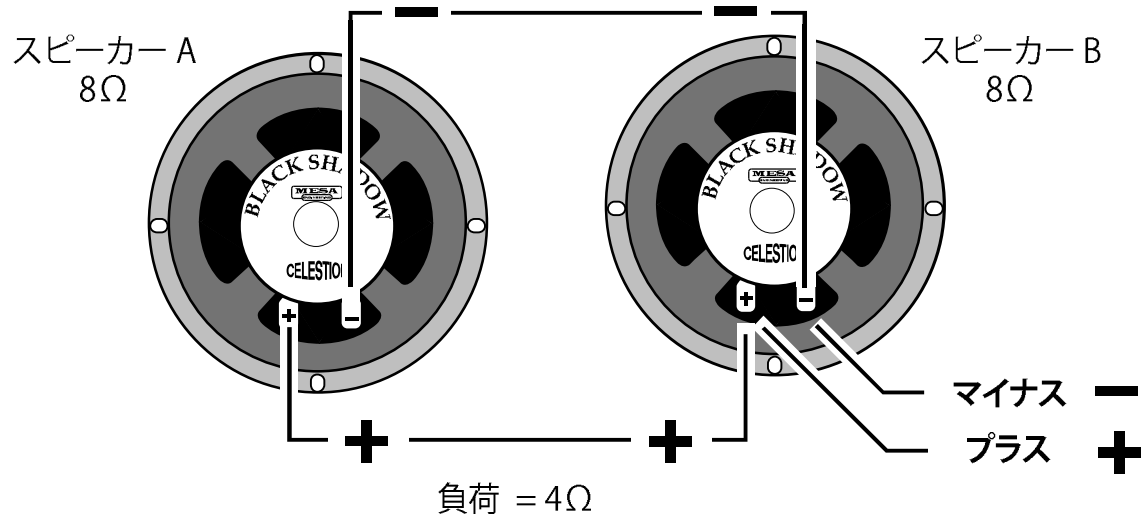
スピーカー A＝8Ω　　スピーカー B＝8Ω

シリーズ（直列）: スピーカーAのマイナス端子と
スピーカーBのプラス端子を接続

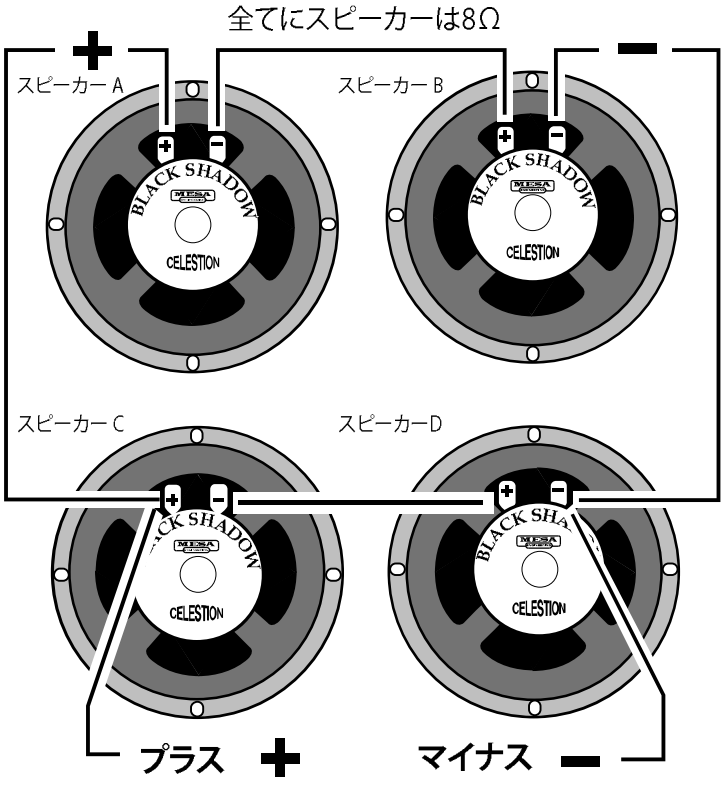
スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド（続き）：

パラレル（並列）：

スピーカーを並列に接続した場合、スピーカーの抵抗値は下がります。２台の８オーム・スピーカーを並列に接続した場合、負荷は4オームになります。接続するスピーカーが全て同じ抵抗値であれば計算は簡単ですが、異なる抵抗値のスピーカー（例えば、8オームと4オーム、16オームと8オーム等）を並列に接続する場合は、少しややこしくなります。計算式は、それぞれの抵抗値をかけ算した数値を、それぞれの抵抗値を足し算した数値で割ります。例えば８オームと４オームであれば、8×4÷（8+4）＝2.6666オームになります。パラレル（並列）：スピーカーAのプラス端子とスピーカーBのプラス端子、スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのマイナス端子をそれぞれ接続。



シリーズ（直列）とパラレル（並列）の組み合わせ：



これは、２セットの直列接続したスピーカーを並列に接続する組み合わせです。ここで重要なのは、全てのスピーカーの合成抵抗値が低くなり過ぎてアンプに負担をかけない様にする事です。

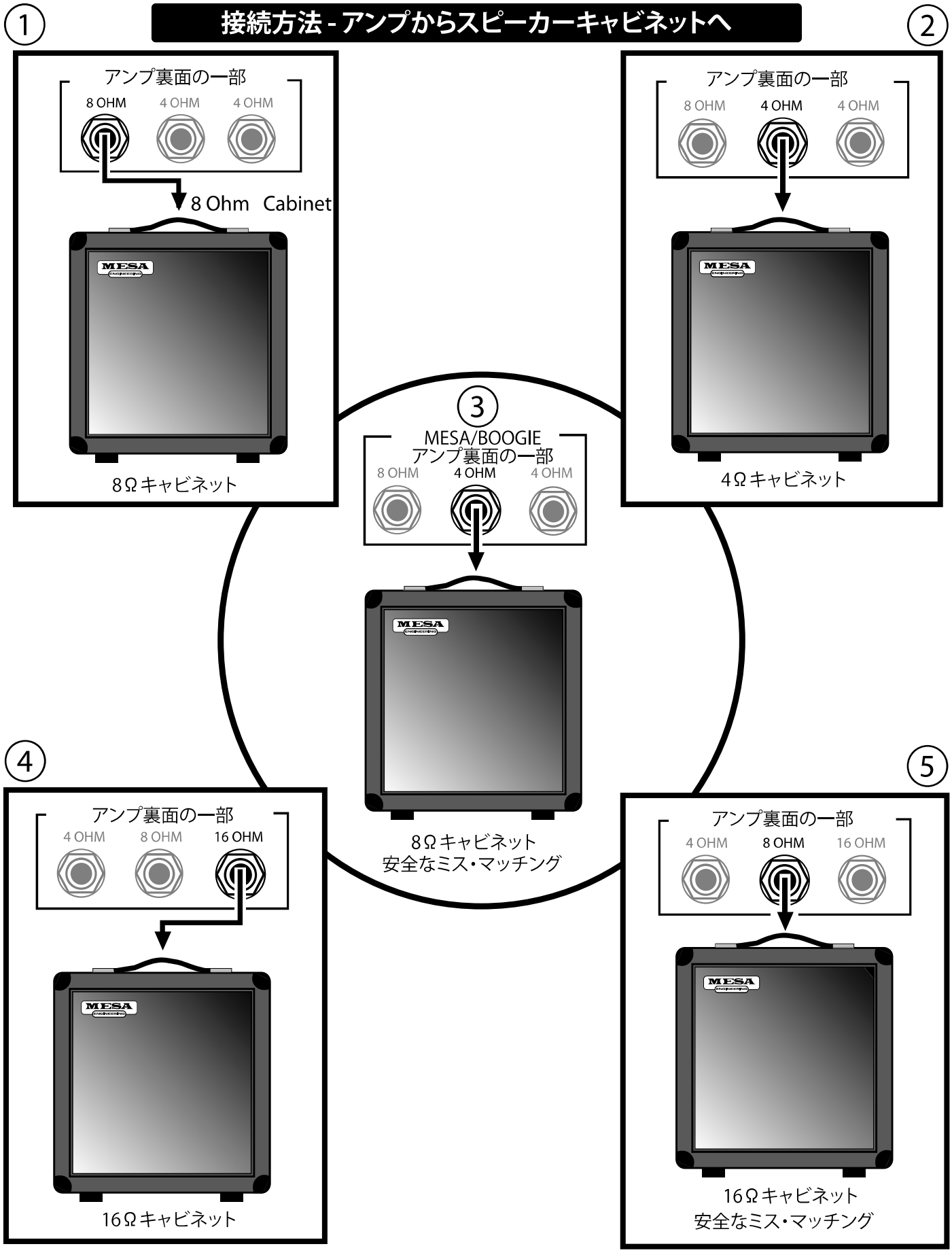
スピーカーAのプラス端子とスピーカーCのプラス端子を接続。

スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのプラス端子を接続。次にスピーカーCのマイナス端子とスピーカーDのプラス端子を接続。

そして最後にスピーカーBのマイナス端子とスピーカーDのマイナス端子を接続します。

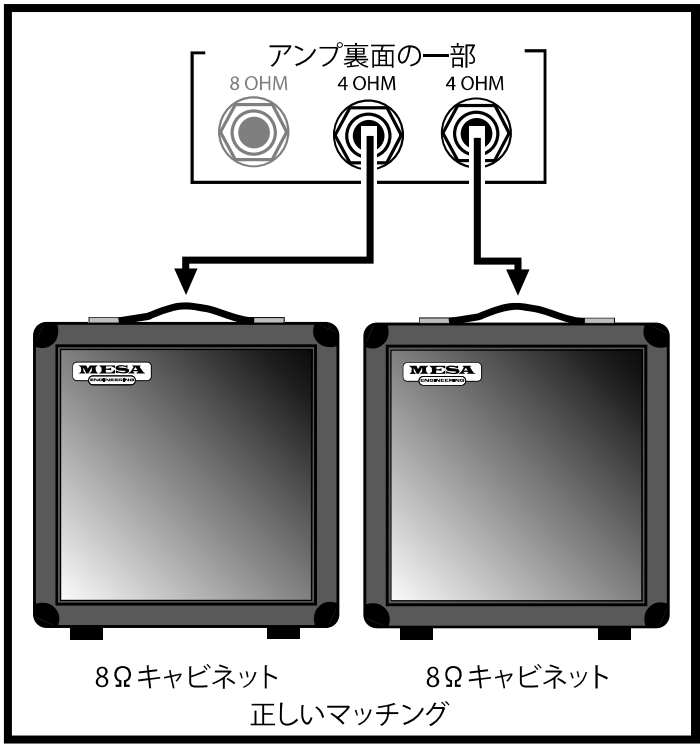
４台の８オーム・スピーカーをシリーズ・パラレル接続した時の合成抵抗値は、８オームになります。

接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

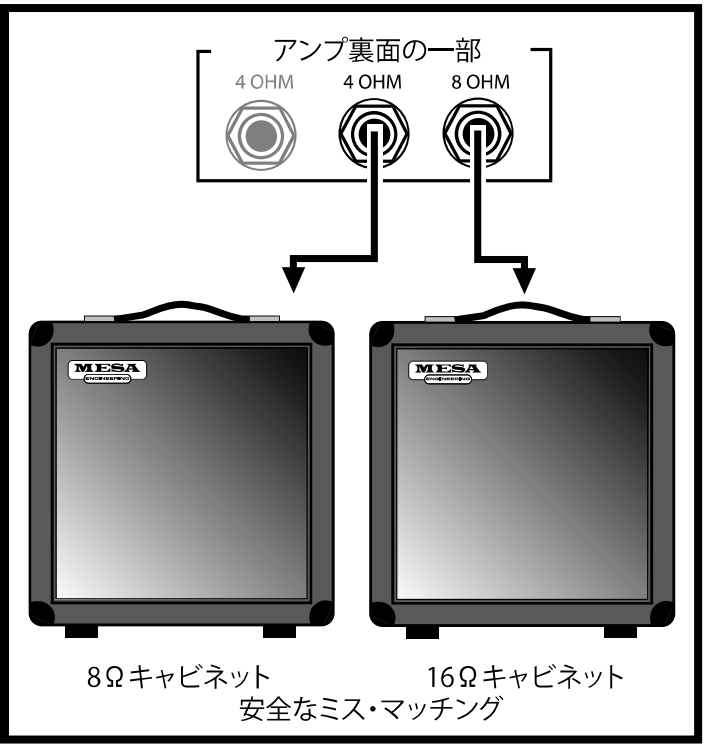


接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

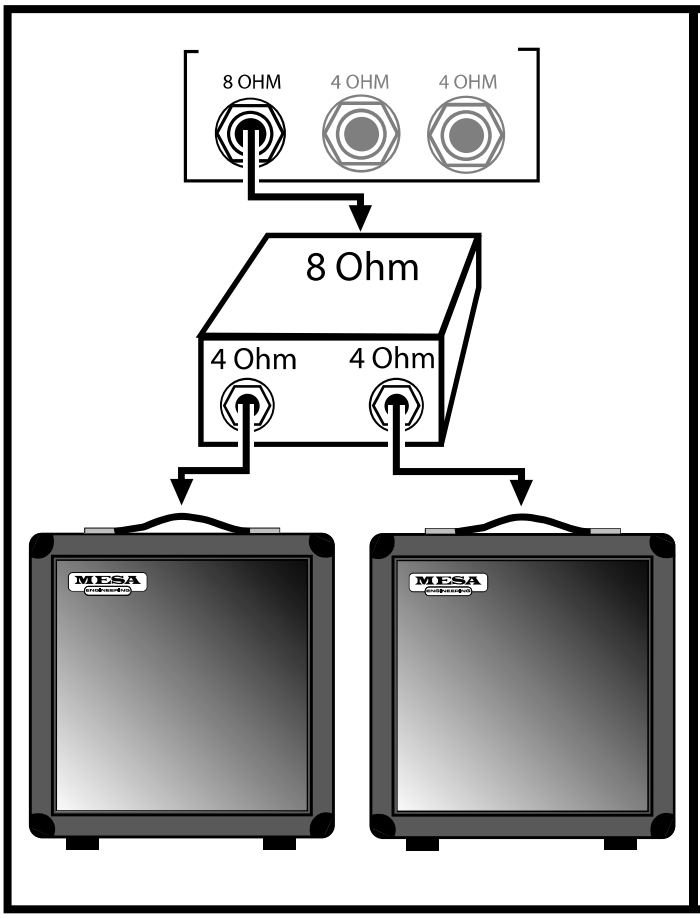
⑥



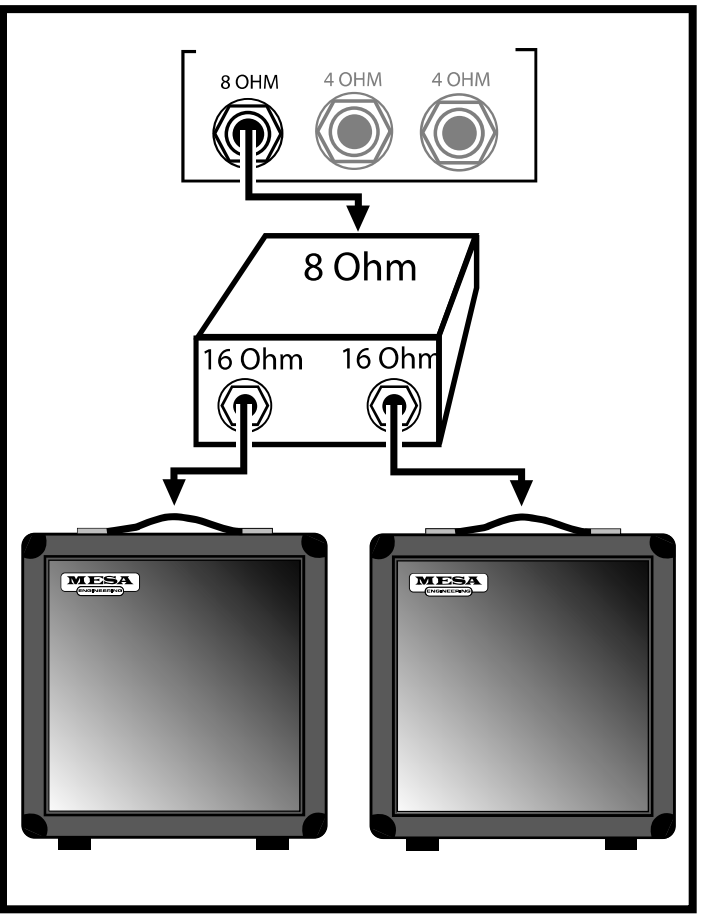
⑦



⑧

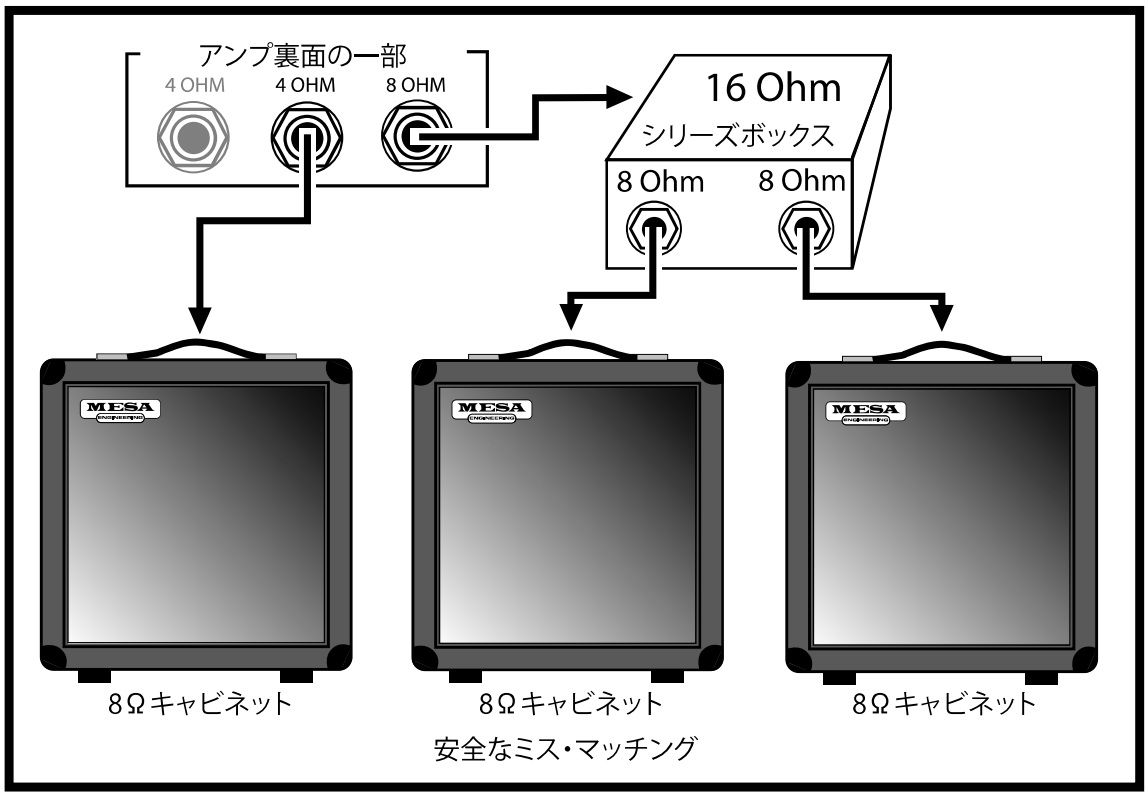


⑨

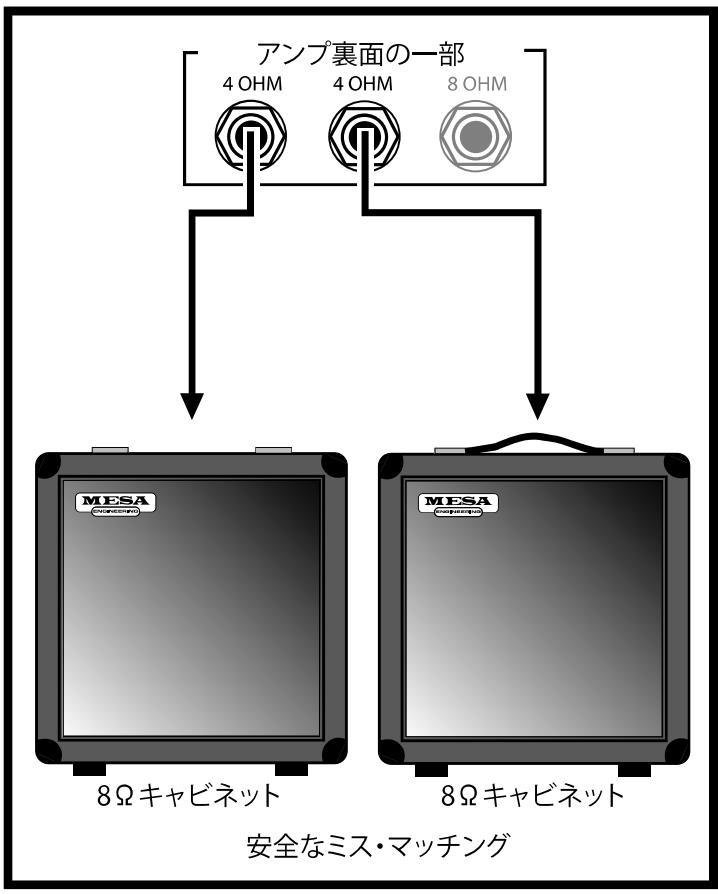


接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

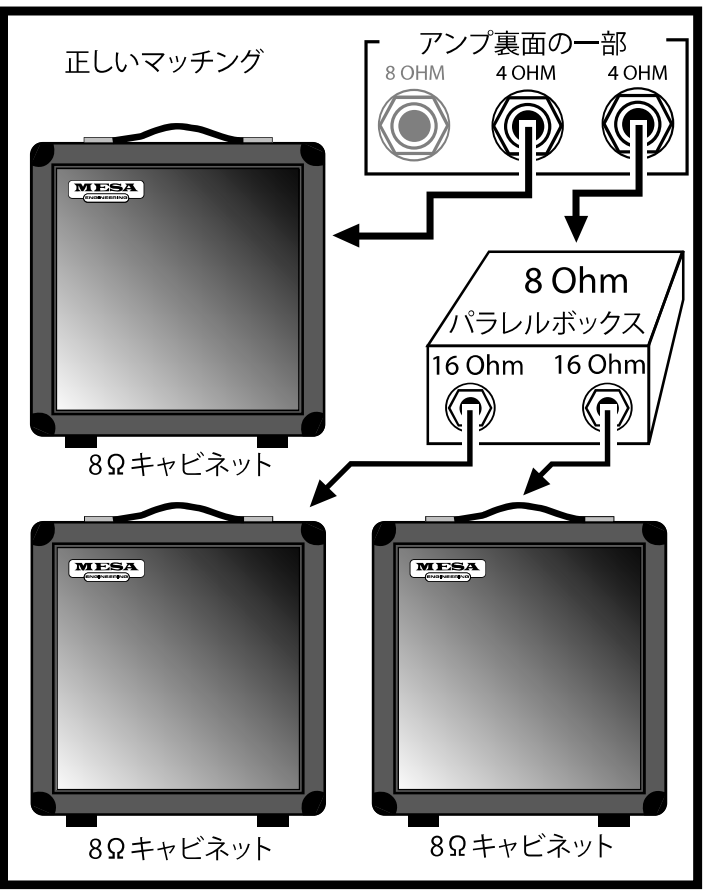
⑩



⑪

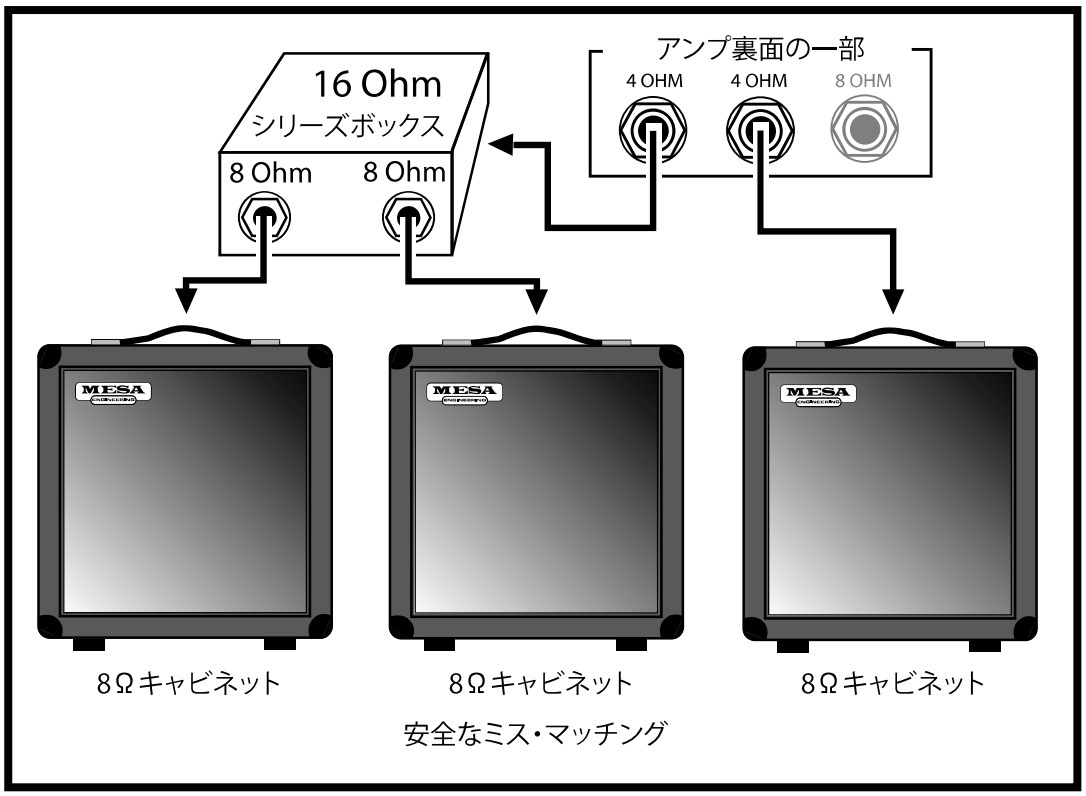


⑫

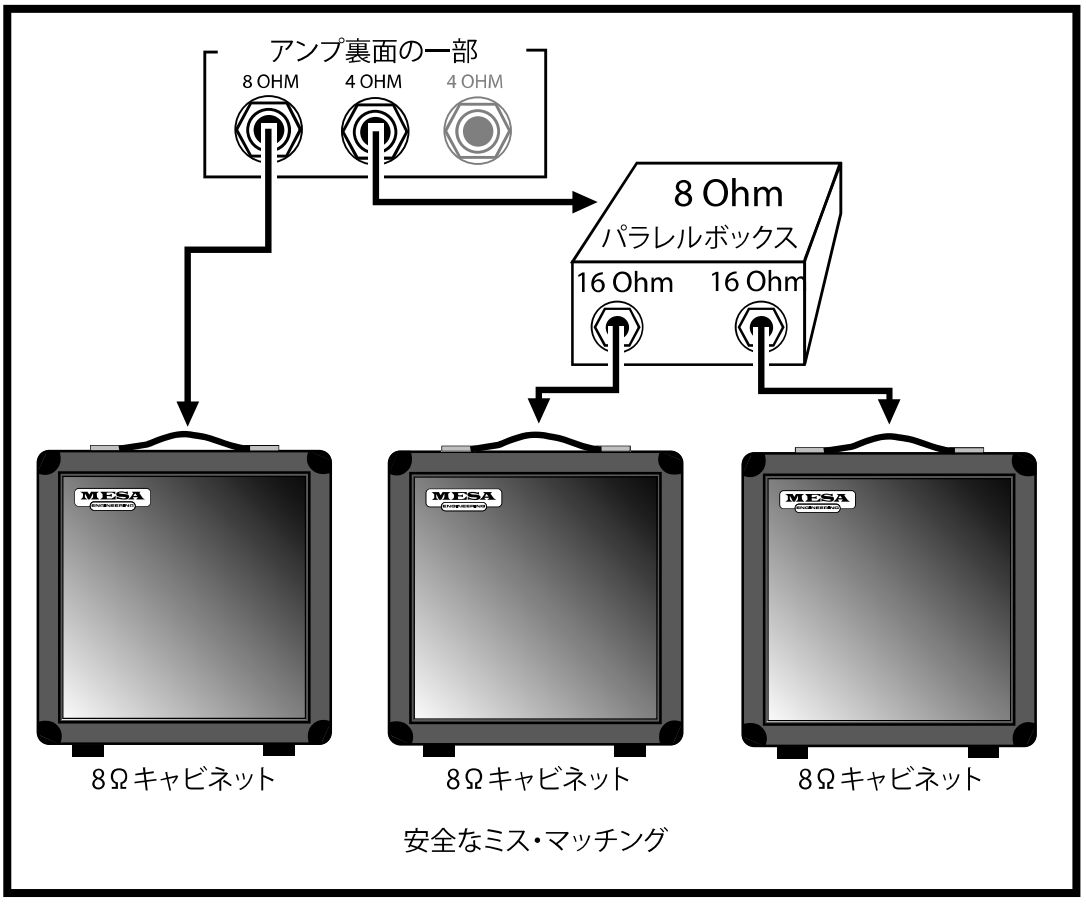


接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

⑬



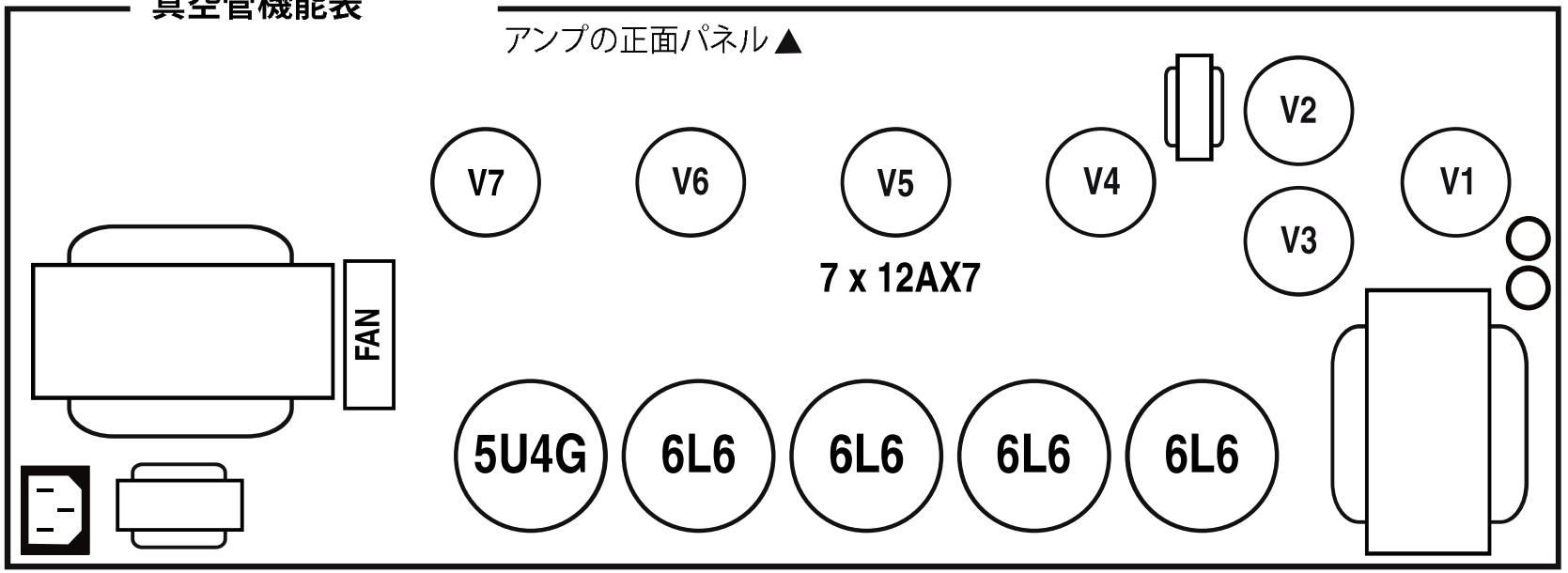
⑭



Mark V

真空管を交換する前に必ず電源を切ってください。

真空管機能表



V1A - 入力段
V1B - CH1/CH3ゲイン第2段,
CH2ゲイン第3段

V2A - CH2ゲイン第2段
V2B - 該当なし

V3A - CH1/CH3ゲイン第3段,
CH2ゲイン第4段

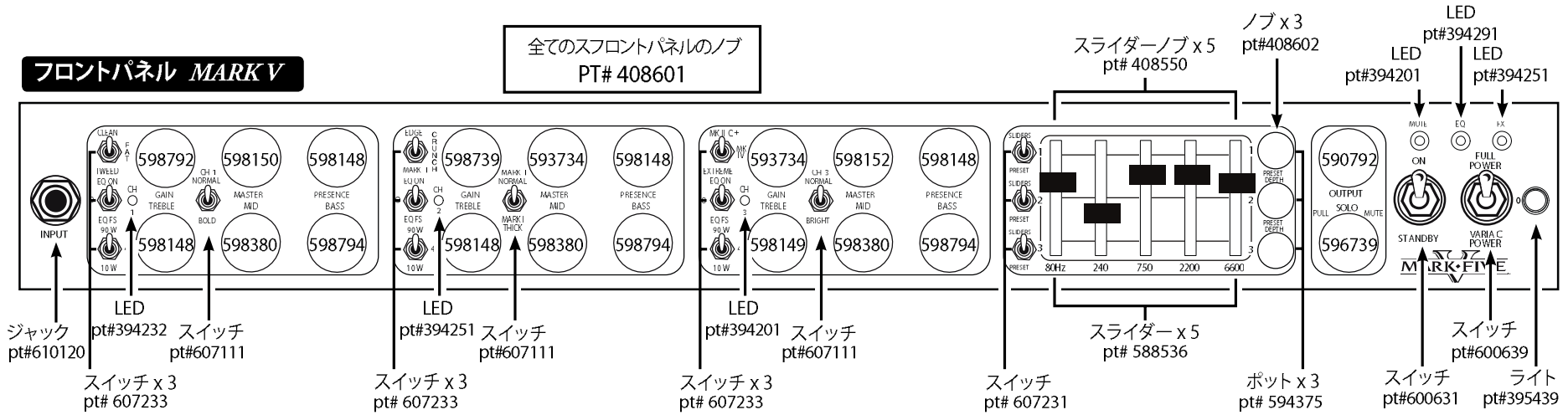
V4A - リバーブ・センド
V4B - CH3ドライブ第2段

V5A - CH3ドライブ第1段
V5B - リバーブ・リターン

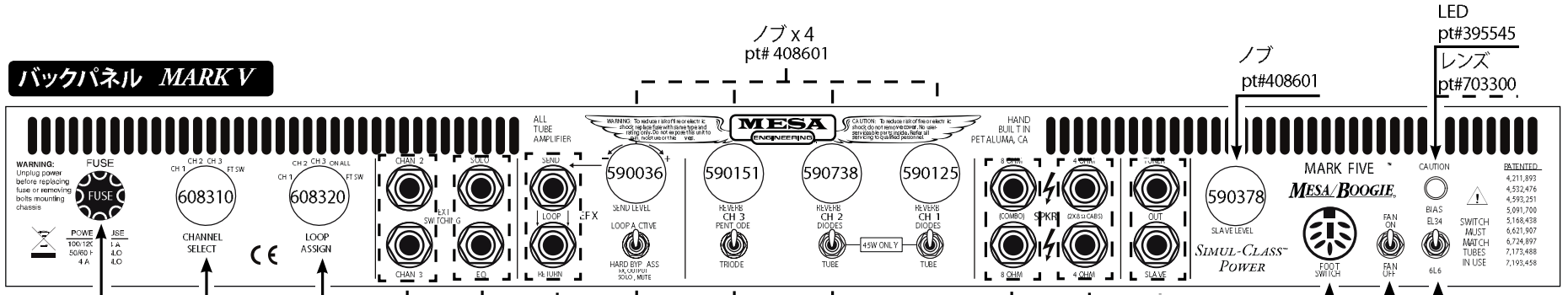
V6A - CH3ゲイン第4段
V6B - エフェクト・リターン

V7A&B - ドライバー、フェーズインバーター

フロントパネル *MARK V*



バックパネル *MARK V*



The Spirit of Art in Technology

MESA ENGINEERING

(707) 778-6565 FAX NO. (707) 765-1503
1317 Ross Street Petaluma, CA 94954
USA

株式会社 キョーリツコーポレーション
www.kcmusic.jp / www.mesaboogie.jp

□本社・名古屋営業所 〒468-0002 名古屋市天白区焼山1-813
TEL 052-847-5300(代) FAX 052-847-5310
□東京営業所 〒103-0012 東京都中央区日本橋堀留町1-5-11 堀留Dビル4F
TEL 03-5614-2081 FAX 03-5614-2166
□大阪営業所 〒564-0051 大阪ヶ吹田市豊津町11番34号 第10マイダビル301号
TEL 06-6310-7833 FAX 06-6310-7858
□福岡営業所 〒812-0029 福岡市博多区古門戸町2-4 KSコモンドビル201号
TEL 092-271-1125 FAX 092-271-1203
□仙台営業所 〒980-0811 仙台市青葉区一番町1丁目16-23 SLSビル3F
TEL 022-212-9311 FAX 022-212-9322
□札幌営業所 〒060-0061 札幌市中央区南一条西六丁目15-1 札幌あおば生命ビル9F
TEL 011-242-3323 FAX 011-242-3325